

日ノ出国、はいふり世
界へ

冬吉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2020年9月25日に勃発した西南諸島での極東軍との戦いから三ヶ月が経過した。12月25日、日ノ出国内ではクリスマススムードの最中、震度3の地震が全土で記録した。その直後、諸外国からの通信が途絶え、政府は、三ヶ月前の出来事以上にパニック状態に陥った。日ノ出政府は、状況を確認するため、各方面艦隊から駆逐艦隊及び空母艦隊を派遣した。結果、日ノ出、想像を超える状況を知る事となった。

※本作品は、前作の「日ノ出国VS極東社会主義国」のその後を作品です。

注意点

・本作に登場する人物・団体などは、全てフィクションです。

- ・ 注意事項の付け出しの可能性もあります。
- ・ 最新話は、定期的に更新してまいります。

目次

はいふり世界へ転移

プロローグ

第一話

第二話

第三話

第四話

第五話

第六話

第七話

第八話

第九話

第十話

1

4

7

11

17

22

28

34

38

41

47

第十一話

第十二話

第十三話

第十四話

日本存亡の危機、敵部隊、日本侵攻

第十五話

第十六話

第十七話

第十八話

第十九話

89

第二十話

92

――

――

――

――

――

予兆

対策

展開と勃発

――

本当の戦争

異世界初の対空戦

異世界初の対空戦

後編

53

56

59

63

69

73

78

84

前編

第二十一話

第二十九話 決戦 後編

132

2016年の海洋実習の前日譚

告

報

第三十話 新鋭艦、横須賀配備

第二十二話 対潜戦闘、再び

101

138

第二十三話 いしがき、離脱

107

第三十一話 航海訓練

142

第二十四話 報告と政府の動向

第三十二話 横須賀、着任

146

110

第三十三話 みくら乗員との紹介

第二十五話 異世界での空中戦 前編

149

第三十四話 辛き記憶を越えて

第二十六話 異世界での空中戦 後編

154

第三十五話 元軍人の来日

118

第二十七話 叶わぬ生存

122

第三十六話 桑田の訪問

160

第二十八話 決戦 前編

127

第三十七話 訓練

164

127

	第三十八話	新鋭艦「はるみ」への招待	168	205	第四十五話	入学式	209
	第三十九話	海賊との戦い 前編			第四十六話	出航	214
173	第四十話	海賊との戦い 中編			第四十七話	集合地点の途中	222
178	第四十一話	海賊との戦い 後編			第四十八話	突然の砲撃	227
	186				第四十九話	反乱容疑	237
	第四十二話	基地への外出	197		第五十話	関係者会議	242
	第四十三話	意外なところからの依頼		245	第五十一話	所属不明艦、探知	
本編	201				前編		249
	第四十四話	横須賀女子海洋学校			第五十三話	アドミラル・シユペー戦	255
					後編		

	第五十四話	海中からの刺客	—	264
272	第五十五話	伊201との戦闘		
	第五十六話	戦闘後	—	282
	第五十七話	物資調達	—	288
	第五十八話	買い出しと交流	—	292
298	第五十九話	調達終了と駆引き		
	第六十話	人魚同士の尋問	—	304
	第六十一話	晴風、確認	—	309
	第六十二話	砲雷長の暴走	—	315
322	第六十三話	反乱容疑、取り消し		
	第六十四話	武蔵発見と東舞校における「はるみの話」	—	328
	第六十五話	東の間の平穩	前編	
332	第六十六話	東の間の平穩	後編	
338	第六十七話	武蔵、発砲	—	343
	第六十八話	日ノ出艦隊対武蔵		
348	第六十九話	平穩な歓迎会	—	353
	第七十話	武蔵との戦い	—	358
367	第七十一話	本国介入の恐れ		

第七十二話 戦闘の後

373

第七十三話 武蔵の対応と冷戦時代

その後の日ノ出の世界

382

はいふり世界へ転移

プロローグ

2020年9月25日、突如として西南諸島に侵攻した極東軍との戦闘から三ヶ月が経った。同年12月25日、今日は、クリスマスであつてか、軍港に近い市街地ではクリスマスに関連するセール等で歩道は、多くの買い物客でごった返しており、あの時の戦闘で一時的に街から離れ、静まり返っていた市街地の様子が嘘みたい見えた。

「ある軍港」

磯口「秋沢さん、極東国との戦闘からもう三ヶ月が経ちましたね。」

秋沢「そうだな、あの戦いが終わってから三ヶ月か、時が経つのは、とても早いものだ」

磯口「ええ、三ヶ月前の今日、我が国の領土である西南諸島が極東に占領され、それを奪還するため、演習に出ていた我々が先遣艦隊として派遣され、その直後に相手の潜水艦からの攻撃で電気系統がやられ、一時は危機的状況になりましたが優秀な乗組員のおかげで早期に復旧し、艦載機を上げる事が出来ましたからね。」

秋沢「戦闘における期間は、三週間ぐらいだったが私は、一か月半に感じたよ」

磯口「そうですね、緊張の高まる指揮所で時間を気にする事なんて、ありませんでしたかたね」

秋沢「そうだな、あ、そういうえば、あかぎの定期点検が今日までだったな」

磯口「はい、今日の午後には、完了すると整備班が言っていました」

秋沢「そうか、今の世の中は、クリスマスで一色だな」

磯口「でも、その後は、大晦日があり、午前0時になれば新年ですよ」

秋沢「そうだな、正月は、久々に自宅に帰ってゆつくり過ごそうかな」

磯口「そうですね。私も早く、自宅に戻って、子供の顔がみたいものです」

クリスマス後の休暇での過ごし方を話し合っていた時であった。

秋沢「うん？地震か？」

磯口「そうですね。最近、多いんですよ」

秋沢「大きい地震が起きない代わりに小さい地震がここ数日、続いているからな」

磯口「何も起きなければ、いいのですが・・・」

そう二人は、願っていた。だが、その直後から諸外国からの通信が突然、途絶えしまし、何度も呼びかけても応答がなかった。政府関係者は、通信ケーブルの故障したのではないかと疑ったが正常に動作しているのに関わらず、応答がない事から直ちに状況を確認するため、空母艦隊の派遣を決定し、まずは、朝鮮半島の方に向かわせる事にした。

秋沢「今度は、諸外国との通信が取れなくなっているとは、」

磯口「一体、何が起きているのでしょうか・・・」

秋沢「私にも分からん、とにかく状況を確認するため、まずは、朝鮮半島の方に向かうぞ。」

磯口「了解です。出港よーい。」

秋沢「現在、我が国は、諸外国との通信が一切出来ない状態に陥っている。我が艦隊の任務は、状況の確認のため朝鮮半島を目指す。出港よーい」

数分後、秋沢艦長が指揮する第509 即応機動艦隊は、日ノ出国海軍基港を出航した。

続く

第一話

出航から三日目になるが第509艦隊は、朝鮮半島を中々、視認できずにいた。

乗組員「磯口副長、何か変ですよ。」

磯口「どうした、阿河三尉、何が変なんだ？」

阿河「出航からもう三日も経つのですが、朝鮮半島が視認出来ないのは、変に感じませんか？」

磯口「そうだな、朝鮮半島までは、今日中には視認する事が出来る筈なのだが、三日経つても見えないのは、おかしい」

阿河「副長、艦長に伝えてみてば、どうでしょうか」

磯口「分かった。艦橋からC I Cへ」

秋沢「こちら、C I C。副長、どうした？」

磯口「我が艦隊が出航してから三日経ちますが、まだ半島を視認出来ずにいます」

秋沢「なるほど、確かに出航から一日足らず、半島を目視できる筈なのだが、うーむ」
磯口「艦長、早期警戒機を飛ばし、情報収集を行つては、どうでしょう」

秋沢「そうだな、周辺海域の状況さえ、確認出来れば、何か分かるかもしれないな。」

副長、早期警戒機に出撃命令を出してくれ」

磯口「了解しました」

数十分後、航空母艦あかぎから早期警戒機E-2が発艦した。

発艦から1時間半後

警戒機「ホーク1からあかぎへ」

柳沢「こちらあかぎ。」

警戒機「艦隊前方から3隻の艦影を確認しました」

柳沢「了解した。艦長、我が艦隊の前方から所属不明艦3隻を確認したとの事です」

秋沢「そうか、所属不明艦を目視するできる距離まで接近するか、柳沢三佐、全艦に

対水上警戒を発令、総員配置を指示してくれ」

柳沢「了解、あかぎより達する、全艦、対水上警戒を厳となせ、但し、相手からの攻

撃がない限り、発砲を禁ずる」

乗組員「ウィッグデツキより艦橋へ、所属不明艦隊を目視で確認、形状から見てLC

Sクラスです」

磯口「沿海域戦闘艦か、北米合衆国が保有しているのは、分かるが朝鮮半島が有して

いる情報は、聞いた事がないが」

柳沢「副長、所属不明艦から通信です。しかし、訳のわからない事を言っております

が」

磯口「代わろ、こちら日ノ出海軍、第509即応機動艦隊、旗艦「あかぎ」。」

???「こちら、日本国ブルーマーメイド「みくら」、貴艦隊の所属する国家は、存在しません。直ちに武装を解除し、停船せよ。従わない場合、海上保安法に基き実力行使も視野に入れます！」

磯口「確かに相手は、何を言っているのか分からんが、従わなければ攻撃するという事か」

秋沢「私に対応しよう。」

磯口「艦長、」

秋沢「こちらあかぎ艦長の秋沢一佐だ。我が艦隊は、攻撃の意思は、ない。情報交換のため貴官達と会談を行いたい。それでも武力行使をする場合、自衛手段として我々も武力を行使しざるえない事を警告する」

???「分かりました。そちらの要件を受け入れましょう」

無線の後、みくらを含む3隻のブルーマーメイド艦隊は、509艦隊付近に停泊した。秋沢と磯口は、ブルーマーメイドとの会談に向けてあかぎに搭載されている内火艇でみくらに向かった。

続く

第二話

秋沢と磯口を乗せた内火艇は、ブルーマーメイド所属の「みくら」に到着した。

艦長の秋沢が目にしたものは、VLSであった。そもそもLCSは、沿岸部を出没する小型の高速ボートからの攻撃に対抗するために建造された船であり、装備もどの軍艦よりも艤装が少ない。だが、このみくらを含む艦艇には、VLSが装備されている事から自分たちが知っているLCSとは、異なると感じた。

そう考えているとみくらの乗員である2人が敬礼し、名乗った。

??? 「海上安全整備局、安全監督室情報調査隊所属、福内典子です」

??? 「同じく平賀倫子です」

そうして、秋沢達も敬礼し、自らを名乗った。

秋沢 「日ノ出国海軍 第509 即応機動艦隊 旗艦「あかぎ」艦長の秋沢吾妻です」

磯口 「同じく副長の磯口和樹です」

そして、秋沢達は、福内と平賀に連れられて艦内の部屋に入り、そこで会談が行われた。

平賀 「まず、秋沢艦長は、国籍を教えてください」

秋沢「私は、日ノ出国の人間です」

福内「申し訳ないのですが、我々が持つ情報には、日ノ出国に関する情報がありません」

秋沢「そうですか、あのお聞きしたい事があるのですが」

平賀「何でしょうか？」

秋沢「あなた方の国籍は、何処ですか」

福内「我々は、日本国ですが、それがどうしましたか」

秋沢「実は、言うと我々の情報には、”日本”という国家が存在しません」

福内・平賀「え!？」

これには、二人とも驚いた。

自分達は、日ノ出国という国を知らないと同時に秋沢達も日本という国も知らないという。

平賀「それは、一体どういう事ですか？私達の国を知らないなんて・・・」

秋沢「福内さん、今、何年何月ですか？」

福内「え、2015年10月25日ですが、それが何か？」

秋沢「やっぱりか」

磯口「艦長、どうしましたか？」

秋沢「平賀さんと福内さん、聞いて驚かないでください。我々がいた日ノ出国では、
2020年12月25日なのですが」

平賀・福内「!？」

二人は、驚きを隠せずにいた。何と秋沢達がいた日ノ出国の時間は、5年後のクリスマスである事から今、目の前にいるのは、未来の人間、しかも別世界の人間である事だけ。

平賀「でも、それだけでは、あなた方が未来の人間という証拠には」

秋沢「もう一つは、あなた方を目視する以前、レーダーには、一つも飛行物体が確認できないなかったのですが、この世界には、航空機と呼ばれる乗り物は、ありますか？」

福内「航空機とは、どのような物でしょうか、我々が知っているのは飛行船又は気球ぐらいですか」

秋沢は、二人が航空機という言葉すら、知らないという事に驚いた。

秋沢「では、我々が未来の人間、しかも別世界の人間である証拠をお見せします」
そう言って、四人は、部屋を出て艦橋に向かった。

平賀「何も起きませんが・・・」

と言った時であつた。

ブルマー隊員「レーダーに反応! 高速で本艦の横を通過します!」

その瞬間、みくらが激しい揺れに襲われた。

平賀達は、正体を確認するため外に出て、空を見上げるとそこには、航空母艦「あかぎ」の艦載機が飛行していた。彼女達は、衝撃的だった。

福内「秋沢艦長、あれは、何ですか？」

秋沢「あれは、我が空母あかぎに搭載されているF-25という戦闘機です」

平賀「あれが航空機、ヘリウムガスを使わない空を飛ぶ乗り物」

秋沢「これで我々が別世界の人間である事が証明されましたかな？」

福内「はい、あれを見せられたら、認めざるを得ません」

平賀「でも、これを安全監督室に何と言えよ」

秋沢「そろそろ、我々も報告をするため、あかぎへ戻ります」

平賀「何処に報告するのですか？」

秋沢「我が国にある省庁、国防省です」

平賀・福内「国防省!？」

続く

第三話

秋沢「我々は、国防省に現状を伝えなければならぬので、あかぎの方に戻ります」

平賀「あの、言いにくいのですが・・・」

秋沢「はい」

平賀「私達もあなた方の政府関係者にこの世界の状況をお伝えしたいのですが・・・」

磯口「艦長、どうされますか」

秋沢は、一瞬、悩んだが自分から言うより平賀達にこの世界の事を伝え方が説得が効果的と判断。

秋沢「分かりました。貴官達を空母あかぎの方へお連れします」

福内「同様、資料を必要になるので用意します」

秋沢「ご協力に感謝します」

そして、平賀達は、みくらの資料室から日本の歴史と資料を必要な分まで集め、飛行甲板に向かった。しかし、彼女達は、何故、飛行甲板からあかぎへ向かうのか理解出来ずにいた。

福内「お待たせしました」

磯口「すいません、必要な資料を用意してください」

平賀「いえ、それより秋沢一佐、どうして、飛行甲板なのですか？内火艇の方が早いと思うのですが」

秋沢「いえ、別の物で移動するので、もう来るはずですよ」

福内・平賀「??」

会話が終えた数分後、バリバリという轟音が鳴り響いた。

秋沢「我々の迎えが来ました」

そう言つて、福内が空を見上げると先ほど見た戦闘機とは、違い航空機が飛来した。

福内「え、あれは、一体・・・」

磯口「あれ、SH-60というヘリコプター、正式な名前は回転翼機」

平賀「・・・(；。D)」

みくらの飛行甲板に降り立つと一人のパイロットが降りてきて、秋沢達に敬礼し、平賀達本人を確認し、彼女達をあかぎへ送る事を伝え、四人は、ヘリに搭乗した。そして、みくらから離れ、航空母艦「あかぎ」を指す。

平賀「あのすみません」

秋沢「はい」

平賀「このSH-60というのは、人や物を輸送するのが目的ですか」

秋沢「確かにこの機は、輸送もできますが本来は、海中に潜む潜水艦を攻撃するために作られた対潜水艦用の機体です」

平賀「この空を飛ぶ乗り物が潜水艦を攻撃する事が出来るのですか!？」

平賀は、驚いた。彼女達の世界での潜水艦への対応は、水上艦からの攻撃だけであるが秋沢の世界では、水上艦だけでなく航空機を用いて、攻撃するというのだ。

秋沢「もうすぐ我が艦隊の旗艦「あかぎ」に到着します」

平賀達がヘリの窓から見下ろすとそこには、旗艦であるあかぎがいた。

その大きさは、彼女達を知る大和型を上回ると感じた。

福内「あれが航空母艦、あかぎ」

平賀「なんて、大きい船なの」

四人を乗せたヘリは、無事にあかぎの甲板に降り立ったた。

福内「(なんて、広い甲板なの)」

そして、艦内へ入り、平賀達を士官室まで案内した。

部屋に入った後、平賀達は、みくらから持った来た資料をテーブルに置いた。

そして、天井からスクリーンとプロジェクタが降りてきて、スクリーンに「応答なし」という文字が表示された。磯口は、室内にあったノートパソコンを開き、本国との通信回線を開いた。

磯口「艦長、どうぞ」

秋沢「こちら、日ノ出海軍航空母艦「あかぎ」、応答願います」

???「こちら、日ノ出国国防省の國栖だ。秋沢艦長、何か分かったか」

秋沢「はい、現状で把握したのは、我々がいるの異世界という事です」

???「異世界だと、そんな馬鹿な、SFの話じゃあるまいし」

秋沢「ここが異世界である事を証明するため、その人物を連れてまいりました」

平賀「はじめまして、日本国、海上安全整備局安全監督室情報調査隊の平賀二等監察官です」

國栖「はじめまして、国防大臣の國栖です。まず貴官が言ったブルーマーメイドとは、どうゆう組織なのか説明させていただきたい」

平賀は、自分達が所属しているブルーマーメイドや日本について、國栖に説明した。

國栖「なるほど、女性だけで構成された組織か、それにしても貴国の陸地が海に沈んでいるとは、信じられないな」

平賀「我々もお聞きしたいのですが、貴国の日ノ出国とは、どうゆう国なのかを教えてくださいいただきたいのですが」

國栖「ああ、分かった。我が国の説明をしよう」

国防大臣の國栖は、日ノ出国等について、説明した。

平賀「秋沢艦長がお聞きしました。が本当の事だったのですね」

國栖「ああ、異変が起こった日、突然、我が国と国交を締結している国々との通信が途絶えたため、状況を確認するため、あかぎを旗艦とする艦隊を派遣したのだ」

平賀「分かりました。これから貴国は、どうされるのですか」

國栖「現在、政府は、打開策を模索しているがまだ見つからずにいる状況だ」

福内「我々から貴国の状況を報告してみましようか」

國栖「いいのか、まだ、貴国との国交樹立をしていないのだが」

福内「我々も出来る限りの事を尽くしてみます」

國栖「貴官達に感謝する。この事を首相に伝えておく、一旦、通信を終了する。何かあったら、連絡してくれ、それでは」

そう言い残し、日ノ出国との通信を終えた。

磯口「平賀さん、福内さん、ありがとうございます。おかげで無事に本国へ伝える事が出来ました」

平賀「いえ、これからです。我が国と貴国との会談を行う事が目標です。」

磯口「そうですね」

そう言つて、土官室内が和やかな雰囲気になった。

その時であつた

あかぎ乗員「艦長、水上リーダーに我々とブルーマーメイド以外の艦影を確認しました。C I Cへ来てください」

秋沢「分かったすぐに向かう」

福内「秋沢艦長、どうされましたか」

秋沢「C I Cの方で何かあったようです。お二人もご同行されますか」

平賀「我々の艦隊も気になります。行きます」

そして、四人は、士官室を出て、C I Cへ向かった。

続く

第四話

秋沢「灘沢砲雷長、レーダーに我々艦隊とブルーマーメイド艦隊以外を捉えていると言ったな。相手の距離は、」

灘沢「我が艦隊の右舷前方、80度、距離130マイル。艦影は、二隻。艦のサイズから見て駆逐艦クラスかと」

磯口「変だな、先まで我が艦隊とブルーマーメイド艦隊だけだったが・・・」

福内「磯口副長、どうしましたか」

磯口「いや、我々艦隊の右舷前方に貴官達の艦隊とは、異なる艦艇を探知したそうだが」

福内「所属不明の艦隊の国籍は、分かりましたか？」

磯口「いや、UNKNOWNと表示されたままだ」

平賀「一体、何処の国かしら」

ホーク1「ホーク1からあかぎへ」

磯口「こちらあかぎ」

ホーク1「所属不明の艦艇を我が方のレーダーも捉えました」

磯口「何か変わった様子は、あるか？」

ホーク1「所属不明艦隊があかぎの方に向かっていきます。現在の距離110マイル」
磯口「我が艦へ接近していると、何する気だ」

所属不明の艦隊があかぎに接近しているという事を聞いた平賀達は、何が起こっているか把握できずにいた時であった。

秋沢「副長、対空警戒」

磯口「まさか、」

ホーク1「あかぎへ！所属不明艦隊、ミサイルの発射を確認！数は、13！」

福内・平賀「え!？」

磯口「やはり、撃ってきたか」

秋沢「あかぎより達する。全艦、対空戦闘用意、直ちに迎撃せよ」

ともつかぜ・たかお・はつかぜ・かわた・ひいらぎ「了解」

所属不明艦隊から攻撃を受けて、あかぎ艦隊は、直ちに迎撃態勢に入った」

ミサイル駆逐艦「たかお」艦長：南川一佐

南川「(敵ミサイルは、13発、西南諸島でのあかぎへの攻撃と同じ。しかし、今度、
全て撃ち落とす!)」

南川「いいか、我が艦は、敵ミサイルを5発を撃ち落とすぞ、あかぎに一発も向かわ
せるな!」

乗組員全員「了解！」

たかお乗員「データの入力完了、発射準備よし！」

たかお砲雷長「撃て！」

砲雷長の合図と共にたかおの前甲板にあるVLSから中SAM（中距離艦対空ミサイル）5発が発射した、一方、ともつかぜは、4発、はつかぜは、4発の中SAMを発射され、計13発が敵ミサイルに向かう。

灘沢「たかお・ともつかぜ・はつかぜ、対空ミサイルを発射、13発共に迎撃コースに入りました。目標との距離6マイル、接触まで10秒、9・8・7・6・5・4・3・2」

秒読み後、空中で迎撃ミサイルが敵ミサイルに命中し、爆発した。

たかお砲雷長「敵ミサイル13発、撃墜しました」

南川「よし！あかぎを守ったぞ」

灘沢「敵ミサイル全て撃墜！敵ミサイル全て撃墜」

CICにいたあかぎの乗員は、一時的に安堵した。平賀達も乗っている艦が攻撃されるという心情に包まれていたが全て迎撃した事を聞いて、安心感が沸いた。

しかし、まだ戦闘態勢を維持している状態である。いつまた攻撃されるか分からない状況に灘沢砲雷長は、

灘沢「艦長、このまま、迎撃し続けてもいずれ限度が来ます。二度目の攻撃が行われる前に叩くべきです！」

平賀達は、「攻撃が行われる前に叩く」という事に驚愕する「行われる前に叩く」、つまり所属不明艦二隻を撃沈する事である。この言動に福内が異議を唱えた。

福内「ちよつと待つてください！確かに相手は、攻撃して来ましたが何も沈めてしまふ事は、ないでしょう！」

灘沢「何ですか、貴女は！この艦隊は、事実上敵艦二隻から攻撃を受けたんだ！我々は、この艦の乗員を守らなくつては、いけないんだ！」

福内「だからつて、艦に乗っている乗員ごと沈める事は、ないでしょう！」

平賀「福内、落ち着いて！」

磯口「砲雷長、正気を保て！」

所属不明艦を撃沈する事に対して、福内と灘沢と口論となり、C I C内が混乱状態になつてしまった。

灘沢「この世界の人間である貴女が異世界から来た我々に何が分かるつて言うんだ！」

福内「何ですつて！躊躇せずに攻撃を具申する貴方の方がおかしい！」

平賀「福内！落ち着いて、もう止めて！」

灘沢「何が分かるんだよ！、あんたがおかしいって、言えるのは、国同士の争いを経験がないからだろうが！」

福内「え……」

平賀「それって……」

磯口「おい！灘沢三佐、それは、一番の禁句だろう！」

灘沢「副長、俺はもう我慢の限界なんですよ！この国は、死傷者が出てからでは遅すぎるんですよ！覚えていてでしょう三ヶ月前の9月25日の事を！」

磯口「今は、戦闘態勢だ！言い争いがしたいなら、終わってからやれ！これじゃ柔軟に対処する事ができません！」

灘沢「すいません、頭に血が上って、感情的になってました」

そう言つて、灘沢は、席に座つた。

磯口「とりあえず、二隻に対して、どう対応するかだ、対艦ミサイルを使えば、艦を沈めてしまふ、どうすればいいんだ」

秋沢「副長、はつたかの主砲による精密射撃ならどうだ。それなら相手を沈めずに済む」

磯口「主砲による射撃、はつたか艦長の西山一佐に取り合つてみます」

続く

第五話

ミサイル駆逐艦 はつかぜ 艦長：西山淳美 一等海佐

西山「え!? 西南諸島での事をまたやれですか!？」

磯口「敵艦を撃沈する事なく戦闘不能にさせるには、これしかないんだ。頼む」

西山「二度目は、上手くいきましたが二度目は、どうなるか分かりませんが最善を尽くします」

そう言つて、西山は、無線を切つた。

福内「磯口副長、上手くいきますか」

磯口「西山艦長を信じるしかない、だが彼女は、やってみせるだろう」

ミサイル駆逐艦「はつかぜ」CIC

はつかぜ乗員「敵艦、速度28ノット、距離38マイル」

西山「西南諸島での砲撃とほぼ同じ、二度が通用するか分からないけど、やるしかない」

はつかぜ乗員「敵艦一隻、ミサイルを発射、数、8!」

西山「対空戦闘、短SAM（短距離艦対空ミサイル）攻撃始め!」

はつかぜ乗員「目標データの入力完了」

はつかぜ乗員「発射用意、撃て！」

合図と同時に、はつかぜの前甲板のVLSが開放され、短SAMが発射された。

はつかぜ乗員「目標到達まで、10秒！9・8・7・6・5・4・3・2、インターセプト！」

迎撃ミサイルが敵ミサイルに到達し、爆発した。しかし、

はつかぜ乗員「敵ミサイル4発、撃墜、残り4発なおも接近中！」

西山「ECM（電子戦）戦、用意！」

はつかぜ乗員「ECM用意！EA（電子）攻撃始め！」

はつかぜに搭載されているECMから強力な妨害電波が放出された。

はつかぜ乗員「敵ミサイル3発、誘導不能で墜落！残り1発、更に接近！」

西山「近接戦闘！CIWS攻撃始め」

はつかぜ乗員「CIWS、自動迎撃モード起動、撃て！」

はつかぜの前方にあるCIWSから多数の機銃弾が発射され、敵ミサイルは、はつかぜの寸前で爆発した。

はつかぜ乗員「敵ミサイル、全て撃墜しました！」

西山「よし、今度は、こっちの番よ！、砲雷長、主砲撃用意！、マニュアル対応せ

よ」

はつかぜ砲雷長「了解！マニュアルで対応します」

西山「砲雷長、全目標、一発ずつ対応よ、ここから時間との勝負よ、敵に反撃の隙を与えては、駄目よ！」

はつかぜ砲雷長「了解」

はつかぜ乗員「第一目標、敵駆逐艦、対艦ミサイル発射筒、照準よし！」

西山「砲撃開始！」

はつかぜ砲雷長「撃ち方始め！」

駆逐艦「はつかぜ」の127mm速射砲が火を噴き、砲弾は、安定しながら敵艦に向かい、対艦ミサイル発射筒に命中した。

はつかぜ乗員「第一目標、命中！第二目標、前甲板、主砲！照準よし」

西山「撃てえ！」

はつかぜ砲雷長「てえ！」

はつかぜ乗員「艦長、後方にいる敵艦が向かって来ます！11時の方向！距離18マイル」

西山「分かってる！今は、攻撃している艦を仕留めてからよ！」

はつかぜ乗員「第二目標、命中、第三目標、前甲板VLS！照準よし」

西山「続けて撃て！」

はつかぜ乗員「てえ！」

はつかぜから放たれた砲弾は、第三目標であるVLSに命中し、敵艦一隻を戦闘不能にさせる事に成功した。

あかぎ CIC

あかぎ乗員「敵艦一隻全ての目標に命中を確認しました。残り一隻がはつかぜに向かつていきます」

磯口「13マイルで撃て来る……」

秋沢「……」

はつかぜ乗員「残存艦一隻、針路変わらず、距離16マイル！」

西山「砲雷長、次の目標も主砲よ！」

はつかぜ乗員「主砲ですか？」

西山「この艦は、射線の確保は必要ない、やれ！」

はつかぜ乗員「了解、目標！前甲板、主砲！」

そして、残存した敵艦は、はつかぜに主砲を向けた。

はつかぜ乗員「敵艦からレーダー波！捕捉されました！」

はつかぜ乗員「照準よし！」

西山「撃てー！」

はつかぜ砲雷長「てえ！」

はつかぜが砲撃すると同時に敵艦も砲撃を開始した。それをあかぎのレーダーが捉えた。

磯口「はつかぜ！敵艦から砲撃が来るぞ！」

西山「不味い！両舷停止！後進一杯！、バックよ！」

はつかぜ乗員「両舷停止！後進一杯！急げー！！」

磯口「躲せー!!!」

秋沢「・・・」

はつかぜは、直ぐに後進した所に敵艦からの砲弾が海上に着弾した。

はつかぜ乗員「躲した！」

西山「はあ、危なかった・・・」

灘沢「敵艦は、二隻とも無力化されました」

あかぎ乗員「はつかぜは、無傷です」

CICは、歓喜に包まれた。平賀達も敵艦全てが撃沈する事なく無力化された事に安堵した。

磯口「流石だ、西山艦長」

秋沢「今回の戦闘を本国に報告してくる」
そう言って、秋沢は、C I C から退室した。

続く

第六話

所属不明艦隊との戦闘後、平賀達は、あかぎのCICからみくらに無線で不明艦隊の確報に向こう事を指示し、みくらにいる寒川と志度は、これを了承し、所属不明艦に向かっていた。一方、ミサイル駆逐艦「はつかぜ」は、不明艦が更なる攻撃を行われないように主砲と機関砲を向けた。磯口は、増援として汎用駆逐艦「ひいらぎ」を向かわせた。

磯口「平賀さん、先ほどはつかぜから通信あった。攻撃を行った所属不明艦の乗組員全員を拘束したそうだ」

平賀「そうですね、分かりました。あと、すいません、不明艦の確保や乗組員の拘束まで協力してもらって」

磯口「いえ、我々もこのような状況にも遭遇しながら、戦ってききましたからね」

平賀「そうですねですか」

不明艦の確保及び乗員の拘束の会話が終わった時、秋沢は、戻ってきた。

磯口「艦長、国防省は、何と？」

秋沢「今回の件は、正当防衛として処理されるそうだ」

磯口「そうですか」

秋沢「しかし、向こうでは、大変だったそうだ。我々から発砲したとの情報が流れたから政府は、大混乱に陥ってたよ。何とか疑いは、晴れたけどな」

平賀「日ノ出国は、武器使用にそんなに慎重的なんですか？」

秋沢「ああ、我々国は、武器を使用する際は、政府の閣議決定がない以上、使用する事が許されないからな」

福内「そういうえば、灘沢砲雷長が「国同士の争いの経験がないから言えるんだ」といつてましたが、それって……」

秋沢は、隠してもいずれば、表に出ると考えた。

秋沢「平賀さん・福内さん、その件について、話すので士官室に戻りましょう」

平賀・福内「はい」

四人は、CICを出て、士官室に戻り、席に座った。

秋沢「では、砲雷長が言っていた事について、話します」

福内「はい、お願いします」

秋沢「異変が起こる三ヶ月前の2020年9月25日の出来事です。当時、西南諸島……日本で言う先島諸島に漁船団が上陸したんです」

平賀「漁船団ですか、領海侵犯であれば対処できたはずでは……」

秋沢「発生した時は、そう思ったかもしれませんが、しかし、その隻数が尋常ではなく22隻が西南諸島に向かつていたんです」

福内「22隻、どんでもない数ね」

秋沢「その情報を受けて、沿岸警備隊、平賀達が所属しているブルーマーメイドの巡視船一隻が出動しました、しかし、漁船の数があまりにも多かつたため、増援要請を本部に伝えました」

平賀「確かに一隻じゃない対処する事は、出来ませんからね」

秋沢「その時、22隻中2隻が巡視船に接近して来ました。乗組員は、その行動に把握できていませんでした。その瞬間、巡視船は、漁船から銃撃を受けました」

福内「銃撃!? 相手は、漁船団じゃなかったんですか?」

秋沢「後の調査で判明したんですがその漁船団に乗っていたのは、漁民ではなくそれに扮した武装勢力だったんです。その後、巡視船から「負傷者、多数」との報告した以降、連絡が途絶え、増援の警備隊が周辺海域に到着し、ヘリで西南諸島に向かった所、そこには、巡視船の残骸が横たわり、島の山頂に国旗が掲げられていました」

平賀「そ、それってもしかして・・・」

秋沢「気づきましたか、そう、西南諸島が武装勢力に占領されたんです」

福内「占領!?!」

平賀と福内は、ブルーマーメイドに勤めてきて、領海侵犯の船に対して、幾度も対処してきたが、島嶼部が武装勢力に占領されるなんて、考えもなかった。

平賀「それで貴国の政府は、どうしたんですか」

秋沢「事件が発生して1時間後に緊急閣議が行われました。政府は、当時、我々の艦隊が訓練で西南諸島海域にいた事から国防省を經由し、被占領地域に急行するよう、指示されました」

磯口「最初は、海上警備行動が発令されました」

福内「海上警備行動とは？」

磯口「万が一、沿岸警備隊だけでは対処が困難の場合、海軍が加わり共同で対処する命令です。しかし、武力行使ができるのは、正当防衛に限定されます」

平賀「向かって撃たない限り、攻撃が出来ないと成る、厳しいですね」

秋沢「我が艦隊が西南諸島に向かっている時、突然、所属不明の潜水艦から攻撃を受けました。即座に迎撃態勢を執りましたが一発があかぎの後部甲板に直撃し、多数の重軽傷者が出た他、電気系統に被害が出てしまいました」

平賀「潜水艦から攻撃で多数の重軽傷者・・・」

平賀は、重軽傷者の言葉を聞いて、あかぎの艦内での出来事を想像して、黙り込んでしまった。

秋沢「攻撃を受けた直後、レーダーに新たな艦影を捉え、詳細を確認した所、極東国、この世界でいう中国が有する空母機動部隊が出現しました」

福内「空母機動部隊！じゃあ、西南諸島の武装勢力の上陸は」

磯口「はい、その武装勢力というのが極東国の軍人であり、占領を完了するとその海域に空母艦隊を派遣し、実効支配をしようと企んでいました」

平賀・福内「・・・」

平賀達は、まさか一国の軍隊が侵攻して領土を占領するなんて、想像も出来なかった。

秋沢「そして、我々が恐れていた事が起きてしまいました」

福内「何が起こったんですか」

磯口「西南諸島の状況を確認するべく、出動した日ノ出軍の偵察機が極東軍の戦闘機に撃墜されてしまい、戦死者が出てしまいました」

平賀「戦死者・・・」

ついに日ノ出側に死者が出ってしまった事に平賀は、言葉を失った。

秋沢「結果、政府は、西南諸島での行為を武力攻撃事態と認定し、日ノ出軍全ての部隊に対して、国防出動を発令しました。それは、創設以来、一度も発せられた事のない事でした」

福内「国防出動とは」

秋沢「国防出動とは、日ノ出国が外部、つまり他国が武力攻撃を受けた時に発せられる武力行使命令です」

平賀「事実上の攻撃命令という事ですね」

磯口「その通りです」

西南諸島での軍事占領から奪還まで数時間、要した。

続く

第七話

秋沢は、西南諸島での出来事を最後まで話した。福内は、灘沢砲雷長が言っていた「国同士の争いの経験がない及び攻撃をしなければならぬ」という事に彼女は、

福内「私は、生まれてから戦争なんて経験せず、生きていた。でも灘沢さんは、戦場に行き、多くの命を奪っただけどやらなければ自分や大切な仲間を守れない。もし、また今回の様に武装した戦闘艦から攻撃を受けたら、私達は、苦渋の決断を下さなければならなくなる」

平賀「福内？大丈夫、何か深刻な顔をしてたけど・・・」

福内「え、あ、大丈夫よ。考え事をしていただけよ」

平賀「なら、いいのだけど、秋沢艦長、そろそろ、我々は、帰還します。今日の会談の件は、海上安全整備局を経由して我が国の政府に伝えるでしょう。また、今回の武装艦隊の鎮圧に協力してもらってありがとうございます」

秋沢「ああ、あと貴官達に報告がある」

平賀「はい、何でしょう」

秋沢「国防省から貴官達が指揮する艦隊を日本まで護衛せよとの命令を受けました」

福内・平賀「！」

秋沢「今は、我々と共に行動しているが万が一、再び武装艦隊の襲撃を受けたら、貴官たちの艦隊は、長く保てない可能性がある。どうだろうか」

福内「平賀、どうする」

平賀「断る必要はないわ。秋沢艦長、日本までの護衛をお願いします」

秋沢「分かりました。」

会話の後、平賀達は、帰りのヘリに乗り、みくらに戻っていた。秋沢達は、CICに戻り、みくらを含むブルーマーメイド艦隊を日本まで護衛を伝え、警戒態勢を維持する事を指示した。

みくら艦橋

寒川「平賀さん・福内さん、どうでしたか？」

平賀「ええ、向こうの政府関係者と会談して、日ノ出国の件を海上安全委員会に報告するつもりよ」

志度「しかし、突然、所属不明艦から噴進弾が発射されていた事を聞いて、心配しましたよ」

福内「最初は、私達も心配だったのよ。でも、日ノ出の艦艇からも噴進弾が発射されたのだけど、その噴進弾が敵が撃った噴進弾を撃ち落とすしたのよ」

寒川「え!? 噴進弾に噴進弾を当てたんですか?」

志度「信じられない・・・」

福内「私だって最初は、信じられなかったわよ。でも、本当に撃ち落としたりしたんだから、彼らを見て分かったのは、戦術が根本的に違うという事だけよ」

志度「私、彼らを見て、思ったんですが日ノ出は、絶対に敵に回してはいけない相手だと思いました」

平賀「そうね・・・」

寒川「そういえば、日ノ出艦隊がまだ、いますけど、どうしたんでしょう・・・」

福内「その事なんだけど、日ノ出は、私達を日本まで護衛してくれるそうよ」

志度「不明艦隊の対処だけでなく護衛までしてくれるなんて、何か申し訳ないですね」

福内「ええ、でも、日ノ出艦隊は、今まで幾度の過酷な状況を乗り越えてきたから私達も何時か、彼らみたいな事をしたいわね」

志度「そうですね」

寒川「福内さん、針路は、横須賀ですか」

福内「そうよ、今回の件を”あの人”にも報告するのだから」

そして、みくらを含むブルーマーメイド艦隊は、日ノ出艦隊に護衛されながら日本国・

横須賀市に針路を向けた。

第八話

みくらを含むブルーマーメイド艦隊を護衛して、翌日の2015年10月26日

阿河「副長、まもなく日本の領海に入ります」

磯口「そうだな、しかし、本当に陸地が沈んでしまっているとは」

阿河「そうですね。自分も信じられませんよ。そういえば、副長、我々は、その後は、本国に帰還するんですか？」

磯口「いや、みくらからの話によると何でもみくらの艦長の上官と会談をする予定があるから横須賀に停泊する」

阿河「そうですね、みくらの艦長の上官って、誰ですかね・・・」

磯口「さあな」

日本国・横須賀市

横須賀市民A「しかし、本当に海って、静かだな」

横須賀市民B「そうすね、でも、最近、近海で重武装の海賊が出没しているってニュースで言っていましたけど」

横須賀市民A「うん、ブルーマーメイドとホワイトドルフィンで対応できれば、いい

のだが……」

横須賀市民B 「ん？、Aさん！、沖に知らない艦がいますけど！」

横須賀市民A 「何だありや！もしかして、ブルーマーメイドの新鋭艦か！」

横須賀市民B 「今、調べましたけどブルーマーメイドが新型艦を建造した記事がないんだ」

横須賀市民A 「じゃあ、あの艦は、何なんだ？」

第509艦隊は、みくらからの指示を受けて、横須賀港の岸壁に停泊した。

それを見た横須賀市の人々は、ブルマーまたはホワイトドルフィンの新鋭艦なのかと気になり多くの人が詰めかけた。

磯口 「艦長、横須賀市街の方に多くの市民を確認しました」

秋沢 「そうか」

磯口 「市民達は、無我夢中でこちらを見ますが、どうします？」

秋沢 「気にするな、見られても何も問題もない」

磯口 「はい」

その会話をしている時、岸壁に一台のハイヤーがやって来た。降りてきたの長めの黒髪をし、ブルーマーメイドの服装をした女性だった。おそらく平賀達の上官であろうと秋沢は、考えた。

??? 「この艦があかぎというのね」

平賀 「すみません、お忙しいところなのに会談の件を受諾してくださって」

??? 「いいのよ、あなた達に協力してくれた彼らに私からもお礼を言わないといけないし」

平賀 「はい」

そして、空母あかぎの右舷にある車両などを搬入するランプドアが開き、そこに秋沢と磯口が迎えていた。

そして、平賀達と平賀の上官である女性は、あかぎに入っていた。

秋沢 「日ノ出海軍、航空母艦「あかぎ」艦長の秋沢一佐です」

磯口 「同じく副長の磯口二佐です。ようこそあかぎへ」

そして、上官の女性も挨拶をした

??? 「秋沢艦長・磯口副長、はじめまして海上安全整備局、安全監督室の宗谷真霜です」

第九話

秋沢達は、平賀達の上官である「宗谷真霜」との自己紹介の後、秋沢達に連れられて士官室に入り、席に座った。

真霜「この度は、武装艦隊の鎮圧にご協力していただき、本当にありがとうございます。まじりました」

秋沢「いえ、我々は、当然の事をしたままでです」

真霜「ところで私からお聞きしたいのですが、」

秋沢「はあ、何でしょうか」

真霜「平賀二等監察官から聞きましたがこのあかぎというのは、どのような艦艇なのでしょうか？」

秋沢「ああ、確かに三人には、まだ言ってませんでしたね。分かりました、我が艦について、ご説明致します」

真霜「ありがとうございます」

秋沢「磯口副長、スクリーンとプロジェクタを出してくれ」

磯口「分かりました。」

磯口は、直ぐにプロジェクトとスクリーンを出して、自身が使用しているノートパソコンを繋げた。

磯口「艦長、どうぞ」

秋沢「我々が乗艦している航空母艦「あかぎ」は、全長325m、全幅76m、基準排水量は、62500トンです。武装は、前甲板に垂直発射機（VLS）が32セル、対空機関砲のCIWSが前後に1基、個艦防空用のミサイル発射機が前後に1基、以上が本艦のスペックです」

真霜「325m、私達が知っている大和型を遥かに上回る艦艇ですね。しかし、この広い飛行甲板は、何に使うのですか？飛行船だけなら過剰な気が・・・」

秋沢「いえ、我々は、飛行船使いません」

真霜「では、この飛行甲板は、何に使うのですか？」

磯口は、ノートパソコンを操作し、次の画面に変えた」

真霜「これは、何でしょうか・・・」

秋沢「はい、これは、あかぎに搭載されているF-25及びF-26と呼ばれる艦上戦闘機です」

真霜「戦闘機!?え、つまり、これに人が乗るのですか？」

秋沢「はい、パイロットが一人搭乗し、操縦します」

真霜は、驚愕するのも仕方ない、彼女自身も今まで空を飛ぶ乗り物は、水素又はヘリウムで飛ぶ飛行船や気球ぐらいしか知らなかったからだ。

平賀「ところで戦闘機以外もあるのでしょいか？」

秋沢「はい、その他にもE—2C早期警戒機や対潜哨戒ヘリコプターのSH—60を搭載しています」

真霜「この艦には、何機、搭載されているのですか？」

秋沢「はい、四種類の機体を乗せているので本艦一隻で78機搭載されています」

真霜・平賀・福内・寒川・志度「78!？」

ブルーマーメイドに所属している彼女達は、さらに驚愕したこの艦一隻で数十機の艦載機を搭載されているからである。

秋沢「しかしは、空母は、直接的に戦闘に加わる事はありません」

福内「どうしてですか？」

秋沢「空母は、船体は、巨大なので機動性に難点がある他、ソナーが搭載されていないので潜水艦からの攻撃される危険があるからです」

平賀「なるほど」

秋沢「我が艦の役目は、艦載機を搭載し、洋上の航空基地として機能し、敵艦艇や敵地上施設への攻撃を主任務としています」

寒川「え、陸地にも攻撃が出来るんですか」

秋沢「距離によりますが陸地への攻撃も可能です」

志度「そういえば、艦隊戦においては、どう攻撃をするんですか？空母は、単艦で行動しないと行ってましたよね」

秋沢「はい、そのため我が艦の周りに護衛する駆逐艦から攻撃を行う他、先程、紹介したF-25やF-26にASMを搭載し、敵艦艇に攻撃を行います」

真霜「ASMとは？」

秋沢「ASMとは、Air-to-Ship Missileの頭文字を取った言葉で直訳すると空対艦ミサイル、この世界で言う誘導噴進弾です」

福内「空から敵艦艇を攻撃するのですか!？」

今まで真霜達の世界においての艦隊戦は、海上や海中から攻撃と言った二次元だけであるが秋沢達の世界では、上空からの攻撃も視野に入れた三次元の戦闘である。

福内「その空対艦ミサイルは、どのぐらいの速さですか？」

秋沢「はい、00式対艦ミサイルの場合は、マッハ0.8、時速にすると980Km/h、最新の19式空対艦ミサイルは、マッハ3、時速にすると3700Km/hです」

真霜達「(絶句)」

真霜や平賀達は、絶句した。秋沢が言った00式は、980で未知の速度であるが最

新式の19式が言われた時、人類が経験した事のない速度だと恐怖に感じた。

もしのこの誘導弾が発射されたら、自分達は、絶対に撃ち落す事が出来ない。いや、発見が出来たとしても迎撃が間に合わないと感じた。

秋沢「あ、あの大丈夫です？何か不味い事でも言いましたかね・・・」

真霜「いえ、ちよつと怯えてしまっただけです・・・」

平賀達「私達もです・・・」

秋沢「あと、我が国の政府からこの様な案が挙がりました」

真霜「どのような案ですか」

秋沢「日本国との国交樹立後は、貴国に我が軍を駐留させ、東アジアの均衡を役立たせる他、非常事態の場合は、ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンと共同で脅威に対処する案です」

真霜「！」

秋沢「この案が決議された場合は、日本国に駐留する我が軍は、貴国の法及び規則に則る事を約束します」

真霜「その話は、本当ですか」

秋沢「はい、国防大臣から言われたので、そう遠くないうちに結果が出るでしょう」
そう言われて、真霜や平賀達は、日ノ出で挙がりつた案が通れば、自分達に強い味方

が付けてくれると内心喜びを感じた。この会談の二週間後の11月9日に法が決議され、正式に日本国に日ノ出軍が駐留する事となった。

第十話

国交樹立から三週間後の2015年11月30日、横須賀市

横須賀市にあるブルーマーメイド基地の隣に駐留日ノ出軍の基地がある。三週間前の国交樹立を受けて、横須賀を拠点に東アジア地域の安定を目的に日ノ出軍の駐留を閣議決定をし、現在、駐留する艦隊は、状況確認のため派遣した第509艦隊の他、第173空母機動艦隊・第28駆逐隊・第42駆逐隊・第12潜水隊・第171潜水隊・第41補給隊から補給艦が2隻といたかなりの大規模となった。

平賀「物凄い数ね、」

福内「そうね、駐留するとは言っていたけどここまで多い何って・・・」

平賀達は、日ノ出軍が有する艦艇数を見て、圧倒的に感じた。

福内「その影響なのか、分からないけど横須賀市街の対岸に連日にも関わらず、多くの人が夢中で見ているけど」

平賀「それだけ、私達以上に珍しいという事よ」

その頃、太平洋、日本近海

一隻の海外船籍の貨物船が日本を目指していた。

副船長「船長、あと日本までどのぐらいですかね」

船長「うむ、あと半日ぐらいだろう」

副船長「早く丘に上がりたいですね」

船長「そうだな、もう少しの辛抱、頑張ろう」

その時であった。強い衝撃が船内を襲った。

船長「どうした！何があつた！」

副船長「分かりませんが攻撃を受けたようです！」

船長「副船長、直ちに救難信号を発信させろ！」

副船長「了解！」

数十分後、ブルーマーメイド横須賀基地

ブルーマーメイド司令部から日本近海で貨物船からの救難信号を受信した事を受けて、平賀達に乗るみくら・みやけ・はちじょうの三隻のブルーマーメイド艦隊と訓練に出ようとしていた第28駆逐隊と共に救難信号の発信地に向かう。

数時間後、現場海域

みくら 艦橋

寒川「海上浮遊物を確認、救難信号を発していた貨物船のものかと・・・」

福内「一体、何が起こったの・・・」

第28駆逐隊 旗艦「はまぎく」

はまぎく乗員「艦長、ソナーに反応あり」

はまぎく艦長：山田俊秀 一等海佐

山田「何、海中に何かいるのか？」

はまぎく乗員「おそらく潜水艦かと」

山田「(貨物船の沈没、潜水艦……)分かったぞ、貨物船の沈没した原因が」

山田は、直ちに無線にみくらに通信をとった

山田「こちら駆逐艦「はまぎく」艦長の山田だ。みくら艦長、福内二等監察官、聞こえるか？」

福内「こちらみくら、山田艦長、どうしましたか？」

山田「貨物船の沈没した原因が判明しました」

平賀「沈没した原因が分かったのですか、その原因は、」

山田「先程、我が艦のソナーが所属不明の潜水艦を捉えた」

福内「まさか、貨物船の沈没は、潜水艦からの攻撃という事ですか？」

みくら艦内に緊張が走る。貨物船の沈没が潜水艦による攻撃だとしたら、今度は、自分達が攻撃されるという事である。その会話の直後である。

肥塚「こちら、駆逐艦「はつひ」艦長の肥塚だ。敵潜水艦、魚雷を発射、6本来るぞ」

平賀達「!!」

ついに平賀達の艦隊に向けて、敵潜水艦が魚雷を発射した。

山田は、即座に無線でブルーマーメイド含む全艦に通達した。

山田「はまぎくより全艦、対潜戦闘用意！」

日ノ出海軍の艦内では、戦闘配置を知らせる警報がなり、乗員全てが各自の持ち場に就いた。

駆逐艦「はまぎく」副長、押澤二佐

押澤「回避するぞ、取舵一杯！」

はまぎく乗員「取舵一杯！」

押澤「左舷、三番四番、デコイ（囷魚雷）発射！」

はまぎくからデコイが投射され、敵魚雷の針路上に向かう。そして、敵魚雷の真横をデコイが通過すると敵魚雷は、デコイに食いつき、一時的に艦隊から離れてゆく。

福内「はまぎくが撃った魚雷に敵魚雷が食いついて、離れていたけど」

平賀「でも、また、戻って来る可能性もある。油断しないで」

そして、それまで敵魚雷を追走してくれていたデコイが力尽き、針路を反転し、再び艦隊に向かってくる。

はまぎく乗員「敵魚雷、デコイ追尾から反転、本艦隊に向かってきます。」

山田「はまぎくからさくらへ、瀬川艦長！」

瀬川「敵魚雷を捉えています！任せてください」

さくらの甲板にあるVLSが開放された。

瀬川「アスロック、撃て！」

さくら砲雷長「撃てえ！」

VLSからVLA（垂直発射型アスロック）が発射された

さくら乗員「アスロック、敵魚雷に命中します」

さくらの乗員が命中する事を言った後、海中で敵魚雷とアスロックが直撃し、轟音鳴り響き、撃破したと思われた。しかし、

さくら乗員「一発、外しました。ブルーマーメイド艦「みくら」に向かいます！」

みくらでは、

寒川「福内さん！魚雷が我々に向かって来ます」

福内「回避よ、取舵一杯！」

志度「取舵一杯！」

福内「このままでは、我が艦に魚雷が」

平賀「福内！左舷を見て！」

福内「平賀、どうしたの・・・!?」

平賀に言われ、福内は、左舷を見ると真横に駆逐艦「さくら」がいた
さくらの艦内では、

瀬川「最大船速！取舵一杯！」

さくら副長「艦橋から達する左舷を各位、艦尾へ退避、急げ！」

瀬川「我が艦をもつて、みくらを守る、速力を維持！魚雷に向かえ！」

さくらがみくらと魚雷の間に割って入った。

平賀「瀬川艦長・・・」

瀬川「総員！衝撃に備え！」

魚雷を左舷に受け、駆逐艦「さくら」は、燃え上がった。

続く

第十一話

はまぎく乗員「さくらは、みくらの盾となりました」

山田「はまぎくからブルーマーメイド全艦へ我が艦隊は、さくらの救助に当たる。潜水艦の追撃は、中断する」

福内「了解しました」

無線での交信を終えた後、福内は、自らの拳を壁にぶつけた。

平賀「福内、どうしたの!？」

福内「私達を守ってくれたさくらが被弾したのに我々は、何も出来なかった。何なのこの無力感は……!」

福内は、自分を庇ってくれた駆逐艦さくらが被弾したのに潜水艦を取り逃がしてしまい、人生で一番の屈辱を味わった。

魚雷を左舷に受けたさくらは、火柱を上げた。艦内では、懸命な消火活動及び救助が行われていた。その数時間後、はまぎくを経由し、さくらの被害状況の報告が入った。

山田「こちら、はまぎく艦長の山田だ、みくら、聞こえるか」

福内「こちら、みくら艦長の福内です」

山田「さくらの被害状況を報告するので、艦内放送で頼む」

福内「了解しました」

山田「先程、さくらから報告があつた。我が艦、左舷に魚雷攻撃を受けて、現在、総力を挙げて消火及び救助活動を行っている。今回の攻撃による被害は、軽傷者が多数、重傷者、20名……」

ここで山田は、口が籠もる。

平賀「山田艦長、どうしたのですか、何か言えない事でも……」

山田「いや、言っておくべきであろう、しかし、相当、シヨックな事だ。」

福内「相当、シヨックな事って、何ですか！」

福内は、その答えがほしかった。そして、山田の重い口が開く。

山田「分かった。先程の魚雷攻撃でさくらの乗員、5名が死亡した」

福内「!!」

自分達を魚雷攻撃から庇ってくれた艦から5名の尊い命が失われた。

平賀「う、嘘ですよね……」

寒川「そんな……」

志度「私達は、何も出来なかつた……」

平賀達も動揺した。自分達のせいで5人の命が失われてしまったという罪悪感に襲

われた。

山田「我が艦は、これより残存している僚艦と共にさくらの救助に向かう。現時刻を以つて通信を終了させてもらう。それでは、」

そう言つて、山田艦長は、みくらとの通信を切つた。

みくらを含む隊員達にとつて、日本の海を守るべくブルーマーメイドに入り、多くの命を救つてきた。なのに、身近の仲間を守る事が出来ないなんて、彼女にとつて屈辱的でありながら罪悪感でもあつた。

その後、雷撃を受けたさくらは、はまぎくに曳航されながら、横須賀に帰還し、ドックに長期の修理に入った。みくらを含むは、ブルーマーメイド隊員達に対して、大きな処罰は、なかつたものの彼女達にとつて一生の傷となつてしまつた。

第十二話

福内「(ん、ん)一体……!、平賀!、大丈夫!?、平賀?……!」

福内は、最初は、何処にいるか分からなかったが少しづつ見ていくと此処は、みくらの艦内である事が分かった。歩いていくと平賀が倒れている姿を見て、すぐに確認したが……

福内「嘘、平賀!、ねえ、起きてよ!、どうしよう、寒川!、志度!、貴方達も大丈夫?、!!」

福内は、寒川と志度にも確認するが、二人共、返事がなかった。それどころか彼女達を着ているブルーマーメイドの制服が赤く染まっていた。自らの両手を見ると血が付いており、平賀も赤い血で染まっていた。

福内「あ、あ、すぐに救援を呼ばないと……」

すぐにヘッドセットで司令部に応援を呼ぼうとしたが応答がない。

福内「何でこんな時に無線が使えないのよ!……!!」

無線が使えない苛立ちから外を見るとそこには、僚艦の「みやけ」・「こうづ」・「はちじょう」が火柱上げながら燃えていた。

福内「そんな、あ、あ、いや、いや——!!」

彼女は、この世とは思えない叫び声を出した。

福内「は！、はあ、はあ、夢・・・？」

目が覚めるとそこは、彼女の寝室だった、目覚めたのに夥しい汗と震えが止まらなかった。

福内「一体、先の光景は、何なの。もうこんな時間、そろそろ、基地の方に向かわないと」そう言つて、彼女は、出勤する準備をして、横須賀基地に向かった。

2015年12月9日

日本近海での所属不明の潜水艦からの攻撃から一週間が経った。駐留日ノ出海軍基地では、先の戦闘で戦死した5名の葬儀が行われた。遺体は、本国の丘に埋葬するため同所属の駆逐艦「はつひ」に乗せられて、本国に向けて出港した。

秋沢「今回の戦闘は、政府や国防省も対応を改める必要が出てきたな」

磯口「そうですね。戦闘犠牲者が出てしまった以上、今の対処法では、民間船舶の乗員の他、ブルーマーメイド艦や我が海軍艦艇の乗員を守る事が出来ません」

秋沢「だが、民間船や駆逐艦を攻撃した潜水艦は、これで満足する訳がない。次も民間船舶を攻撃する可能性が高い」

磯口「司令、駆逐隊を派遣する際、周辺海域の哨戒として、対潜へりを搭載を義務付

けるのは、どうでしょうか」

秋沢「そうだな、国防省の方にも取り合ってみる」

磯口「ありがとうございます、うん？あれは、福内監察官じやないですか？」

秋沢「そうだな、あそこで何やっているんだ？」

福内「・・・(呆然)」

秋沢「福内監察官、どうしたんだ。こんな所で」

福内「あ、秋沢司令、いえ、何でもありません。ちょっと、ぼーとただけですので、私は、これで失礼します」

そう言つて、福内は、立ち去つてしまう。

秋沢「副長、福内監察官の様子がおかしいぞ」

磯口「そうですね。何かあったのでしょうか・・・」

秋沢「あとで平賀監察官にも聞いてみよう」

続く

第十三話

2015年12月9日 昼時

平賀「もうお昼ね。手短に済ませようかしら」

その時、ドアにノックの音がした。平賀は、昼休みに誰でだろうと考え、ドアを開けると、

平賀「秋沢司令に磯口副長、どうされましたか？」

秋沢「昼休み時にすまない、ちよつと気になる事があつてね。いいかな」

平賀「あ、はい・・・」

平賀は、秋沢達と話し合いをするため、控え室に案内し、双方ともソファアに座った。

平賀「それで気になる事つて、言うのは・・・」

秋沢「実は、今日の午前中に君の同僚の福内監察官と会つたんだが、30日の戦闘で被弾した「さくら」を呆然と見ていたんだが、最近、変わった事は、ないかい？」

平賀「最近、変わったですか、実は近々、秋沢司令にお伝えしようと考えてました」

秋沢「なるほど、では、平賀監察官、最近の福内監察官の様子は、」

平賀は、今日までの事を詳しく話した。昨月末の出来事後、福内の様子がおかしい

事に気づいた。訓練の時、判断が遅かったり、自らが彼女の側にいても尋常じゃない汗と震えが出ていたりしていたからだ。福内は、「大丈夫だから」と言っていたがこれは、彼女に何かあったんだと考え、秋沢達にも言うべきか悩んでいた時に秋沢達が異変に気付いてくれたおかげ、話す事が出来たという。

平賀「と言う訳なんです」

秋沢「訓練の時、判断が遅い、そして、尋常じゃない汗と震えか、」

磯口「判断が鈍ったり、尋常じゃない汗と震えと聞くと何に脅えているという事ですね」

秋沢「福内本人に聞いてみる必要があるな」

磯口「平賀監察官、福内監察官を読んだけただけじゃないですか」

平賀「分かりました」

平賀は、すぐに同僚の福内を呼び出した。

福内「あの、何でしょうか・・・」

秋沢「福内監察官、最近、様子が変なのだが、何かあったかな」

福内「い、いえ、大丈夫です。私は、いつも通りですよ」

福内は、いつも通りの自分だと誤魔化したが、秋沢は、その誤魔化しを容易に見抜いていた。

秋沢「最近、訓練で判断が遅れたり、尋常じゃない汗と震えがあるとそうだな」
福内「!?、何でそれを知っているんですか？」

秋沢「君、今日の午前中、修理中の駆逐艦「さくら」を呆然と見ていただろう」
福内「・・・すみません、ちよつと忘れ物を取りに」

秋沢「逃げるのか」

秋沢から「逃げるのか」という言葉に福内は、立ち止まった。

秋沢「ここで逃げたら、もう誰も君の事を気にしなくなるぞ」

福内「・・・(困惑)」

秋沢「此処に留まって、自分の心情を話すかそれとも話さず逃げるのか、どっちなんだ？」

福内「う……」

秋沢は、痺れ尽かしたのか、テーブルを強く叩く

平賀・磯口「!?」

秋沢「はつきり言え！助けてほしいのか助けられたくないのか、どっちだ！」

秋沢は、心を鬼にして言った。

福内「う、うく、助けて、ほしい、です。ひく」

福内は、苛立っている秋沢に泣きながら、助けてほしいと言った。

秋沢は、福内に歩み寄った。

秋沢「よく言った。誰にも言えず、辛かっただろう」
福内は、安心したのか本泣きしてしまった。

く

続

第十四話

数時間後、泣き出してしまつた福内を落ち着かせて、何に脅えてのかを彼女が言った。

秋沢「福内監察官、一体、何に脅えているんだ」

福内「あの戦闘が終わつてから、毎日の様に悪夢に魘されているんです」

平賀「悪夢、一体、どんなような夢なの」

福内は、夢の中での光景を最後まで話した。自分の乗っている「みくら」が被弾し、その衝撃で氣を失つてしまい、氣がつけば、同僚の平賀や部下である寒川や志度が既に息を絶えていた他、僚艦の「みやげ」・「こうづ」・「はちじょう」が火柱を挙げて炎上していた。

平賀「私や寒川や志度が命を落して、僚艦が攻撃される・・・」

福内「私は、”あの人”が言っていた事がやつと分かつたんです」

平賀「あの人つてのは、誰？」

福内「灘沢さんです」

秋沢「灘沢、あかぎの砲雷長か」

秋沢は、ここで初めて、平賀達と出会い、灘沢が敵を撃沈すべきと言つた事に福内が

異議を唱えて、口論となり、福内に向かつて「おかしいって言えるのは、本当の戦争を経験がないから言えるんだ。そして、この国は、死傷者が出てからでは何も出来ないと言っていた事を覚えていた

福内「最初に会った10月の時は、理解できませんでしたが30日の戦闘でさくらが被弾し、多数の死傷者が出て、もし、私が判断が誤って、大切な仲間を失ったらと思う、自分は、もう・・・」

福内は、再び泣き出してしまった。平賀は、背中を摩つて、落ち着かせる。

秋沢「ちよつと、すまん」

と言つて、携帯を出して誰を呼び出した。

秋沢「ちよつと、用事出来た。すぐに戻る。副長、あとは、頼んだぞ」

磯口「了解」

そう言つて、秋沢は、控え室から出ていった。

数時間後

磯口と平賀・福内が控え室で待っていると秋沢が戻ってきた。

秋沢「今、戻った」

磯口「司令、用事と言つてましたがどのような・・・」

秋沢「あ、福内監察官に会わせておきたい人物だ」

磯口「なるほど」

秋沢「福内監察官」

福内「あ、はい」

秋沢「君に会いたい人物がいる」

福内「誰ですか？」

秋沢「入っていいぞ」

??「失礼します」

福内「え!？」

ドアを開けて、入ってきて福内は、驚きを隠せなかつた。

??「お久しぶりですね。福内監察官」

福内「瀬川艦長!」

そこにいたのは、駆逐艦「さくら」艦長の瀬川だつた。

彼女は、すぐに瀬川に駆け寄つた

福内「瀬川艦長、もう大丈夫なんですか」

瀬川「まだ船が乗れんが体調も良くなつて、普通に生活が出来るようになったからな」

福内「ごめんなさい、私のせいでああなたの乗員5名の命を奪つてしまつて・・・」

瀬川「私を含む、さくらの乗員は、あなたを恨んでなんかいません。それよりも役目

を果たせたと考えています」

福内「役目……」

瀬川「我々が軍に入る際、宣誓書にこのような文章があります。強き責任をもって任務に遂行し、時には、危険を顧みず、身をもって責務を完遂し、国民の負託にこたえる事をここに誓うという文章です」

福内「は！」

福内は、ある事を思い出した。ブルーマーメイドは、海域の治安維持や救助などを行う組織。特に治安維持においては、武装した相手と戦うという事。つまり、任務遂行中に命を落してしまう事もある。だけど、死を恐れては、大切な人や居場所を守る事が出来ない。瀬川艦長が所属している日ノ出軍も同じく国防組織。

自分の大切な物は、自分で守る。

瀬川「それに30日の戦闘で戦死者の内の一人がこう言っていた」

11月30日 駆逐艦「さくら」艦内

被弾から数時間も経過し、重体を陥っていた5人の内、4名が息を引き取り、残る人も虫の息の状態であった。

瀬川自身も魚雷の衝撃はで頭をぶつけ、出血していたが応急手当をしたのち、重軽傷者の救助に当たった。

瀬川「おい、大丈夫か！しっかりしろ」

瀬死の乗員「艦長・・・みくらは、みくらは、どうりなりましたか・・・」

瀬川「大丈夫だ！みくらは、無事だ！」

瀬死の乗員「はあ、はあ、よかった、やつと、自分の、役目、を、は、たせ、た・・・」
瀬川「おい！しっかり、まだ死ぬんじゃないのか！、おい、目を開ける！」
家族の元に戻るじゃないのか！、おい、目を開ける！」

しかし、瀬死の乗員は、息を吹き返す事はなかった。

瀬川「瀬死の彼が言った最後の言葉だ」

福内「うう・・・」

彼女は、情けなかった。庇ってくれた自分達を心配してくれたのに恨んでいると考え
てしまい、何って自分が情けないと思った。

瀬川「失われた命は、二度と帰って来ない。だが、福内監察官、君に出来る事は、一
つある」

福内「え、それは一体・・・」

瀬川「亡くなった「さくら」の乗員の分を強く生きる事だ、これをする事で彼らの無
念は、晴らされるだろう」

福内「!!」

「そうだ、ここで逃げてしまった私達を守り、亡くなつてしまった乗員の無念を晴らす事は、出来ない。自分を報いを受け、死を恐れない強き自分を創りあげなければいけない。」

平賀「福内？」

福内「秋沢司令、磯口副長、そして瀬川艦長、私、もう逃げません。次こそ自分の大切な物を守つてみせます」

秋沢「ああ、そのいきだ」

瀬川「どんな状況下に置かれても死を恐れずに任務に遂行出来る事を私からも期待する」

福内「はい！」

日本存亡の危機、敵部隊、日本侵攻

第十五話 予兆

2015年12月16日 JST (日本標準時) 23:20 南西諸島沖上空

日ノ出海軍 早期警戒機E-2 コールサイン「ファルコンファイヤー」

レーダー員「ん、これは・・・」

レーダー指揮官「どうした」

レーダー員「この海域に所属不明の艦艇を捉えました」

指揮官「ブルーマーメイドか？」

レーダー員「いえ、それにしても大きいです。この大きさから駆逐艦クラスかと」

指揮官「何隻いるんだ？」

レーダー員「4隻です。あ、今、針路を南に変え、日本の海域から離れていきます」

指揮官「うむ、何かの予兆かもしれないな、直ちにいぶき経由で横須賀基地に報告して

くれ」

レーダー員「了解」

2015年12月17日 JST 0:35 神奈川県横須賀市、駐留日ノ出海軍基

地

磯口「失礼します」

秋沢「副長、どうした」

磯口「先程、第173艦隊の旗艦「いぶき」艦長の長谷部一佐から報告がありました」
秋沢「報告の内容は、なんだ？」

磯口「はい、南西諸島沖を所属不明の艦艇を同海域で警戒中であつたE-2のレーダーが捉えたそうです」

秋沢「何隻居たんだ？」

磯口「4隻です」

秋沢「何かも予兆なのかもしれんな、引き続き、警戒を維持するよう、伝えてくれ」
磯口「は！」

そう言つて、磯口は、部屋から退室した。

秋沢「南西諸島沖に不明艦隊、これは、何かが起こる可能性があるな。本国に連絡し、陸軍の地対空・地対艦ミサイル部隊を派遣する必要があるな」

2015年12月17日 JST 10:30 日本海

同海軍、早期警戒機 E-2 コールサイン「ブラボー・アイ」

レーダー員「レーダーに感あり」

レーダー指揮官「何か捉えたか？」

レーダー員「同海域に所属不明の艦艇が3隻」

指揮官「昨日、ファルコンファイヤーが西南諸島の方で4隻を捉えた、今度は、日本海側か・・・」

レーダー員「所属不明艦隊、針路を南西にとりました」

指揮官「再び、南か・・・すぐに基地に報告」

昨日とこの日、南西諸島と日本海側を合わせ、計7隻の所属不明の艦艇を捉えた。日ノ出側は、何かの予兆と考え、本国に連絡を取り、日本国沿岸部に日ノ出陸軍の地对空・地对艦ミサイル部隊を派遣を要請した。但し、12月25日までに異常が無ければ、速やかに日本からの部隊の撤収を行う事を本国から指示された。

この話は、速やかに大使館経由で日本国政府やブルーマーメイドやホワイトドルフィンに伝えられた。

2015年12月17日 JST 19:30 横須賀日ノ出海軍基地

秋沢「取り敢えず、本国には、陸軍の地对空・地对艦ミサイル部隊を派遣を受諾したが今月の25日までに異常が無ければ、部隊の撤収か・・・」

磯口「司令、報告があります」

秋沢「ああ、言ってくれ」

磯口「我が海軍の警戒機が小笠原諸島近海に所属不明の艦艇三隻を捉えました」

秋沢「今度は、小笠原近海か、その後の進路は、」

磯口「針路を西に執り、小笠原近海から離脱しました」

秋沢「これで計10隻か、この不明艦隊の出没から予測できるのは、日本国首都又は大都市への攻撃を行う際の侵攻ルートという事が妥当かもしれん」

磯口「もし、司令が予測した事が現実化したら」

秋沢「確実に不明艦隊が狙うのは、日本国の制圧（占領）する事であろう」

磯口「この事をすぐに日本政府やブルーマーメイド及びホワイトドルフィンにも伝え
ます」

秋沢「ああ、頼んだ」

磯口は、すぐに部屋を退室し、ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンに報告するため、ハイヤーに乗り、基地を出発した。

秋沢「今月末、この国は、最大の危機を迎える」

続く

第十六話 対策

2015年12月17日 JST 22:00 横須賀駐留日ノ出海軍基地

磯口が基地を出てから2時間半後に数台のハイヤーが到着した。前方の一台目に乗っていたのは、磯口である。2〜3台目は、政府関係者、4〜5台目は、海上安全整備局関係者、6台目は、ブルーマーメイド関係者、7台目は、ホワイトドルフィン関係者が乗っていた。ブルーマーメイド関係者の中に安全監督室室長の「宗谷真霜」もいた。関係者は、海軍基地の会議室に入り、二日間における不明艦隊の行動とその後について、話された。

磯口「皆さん、お忙しい中、集まってくいただきありがとうございます。」

日本政府関係者「貴官が報告したい事があって来たのだが、一体、何の報告だ？」

安全整備局関係者「我々も呼ばれたが、一体、何だね・・・」

政府及び安全整備局の人間が愚痴っていると、

秋沢「皆さんがお集まりいただいたのは、12月16日から今日までに出没した不明艦隊についての事です」

安全整備局「不明艦隊か、いつも漁船で出没する海賊ではないのか？」

秋沢「最初は、我々もそう考えました。しかし、出没した不明艦隊の艦艇が大きさが漁船ではありませんでした」

秋沢は、早期警戒機が捉えた艦影をスクリーン上に表示した。

政府関係者「何だ、この大きさは、漁船にしては大きすぎるぞ」

秋沢「艦影の大きさを確認したところ、全長155m級で我々国は、この大きさから駆逐艦クラスと思われます」

ホワイトドルフィン関係者「155mだと!?東舞鶴校が使っているあおつきより大きいじゃないか!」

政府関係者「それが南西諸島沖に出没したというのか・・・」

秋沢「南西諸島沖だけではありません。今日、日本海や小笠原近海に出没しました」

政府関係者「な、日本海と小笠原近海にもか・・・」

秋沢「この二日間で確認が出来たのは、南西で4隻、日本海と小笠原近海を合わせ6隻、計10隻が日本の海域に出現しました」

安全整備局関係者「一体、何が起ころうとしているんだ・・・」

ここで安全監督室の「宗谷真霜」が質問する

真霜「秋沢司令、今回の不明艦隊の出没について、どう、お考えですか?」

秋沢「はい、私の予測では、この不明艦隊の出現は、日本の首都及び大都市を攻撃を

行う際に侵攻するルートの模索かと予測しています」

政府関係者「我が国にへ侵攻だど!？」

政府関係者は、動揺した。まさか、不明艦隊の目的は、日本国へ武力侵攻を行い、占領しようという事に危機感が強まった。

安全整備局「貴官、何故、そのような事が考えられるのだ」

秋沢「この二ヶ月の間、日本の海域で民間船の沈没する事故が多発している事です」
確かに10月末頃から日本の海域を航行する民間船の沈没が変に多い事が分かる。

秋沢「そこで我々は、昨月の30日に起こった沈没した貨物船を引き揚げて、調査した所、船底から不発したミサイル、誘導噴進弾が発見されました」

政府関係者「つまり、この二ヶ月の間、沈没事故の多発は、不明艦隊の攻撃だという事なのか!」

秋沢「はい、その通り」

政府関係者や安全整備局関係者は、動揺した。まさか、二ヶ月という間に日本の海域が危険と化していたとは、認識していなかった。

ホワイトドルフィン関係者「秋沢司令、今、我々に出来る事は、何だ」

秋沢「今、この国が出来る事は、今、不明艦隊による日本へ攻撃の兆候を察知する事が出来たので、速やかにブルーマーメイド及びホワイトドルフィン部隊を展開させる事

です。現時点で不明艦が行ったのは、偵察なのですぐに侵攻する事はないと思いますが、即時に展開するべきでしょう」

政府関係者「貴官の本国（日ノ出国）は、何と言っていた」

秋沢「我が国は、万が一、貴国が攻撃される事を踏まえ、我が国の陸軍の地対空・地対艦ミサイル部隊を派遣する事を決めたそうです。」

政府関係者「それは、大きな助け舟だ」

政府を始めとする関係者は、一時安堵したが

秋沢「しかし、タイムリミットもあります」

政府関係者「やつはり、無期限にいる訳ではないか」

秋沢「はい、今月の25日までに異常が確認されない場合は、展開しているミサイル部隊を日ノ出へ直ちに撤収を行わなければなりません」

政府関係者「しかし、何故、25日まで何だ？」

秋沢「日本に我が国の地上部隊が長期に亘り、展開していると貴国の国民を不安を煽つてしまう可能性があるからです。我々は、可能な限り貴国の国民感情を刺激したくないです」

政府や安全整備局の関係者は、重い空気となったが宗谷真霜は、この様な質問をした。真霜「貴国が派遣する地対空・地対艦部隊は、どのくらい居るのですか」

秋沢「地对空ユニットは、7部隊、地对艦ユニットは、7部隊、計14部隊です」
政府関係者「14か、その部隊を何処に展開させるんだ？」

秋沢「我々に計画では、札幌・仙台・名古屋・大阪・福岡に地对空・地对艦部隊を1ユニットずつ、展開します。特に今回の計画で重点を置くのは、首都東京です。展開部隊数は、2ユニットです」

真霜「何としても東京は、死守しなければならないという事ですな」

秋沢「はい、首都陥落は、日本制圧を意味すると同時に作戦失敗と繋がります。」
そして、この日から日本は、緊迫した空気に変わった。

続く

第十七話 展開と勃発

2015年12月20日 JST 8:00 横須賀駐留日ノ出海軍基地

日ノ出海軍横須賀基地に8隻の輸送艦及び揚陸艦2隻とそれを護衛してきた第50駆逐隊が対岸に接岸し、輸送艦そして、揚陸艦から地对空・地对艦ミサイル部隊が日本領土に上陸した。到着した部隊は、各方面に分散し、不明艦隊からの攻撃に備える。一旦、輸送艦及び揚陸艦は、本国へ一時帰還し、任務終了後、部隊の撤収作業を行う為、再び来日する。

平賀「それにしても結構な部隊の数ですね」

真霜「万が一、相手の噴進弾が市街地に着弾する事になれば、大変な事になる、その為、日ノ出の部隊は、私達にとっては最後の砦」

福内「これから各都市に展開するため、分かれるんですよね」

真霜「ええ、今、思う事は、展開が完了したという情報だけね」

真霜達が会話している中、日ノ出陸軍のミサイル部隊が横須賀基地を出発し、各都市に向かっていた。

日ノ出海軍基地内の司令官室では、その光景を秋沢達も見ていた。

磯口「部隊の展開、間に合いますかね」

秋沢「今、我々にできるのは、祈るだけだ」

2015年12月21日 JST 1:30

磯口「司令、ミサイル部隊全ての展開が完了しました」

秋沢「よし、これで地上側の防衛体制を整えた。あとは、海上における展開は、こうなるな」

海上における展開図

(太平洋) 北海道↗東北:第509艦隊, 関東↘関西地方:第28駆逐隊, 四国↘九州地方:第12潜水隊

(日本海) 北海道:第42駆逐隊, 東北↘中国地方:第173艦隊, (東シナ海) 九州:第171潜水隊

秋沢「この展開図をすぐにブルーマーマイド及びホワイトドルフィン、そして、日本政府にも送ってくれ」

磯口「了解しました」

秋沢「これで作戦計画は、練った。あとは、有事が起きない事を祈るだけだ」

2015年12月21日 JST 9:30 日本政府

政府関係者「小佐川総理、日ノ出軍からの部隊の展開図が届きました」

小佐川「そうか」

小佐川は、日ノ出軍から届いた展開図を見た。

小佐川「我々国も彼らだけに任せる訳には、いかない。ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンにも出動させる事を言ってくれ」

政府関係者「分かりました」

2015年12月21日 JST 10:00 ブルーマーメイド横須賀基地

真霜「政府も決断したみたいね」

平賀「と、言う事は」

真霜「私達ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンに出動命令が下されたわ」

福内「ついにですか」

平賀と福内は、息を呑んだ、日本史上初の治安出動が発令された。

真霜「政府の内容では、私達は、太平洋側に展開されるようよ。ホワイトドルフィンは、日本海側に展開するみたいよ」

平賀「ついに武装艦隊との実戦が始まるのですね」

2015年12月21日 JST 14:00 横須賀

ブルーマーメイド及び日ノ出軍基地から多数の艦艇が出航した。東京湾内までは共に行動していたが湾外に出るとそれぞれの海域に展開するため、分散した。同時刻、ホ

ワイトドルフィンも出航した。

2015年12月21日 JST 22:00

磯口「司令、全て艦隊が展開する海域に到達しました」

秋沢「うむ、しかし、問題は、何処から侵攻してくるかだ」

磯口「そうですね。関東から関西の防衛を担っている第28駆逐隊は、大丈夫でしょうか」

秋沢「大丈夫だ。第28駆逐隊の他にブルーマーメイド艦隊がいる」

磯口「もしも、艦隊が危機的状况になった場合は」

秋沢「全速力で東京を目指す」

磯口「はい、分かりました」

秋沢「(山田艦長、福内艦長、首都防衛を頼むぞ)」

2015年12月22日 JST 3:45 沖縄本島にある水平線レーダー

ブルーマーメイド隊員「レーダーに何も映ってないわね」

ブルーマーメイド隊員「でも、気を抜かないでください」

ブルーマーメイド隊員「分かっているよ、ん、」

ブルーマーメイド隊員「どうしたの？」

ブルーマーメイド隊員「レーダーに反応あり、数は、10!」

ブルーマーメイド隊員「10隻！ついに現れたというの・・・」

ブルーマーメイド隊員「！不明艦隊、何か撃ちました！」

ブルーマーメイド隊員「一体、何を・・・」

その瞬間、強い揺れが施設内を襲った。

ブルーマーメイド隊員「どうしたの！何が起こったの？」

ブルーマーメイド隊員「所属不明艦隊、レーダーロスト！、ダメ、レーダーの反応がない」

ブルーマーメイド隊員「まさか！」

一人のブルーマーメイド隊員が外に出るとレーダーが設置されている場所が炎上していた

ブルーマーメイド隊員「何てことなの・・・すぐに統合管制艦に連絡！、レーダーが攻撃された」

2015年12月22日 JST 4:30 東京 ブルーマーメイド統合管制艦

ブルーマーメイド隊員「宗谷監督官！大変です！」

真霜「どうしたの！」

ブルーマーメイド隊員「沖縄本島にある水平線レーダーが攻撃されました！」

真霜「何ですって！被害状況は、どうなの！」

ブルーマーメイド隊員「幸い、レーダー監視をしていた隊員は、無事ですがレーダーは跡形なく破壊されました」

真霜「ついに始まった！すぐに政府に報告して！」

ブルーマーメイド隊員「了解！」

そう言って、ブルーマー隊員は、部屋から急いで退室した。

真霜「秋沢司令が予測していた事が現実の物となったわね」

続く

第十八話 本当の戦争

政府関係者「総理、緊急事態です」

小佐川「何があった、」

政府関係者「沖繩本島にある水平線レーダーが所属不明の艦隊から攻撃を受けました」

小佐川「何だと、レーダー監視を行っている隊員の安否は？」

政府関係者「確認した所、隊員は、無事です」

小佐川「そうか、秋沢司令に伝えてくれ」

政府関係者「はい」

小佐川「すぐに第28駆逐隊と共にしているブルーマーメイド艦隊の増援に向かってほしいという事を伝えてくれ」

政府関係者「はい」

関係者は、すぐに部屋から退室した。

小佐川「今まで発せられなかった治安出動が昨日、発令され、今日、敵の侵攻が始まった。何としても国民に被害が及ぶ前に対処しなければ」

小佐川総理は、自国民に被害が出るという最悪の状況になる前に対処しなければという考えが強かった。

2015年12月23日 JST 5:30 福島県沖

磯口「艦長、日本政府からです」

秋沢「読んでくれ」

磯口「所属不明の艦隊が南西諸島沖に出現し、水平線レーダーを攻撃、その後の足取りが不能、すぐに第28駆逐隊と行動を共にしているブルーマーメイド艦隊を援護に向かつてほしいとの事です」

秋沢「分かったすぐに関東方面に向かうぞ」

秋沢が指揮する第509艦隊は、関東方面に向かう。

2015年12月23日 JST 8:00

日ノ出海軍 早期警戒機E-2 コールサイン「ファルコンファイヤー」

レーダー員「レーダーに反応あり、10隻です」

指揮官「沖縄のレーダーを破壊した艦隊か、すぐに第28駆逐隊に連絡」

レーダー員「了解」

汎用駆逐艦「はまぎく」

警戒機「ファルコンファイヤーからはまぎくへ、敵艦隊、沖縄のレーダーの破壊後、針

路を北東に執り、侵攻中」

山田「こちらはまぎく、了解した」

山田「はまぎくからみくらへ」

福内「こちら「みくら」、山田艦長、何かありましたか？」

山田「先程、情報が入った。沖繩に水平線レーダーが破壊され、針路を北東に執り、侵攻しているようだ」

平賀「レーダーが攻撃された!?監視員は、無事なんですか？」

山田「それについても報告があった。敵は、レーダーを破壊しただけでレーダー監視員への被害は、無いようだ。だが、レーダーが使用不可になったため、南西諸島は、ブラックアウト状態だ」

福内「つまり、相手は、確実に東京を目指しているという事ですね」

山田「その通りだ。援護のため、秋沢司令が指揮する509艦隊も向かっているが時間要するようだ」

福内「つまり、首都防衛は、私達の命運に懸かっているという事ですね」

山田「ああ、そうゆう事だ」

一方、「ファルコンファイヤー」では、

レーダー員「うん、この大きさは、(解析作業中)」

指揮官「うん、レーダー員、何かあったか？」

レーダー員「こいつは、不味い！指揮官、これを見てください」

指揮官「何？見せてくれ」

レーダー指揮官が解析したデータを見ると10隻中1隻が駆逐艦とは、思えない大きさの艦艇が映っていた。

指揮官「確かに不味いぞ、直ちに509艦隊に連絡」

警戒機「ファルコンファイヤーからあかぎへ」

磯口「こちらあかぎ、どうした」

警戒機「我がレーダーが敵艦隊を捕捉している中、10隻中1隻に”大型艦”と思しき艦影を捕捉しました」

磯口「大きさ、どのぐらいだ」

警戒機「大きさから見て300mクラスです」

磯口「おい、その大きさとなると」

秋沢「空母クラス、相手も航空戦力を有しているという事だな」

磯口「しかし、この世界において、航空戦力を有しているのは、我々だけのはずですよ」

秋沢「確かにそうかもしれん、我々は、速やかに東京を目指すぞ。航空隊に待機命令を出してくれ」

磯口「は！」

続く

第十九話 異世界初の対空戦 前編

秋沢「あかぎからはまぎくへ」

山田「こちらはまぎく、秋沢司令、何かありましたか」

秋沢「先程、ファルコンファイヤーから連絡があつた。敵艦隊10隻中1隻に航空母艦がいる事が分かつた」

山田は、驚愕した。この世界で航空母艦を有しているのは、日ノ出だけだと思つていたがまさか国籍不明の艦隊にも空母がいたとは、到底、信じられない事であつたが、今更、驚いてもしようがないと考えた。

山田「なるほど、しかし、敵に空母がいるとは・・・」

秋沢「現在も敵艦隊は、針路を北東に維持したままだ」

山田「やはり、敵の狙いは、首都制圧ですか」

秋沢「その考えは、正しい。現在は、我々は、貴艦隊の支援に向かつているが時間を要する。それまで激しい戦闘が予測される。旗艦も油断してはならんぞ」

山田「了解しました」

秋沢「あと、ブルーマーメイド所属艦を何としても守り抜くんだ。彼女らは、対空戦

闘の経験がないに等しい。絶対に一隻も被弾させるな」

山田「了解」

そう言つて、山田は、あかぎとの通信を終了させた。

押澤「艦長、どうされますか」

山田「みくらには、私から伝える。副長、貴官は、艦橋にて操艦の指示を執つてくれ」

押澤「了解」

押澤副長は、すぐにCICを退室し、艦橋に向かった。

山田「はまぎくからみくらへ、福内艦長、聞こえるか」

福内「福内です。山田艦長、何かあったんですか」

山田「先程、秋沢司令から連絡があつた。敵艦隊10隻中1隻が大型の航空母艦である判明した」

平賀「航空母艦!？」

平賀達は、まさか、日ノ出国しか有していないはずの空母が敵にいますという事に驚愕した。

山田「現在、509艦隊は、我々の支援の為、向かっているが時間を要するため、水だけでなく上空からの攻撃も激しくなる事が予測される。我が第28駆逐隊は、総力を挙げて、貴艦隊を守り抜く」

福内「了解しました、貴艦隊も無理しないよう、気を付けてください」

山田「了解した。」

そして、ブルーマーメイド艦「みくら」との通信を終了した。

2015年12月23日 JST 12:00 ファルコンファイヤー

レーダー員「レーダーに機影を探知しました」

指揮官「来たか、何機だ」

レーダー員「6機編隊です」

指揮官「第28駆逐隊に通達、敵航空母艦から敵戦闘機、発艦」

駆逐艦「はまぎく」

はまぎく乗員「敵戦闘機、6機、向かって来ます」

山田「ついにか、現在の距離は」

はまぎく乗員「艦隊との距離430マイル、敵ミサイル射程圏内まで20分です」

山田「はまぎくから全艦へ達する。対空戦闘用意！」

続く

第二十話 異世界初の対空戦 後編

山田艦長からの対空戦闘の命令と同時に各艦で戦闘態勢が整った。

はまぎく砲雷長「敵機、レーダー波を照射、捕捉されました」

山田「位置は」

はまぎく砲雷長「方位230、距離78マイル、高度3万フィート、速度1.5変わらず、6機、向かって来ます」

山田「来るぞ」

はまぎく砲雷長「敵機、ミサイル発射、10発、向かって来ます。距離55マイル」

はまぎく乗員「敵機、ミサイル発射」

押澤「頼むぞ、たかはぎ」

ここでたかはぎについて、小説明。

たかはぎは、やまぶき型の14番艦であり、姉妹艦である。

駆逐艦「たかはぎ」 浪瀬一佐

浪瀬「いいか、今まではこの為にあつたと思え！」

CIC一同「は！」

浪瀬「対空戦闘用意！」

同駆逐艦砲雷長 武藤

武藤「対空戦闘用意、前甲板VLS、1番から10番、対空ミサイル発射用意！」

浪瀬「砲雷長、目標10、一発も味方艦に向かわせるな」

武藤「了解」

たかはぎ乗員「データ入力完了、発射準備よし」

武藤「撃て」

発射命令と同時にたかはぎの前甲板にあるVLSが開放され、対空ミサイルが放たれる。

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「日ノ出艦「たかはぎ」が誘導噴進弾の発射を確認しました」

平賀「敵の飛行物体が放った誘導噴進弾を迎撃するためね」

福内「そうね」

志度「上手くいくのでしょうか・・・」

平賀「信じるしかないわ」

はまぎく乗員「たかはぎ、対空ミサイルを発射、10発とも迎撃コースに入りました。目標との距離6マイル、接触まで10秒」

はまぎく乗員「9・8・7・6・5・4・3・2」

たかはぎが放った対空ミサイルは、敵ミサイルに到達し、空中で爆発した。

武藤「敵、全て撃墜しました」

浪瀬「よし」

はまぎく乗員「敵ミサイル、全て撃墜しました」

はまぎくCIC内に安堵に空気になったが山田は、違和感を感じた。

山田「砲雷長」

砲雷長「はっ」

山田「敵は、6機編隊で来ていたはずだ」

砲雷長「え、6？」

山田「敵が放ったミサイルは、10発、1機に2発と考えて、1機、撃っていないぞ」
はまぎく乗員「11時方向から敵機、ファルコンファイヤーのレーダーが捉えていま
す。距離20マイル、超低空で接近中」

山田「たかはぎCICへ」

浪瀬「こちらたかはぎ」

山田「1機が超低空で接近してくる。攻撃位置で必ず機首上げを行う。その瞬間を狙
う、撃墜せよ」

駆逐艦「たかはぎ」

武藤「本気で撃ち落すんですか」

ブルーマーメイド艦「みくら」

「撃墜せよ」

寒川「え!？」

志度「乗っている操縦士ごと撃ち落とすというの・・・」

福内「みくらからはまぎくへ、山田艦長、この距離で撃ち落したら、操縦士の生存は、

困難になります」

山田「そこでやらなければ、敵の隙を埋める事が出来なくなる」

福内「・・・」

山田「この海は、もう戦場だ」

ファルコンファイヤー「コンタクト! 方位200、距離5マイル、高度1000フィート」

浪瀬「対空戦闘用意」

たかはぎ乗員「対空戦闘用意、敵機、ミサイル2発、撃ちました」

たかはぎ砲雷長「前甲板VLS、11番から13番、対空ミサイル発射用意」

たかはぎ乗員「データの入力完了」

浪瀬は、顔を縦に振った。

たかはぎ砲雷長「撃てえ！」

駆逐艦「たかはぎ」の前甲板のVLSから対空ミサイル3発が発射された

はまぎく乗員「たかはぎ、ミサイル発射、目標到達まで約3マイル！」

はまぎく乗員「敵ミサイル撃墜、一発、敵機に向かいます」

たかはぎが放った対空ミサイルが敵機に到達し、空中で爆発した。それをブルーマーメイド艦「みくら」も確認した。

福内「……」

平賀「これが……対空戦……」

平賀は、初めて見る三次元の戦闘、「対空戦」に言葉を失った。

寒川「私達、ブルーマーメイドは、初めて人の命を奪った」

志度「ん……」

平賀達は、何も言えばいいのか、分からない状況であった。

はまぎく乗員「敵機、撃墜しました」

山田「忘れてはならん、この実感を一生、身に染みておくんだ」

押澤「達する、敵機パイロットの捜索を行う、各艦に通達、死なせてはいけない」

第28駆逐隊各艦から哨戒ヘリが発艦した。

続
く

第二十一話

報告

2015年12月23日

JST

14:45

東京 ブルーマーメイド統合

管制艦

真霜「敵機を撃墜した!?それで操縦士は、」

ブルーマーメイド隊員「残念ながら助からなかったそうです。」

真霜「そう・・・報告、ありがとう、貴方は、元の持ち場に戻りなさい」

ブルーマーメイド隊員「はっ」

ブルーマーメイド隊員は、監督室室長の宗谷真霜に報告を終え、部屋から退室した。

その頃、首相官邸では

小佐川「撃墜した？」

政府関係者「操縦士は、助からなかったと」

小佐川「そうですか」

政府関係者「では、」

小田崎「しっかりしろ、ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンの最高指揮官は、内

閣総理大臣であるお前だ」

小田崎は、この国の官房長官であり、小佐川と同期である。小佐川が選挙を行った際、彼は小佐川のバックアップを務めた。

小佐川「ああ、」

一方、はまぎくでは

哨戒ヘリ「パイロットの生存、確認出来ません、繰り返すパイロットの生存、確認出来ません」

福内「私達は、初めて対空戦闘を経験し、操縦士の命を奪った。治安出動が出ている以上、当然の事だと貴方は言うでしょう、そこに何の躊躇いもないのですか」

山田「福内監察官、強き力を有す事は、必要な時に怯む事無く行使する事だ」

福内「敵機が放った噴進弾を私達は、既に撃ち落としていました。更なる攻撃を仕掛けてきましたか、本当に撃ち落とす必要は、あったのですか」

山田「必要は、あった。」状況を見極める者なら」

福内「……」

2015年12月23日 JST 16:50

福内「宗谷監督官、そちらの様子に変化はありませんか？」

真霜「今の所、東京を始めとする都市は、平穏を保っている状態よ」

福内「そうですか」

福内は、現在の状況を上司である真霜から聞いて安堵した。

真霜「でも、ちよつと官邸の方で問題が起こっているの」

福内「何かあつたんですか」

真霜「官邸でも今回の撃墜した件の報告について、慎重派と奪回派に分かれて論争になつているの」

福内「小佐川総理は、どのような立場何ですか？」

真霜「小佐川総理は、どっちも属さない中立的な立場よ。だけど、今回の件が今後の政治・外交にも大きな影響が出る可能性があるそうなの」

福内「つまり、今後は、政治・外交に影響する戦闘は、極力、回避しないといけないという事ですね」

真霜「ええ、この件は、後に日ノ出側にも伝わるわ」

福内「分かりました。此方も極力、戦闘を回避するように最善を尽くします。それでは」

そう言つて福内は、真霜との通信を終了した。

続く

第二十二話 対潜戦闘、再び

2015年12月23日 JST 17:45

第28駆逐隊とブルーマーメイド艦隊は、日ノ出海軍第171潜水隊と合流し、今後の戦闘について考えていた時、日本政府から通達がくる。

日ノ出海軍 第171潜水隊所属 潜水艦「いしがき」

いしがき乗員「アンテナを下ろします」

潜水艦「いしがき」のモニター画面には、日本政府からの通達で「今後の外交に影響する戦闘は、極力、回避されたし」との文章が表示された。

岩上「どうする・・・」

潜水艦「いしがき」艦長 石上祐司 一佐

はまぎくCIC

はまぎく乗員「日本政府から通達、今後の外交に影響する戦闘は、極力、回避されたしとの事です」

福内「何としても戦線拡大だけは、防がなければならないという事です。じゃあ、どこからが戦争になるというの・・・」

山田「我々日ノ出軍・ブルーマーメイド・ホワイトドルフィンのみならず、一般国民への被害が及んだ時、戦争と呼称される」

福内「……」

その頃、海中では

ソナー員「スクリー音、方位180°、距離8500、深度450、先月30日に貨物船とさくらを攻撃した潜水艦です」

岩上「現したか」

ソナー員「敵潜水艦、魚雷発射管を開きました」

いしがき副長「発射管を開いた？」

岩上「こいつは、必ず撃つ、やらなければ、28・ブルマー艦隊が危険だ」

ソナー員「敵潜水艦、速力を上げました」

いしがき副長「艦長、敵は、まだ、我々に気付いていません。今なら、攻撃できます」

岩上「よし、魚雷戦用意、一・二番管、発射用意」

いしがき乗員「一・二番管、発射用意」

その瞬間、敵潜水艦に変化があつた

いしがき副長「敵潜水艦、魚雷を撃ちました」

岩上「何……」

たかはぎ乗員「たかはぎからはまぎくへ敵潜水艦、魚雷発射、6本、来ます」

山田「副長、艦橋にて操艦の指示を出してくれ」

押澤「了解」

山田「はまぎくから全艦へ、対潜戦闘用意」

押澤「魚雷に正対、取舵一杯」

はまぎく乗員「取舵一杯！」

押澤「左舷、三番・四番、デコイ発射」

駆逐艦「はまぎく」から直ちにデコイが発射された

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「敵潜水艦、魚雷を発射、6本です！」

福内「(先月と同じ)迎撃態勢を執りながら、回避よ！」

寒川・志度「了解！」

はまぎく乗員「敵魚雷、デコイに食い付き、追尾中」

押澤「これで多少の時間は、稼げる」

潜水艦「いしがき」

いしがき副長「艦長、このままでは艦隊が危険です。直ちに攻撃すべきです」

岩上「だが、攻撃すれば、敵潜水艦に乗っている乗員数十名の命が海底に消える」

いしがき副長「しかし！」

岩上「発射止め」

いしがき乗員「発射止め」

岩上「敵潜水艦までの距離は」

いしがき乗員「距離、2100」

岩上「よし、このまま直進だ。最大船速で向かえ」

いしがき乗員「最大船速」

岩上「ソナー員、距離を上げろ」

ソナー員「750、700、650、600、550」

はまぎく乗員「いしがきが敵潜水艦に向かっていきます。衝突コースです」

ブルーマーメイド艦「みくら」

福内「敵潜水艦に接近してらって」

平賀「まさか！体当たりして二度目の攻撃を阻止する気」

寒川「もしも、当たり前何処が悪ければ、敵潜だけでなくいしがきまで甚大なダメージ

が出て、浮上する事が出来なくなったら、二艦合わせて、乗員数百名の命が消えます」

みくらに緊張が走る。

はまぎく乗員「敵魚雷、デコイ追走から反転、艦隊に向かって来ます」

山田「はまぎくからあじさい、押谷艦長」

押谷「捉えています、迎撃します」

駆逐艦「あじさい」の前甲板VLSが開放された

押谷「VLA攻撃用意、アスロック、撃てえ！」

あじさい砲雷長「てえ！」

あじさいから対潜ミサイル「アスロック」が発射された

福内「噴進魚雷、攻撃用意」

志度「え、我々も撃つんですか!？」

福内「私達もやらなければ、駆逐艦「さくら」の二の舞になる」

志度「了解、噴進魚雷発射用意」

寒川「データ入力、完了しました」

福内「撃てえ！」

志度「てえ！」

みくらの前甲板にあるVLSが開放され、噴進魚雷が発射された。

はまぎく乗員「ブルーマーメイド艦「みくら」、アスロックらしき物を発射しました」

山田「ついに成し遂げたな、福内監察官、いしがきと敵潜との深度差は」

はまぎく砲雷長「いしがき5m上位です」

はまぎく乗員「敵潜水艦、回避行動、転舵しつつ、アツプトリム、いしがきも同方向に合わせ、アツプトリム、衝突します」

あじさい乗員「アスロック、敵魚雷に命中します」

敵魚雷とあじさいが撃ったアスロックそして、みくらが撃った噴進魚雷が接触し、海中で爆発した。

あじさい乗員「敵魚雷、全てロスト、迎撃に成功しました」

押谷「はあ、無事に成功してよかった」

岩上「総員、衝撃に備えろ」

いしがき乗員「総員衝撃に備え！」

岩上「もう逃がさんぞ」

そして、いしがきは、敵潜水艦に体当たりをした。

続く

第二十三話 いしがき、離脱

岩上の「総員、衝撃に備えろ」と同時に乗組員全員が耐衝撃姿勢を執った。潜水艦「いしがき」は、敵潜水艦に接近していた。そして、いしがきの船底が敵潜の艦橋に接触した。

全乗員「うわあー！ー！」

岩上「のわっ！」

あまりの衝撃波の強さに岩上は、艦内にある機械に頭をぶつけた。

駆逐艦「はまぎく」

はまぎく乗員「衝突音を確認しました」

押澤「いしがきを探知、出来てるか」

はまぎく乗員「はい、いしがきと敵潜を捉えています、あ、双方を共も海上に向けて、浮上中」

山田「はまぎくからみくらへ、貴艦隊の艦艇を直ちに向かわせてほしい、但し敵潜は、攻撃姿勢を維持している可能性がある。戦闘態勢を維持し、接近せよ」

ブルーマーメイド艦「みくら」

福内「こちらみくら、了解しました」

平賀「はちじょうとみやけに連絡して、直ちに敵潜水艦の確保及び乗員の拘束、そして、いしがきの救助に向かう事を知らせて」

寒川「了解」

寒川は、直ぐに僚艦の「はちじょう」と「みやけ」に対して、敵潜水艦の捕獲と乗員の拘束、そして、潜水艦「いしがき」の救助に向かった。

寒川「福内監察官、いしがきと敵潜水艦が浮上してきました。敵潜の方は、艦橋がやられています」

福内「あの状態では、もう潜航する事は、出来ないわね」

志度「福内さん、いしがきから通信です」

福内「繋げて」

岩上「こちら潜水艦「いしがき」だ。福内艦長、無事ですか、」

福内「大丈夫です。魚雷は、あじさいと我が艦が撃った噴進魚雷で迎撃しました」

岩上「そうですか、福内艦長、山田艦長に報告してほしい」「本艦、船底の損傷により浸水被害あり、これ以上の潜航は、危険と判断とし、我が艦は、横須賀に帰投する」という事を伝えてほしい」

福内「了解しました」

そして、潜水艦「いしがき」とブルーマーメイド艦の「はちじょう」と「みやけ」は、敵潜水艦を曳航しながら、横須賀に帰投していた。

福内「みくらからはまぎくへ、山田艦長、岩上艦長からの報告です。」

山田「ああ、報告を教えてください」

福内「はい、本艦、船底の損傷により浸水被害あり、これ以上の潜航は、危険と判断とし、我が艦は、横須賀に帰投するとの事です」

山田「そうか、作戦中の離脱は、状況を苦しくさせてしまうが仕方ない。残った第171潜水隊に我々を援護してくれるが、敵が航空攻撃を仕掛けてきたら、更に厳しい状態に立たされるな」

福内「そうですね、509艦隊が間に合えば、いいのですが」

山田「とりあえず、秋沢司令の艦隊の到達を祈ろう」

続く

第二十四話 報告と政府の動向

2015年12月23日 JST 20:20 東京 ブルーマーメイド統合管制艦

ブルーマーメイド隊員「宗谷監督官、報告があります」

真霜「読んで」

ブルーマーメイド「はい、武装艦隊と思われる潜水艦一隻を捕獲及び乗員を拘束したとの事です」

真霜「これで相手の目的が判明するわね」

ブルーマーメイド隊員「それと、この捕獲に当たって、日ノ出海軍の潜水艦「いしがき」が被害を受けた模様です」

真霜「被害?!、まさか、攻撃を受けたの、」

ブルーマーメイド隊員「いえ、どうも、いしがきが敵潜に体当たりをした事による被害だそうです」

真霜「何って、無茶な事を・・・」

ブルーマーメイド隊員「何でも最初は、魚雷攻撃を行うとされていたそうですが、敵潜水艦の人命優先を考えた、結果かと・・・」

真霜「出来る限り、死傷者を増やしたくないといういしがきの艦長の想い、伝わるわね・・・ありがとう、今後も情報が拳がってくるから、気を抜かないで」

ブルーマーメイド隊員「はい」

ブルーマーメイド隊員は、真霜に報告を終えると部屋から退室した。

2015年12月23日 JST 20:50

外務省関係者「先程、緊急の国際会議が開かれました。各国には、これまでの経緯を可能な限り、説明しております。しかし、それぞれの思惑もあり、結果が出るには、時間を要するかと、」

小田崎「出来れば、関わりたくないという事だろう、」

外務省関係者「失礼します」

小田崎「ああ」

外務省関係者は、部屋から退室した。

小佐川「我が国の憲法には、「戦争放棄」と「再軍備禁止」を規定しているが独立自存のための自衛権は、憲法以前の自然権として、各国が有している。外部からの不当な武力に対して、最低限の武力を持つ事は、当然の事だ。まさか、自衛権がこうして使われる日が来るとはな」

小田崎は、席を立った。

小佐川「今、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンは、平和な歴史を背寄って、今、懸命に戦っている。我々も何としても戦争を回避しなければ」

2015年12月23日 JST 23:08

第509 即応機動艦隊は、無事に第28 駆逐隊とブルーマーメイド「みくら」と合流し、今までの戦闘を報告していた時である。

ファルコンファイヤー「ファルコンファイヤーからあかぎへ」

あかぎ乗員「こちら、あかぎ」

ファルコンファイヤー「敵空母から戦闘機が発艦、計12機があかぎへ向かいました。高度3万フィート、速度マッハ1.1、到達まで35分」

あかぎ乗員「艦長、10機以上になると戦闘機なしでは、防ぎきれません」

続く

第二十五話 異世界での空中戦 前編

航空母艦「あかぎ」パイロット待機室

岡崎「いいか、敵の攻撃は、更に激しくなるだろう、出撃も近い、今更ではないが必要なのはチームワークだ。僚機・クルー・整備員を信頼し、信頼されろ、その支えのお陰で海軍戦闘機隊の守兵である事に誇りに持て、そして、如何なる状況下に置かれても冷静かつ迅速に対応しろ、これまでの訓練の成果を見せてやれ」

戦闘機パイロット一同「はい！」

磯口「艦長、そろそろです」

秋沢「ああ、第75戦闘機群、出撃準備！」

艦内に戦闘機隊の出撃を知らせる警報が流れ、パイロット達は、すぐに甲板に向かい、自らが操縦する戦闘機に搭乗した。

秋沢「岡崎群司令、これは訓練ではない、戦闘だ。敵機を捕捉したら撃墜を許可する」

岡崎「はっ」

秋沢「パイロットへの指示は」

岡崎「まず、警告、向こう撃つまで撃つなど」

秋沢「付け加えろ」

岡崎「はっ？」

秋沢「一機も失うな、迷ったら、」

F-26戦闘機、ドラゴン隊 一番機「Dragon 1」 小河原 剛志 三等海佐

岡崎「迷ったら、撃て、艦長のお言葉だ」

小河原「迷ったら、撃ちます」

そして、Dragon 1は、あかぎから発艦した」

村越「迷まないためのお守りだ」

そう言つて、村越一等海尉は、お守りを風防に飾つた。

航空要員「Dragon 2、発艦用意」

村越「了解」

ブルーマーメイド艦「みくら」

志度「航空母艦「あかぎ」から戦闘機の発艦を確認」

平賀「6機、飛んでいったわね」

福内「そうね、（あと数十分で日付けが変わる）」

あかぎのCICでは、対空レーダーでドラゴン隊と敵戦闘機隊がもうすぐ接敵するまで近づいているのを秋沢は、確認した。

日本近海上空

小河原「6対12、迷ったら撃てか、もう迷ってる・・・」

そして、敵編隊12機中6機がドラゴン隊に向けてAAMを発射。

警戒機「ファルコンファイヤーからドラゴン隊へ、敵戦闘機隊、前方の6機がミサイルを発射した。計12発、距離55マイル」

小河原「Dragon1から全機、武器使用許可、WeaponsFree、各機目標と交戦しろ、行くぞ」

そして、ドラゴン隊は、散開した。ミサイルの大半がDragon1に向かった。

小河原「くっ、フレアだ」

小河原は、直ぐにフレアとチャフを撒いた。敵ミサイルは、フレアに惑わされ、爆発した。

あかぎ乗員「ドラゴン隊、被弾報告、ありません」

秋沢「CICよりDragon1、ミサイル射程距離を保ち、二対一の状況を回避せよ」

小河原「了解、Dragon1から全機へ、12機全てを相手にするな上昇中の敵編隊を α 、前方部隊を β とし、 α の左翼後方へ回り込む、 β には構うな、目標 α の6機、各自、獲物を決めて、攻撃しろ、距離220、今度は、こっちの番だ、反撃するぞ、発射」

Dragon 1から中AAMが発射された。

村越「……」

村越(Dragon 2)は、敵戦闘機に狙いを定め、中AAMを発射し、ミサイルは、敵機に命中した。小河原(Dragon 1)も急旋回をしながら、敵を捕捉し、ミサイルを発射、命中した。

小河原「よし、3機撃墜、10時方向からミサイル」

小河原は、素早くチャフとフレアを散布させ、回避する事に成功した。

小河原「敵ミサイル、全弾躲した、これでチャフもフレアも撃ち尽くしたな」

航空母艦「あかぎ」 CIC

あかぎレーダー員「α5機目、撃墜を確認」

あかぎ乗員「ドラゴン隊、一機も被弾報告、ありません」

あかぎ船務「これ程、撃たれたのに被弾しないとは」

灘沢「残存している敵機は、7機です」

秋沢「通常、帰還するパイロットは、追撃に備えて、必ずミサイル一発を残す、つまり、彼らが残しているミサイルは、残り7発、空中戦には、大量の燃料を消費する距離を考えるとあと数分が限界だ」

あかぎ船務「では、ドラゴン隊の完勝ですか」

秋沢「その時間を耐えればの話だ」

続く

第二十六話 異世界での空中戦 後編

村越「補足された」

そして、残存した敵戦闘機隊からミサイルが発射された。

警戒機「ファルコンファイヤーからドラゴン隊へ、敵機ミサイル発射、7機同時に発射した。直ちに回避行動！」

村越「Dragon 2より1へミサイル7発、全て本機へ！」

小河原「7発全て、Dragon 2 Break Right!、海に逃げろ！」

村越「了解」

村越は、回避するため、二つの操縦桿を操作し、急降下を開始した。

小河原「村越、耐えろ」

急降下に伴う、激しいG（重力）に村越は、戦っていた。しかし、脳に血が上り過ぎたか、目を閉じてしまい、墜落の警報音が操縦席内に鳴り響く。

小河原「まずい、村越！ベイルアウトだ！」

ベイルアウトⅡ戦闘機が攻撃又は事故で操縦が困難な時に緊急脱出する事である

小河原「速度を落として、脱出するんだ！」

村越「た、隊長、こいつ（機体）は、一機だけで数百億・・・」

小河原「馬鹿野郎！機体は、替えが効くが村越、お前の代わりは、利かないんだ、すぐに機体から脱出するんだ！」

そうしているうちに敵のミサイルが追い付いてきている。

小河原「村越！」

村越「〔無線〕（村越——！）」

村越は、キャノピーに付けたお守りをみた

村越「くつ、俺の代えは・・・利かない！」

そして、村越は、緊急脱出用のレバーを引き、機体から脱出した。その直後、ミサイルがF-26戦闘機に到達した。

あかぎ乗員「敵機、離れていきます」

秋沢「村越一尉の生存確認と同時に敵機パイロットの生存確認も怠るな」

あかぎ乗員「了解」

航空母艦「あかぎ」から哨戒ヘリ「SH60」が発艦し、救助に向かった。

首相官邸

小佐川「操縦士は？」

政府関係者「全力を挙げて、捜索に当たっていますがまだ発見できていません、救難

信号を受信し、救命胴衣を確認したそうです」

航空母艦「あかぎ」

小河原「あの速度での脱出は、かなりの危険があります」

岡崎「生存を信じるしかない」

そこへ秋沢が入ってきた

小河原「艦長、一機も失うという件ですが・・・」

秋沢「敵空母には、およそ70機、我々は、同等の70機だ。どんなに落としても一機落とされたら痛み分けた。戦闘は、更に厳しさを増す、覚悟を持って任務に当たってくれ」

岡崎・小河原「はっ」

小河原「5機落としても浮かれるなという事でしょうか？」

岡崎「いや、貴官に礼を言いたかったのだろう」

小河原「え？」

岡崎「村越一尉を緊急脱出させた事だ、あの方が言う“一機も失うなというのは一人も失いたくない”という事だ」

現場海域

哨戒ヘリパイロット「村越一尉発見、生存確認、村越一尉発見、生存確認」

あかぎC I Cの内が歓喜に包まれた

続く

第二十七話 叶わぬ生存

あかぎでは、長時間の戦闘で乗組員が疲労が表れ始めていた。磯口は、ひとまず空腹を満たし、任務継続する事を決め、艦内放送で交代で各自で食事を取る事を流した。

首相官邸

政府関係者「総理！朗報です、脱出した村越一尉を救助したヘリが帰還途中に敵戦闘機の操縦士を発見し、救助したとの事です」

外務大臣「捕虜という事か・・・」

小佐川「二つの人命が助かったんだ」

この情報は、ブルーマーメイド本部にも伝えられた。

航空母艦「あかぎ」 CIC

磯口「艦長、各自、交代で食事を取っており、士気は旺盛です」

秋沢「そうか」

あかぎ乗員「パイロットの意識は、戻ったか？」

ヘリ乗員「まだ戻っていません」

あかぎ乗員「了解した、帰還後、医務室の方へ運ぶ」

磯口「我々がパイロットを救助した事がうまく伝わればいいが」

灘沢「うまく？」

磯口「相互理解に向けての事だ」

あかぎ甲板

村越「あ、歩けるよ」

あかぎ乗員「駄目です、安静にしてください」

村越「はあ」

村越の隣には、救助された敵戦闘機パイロットもいた。村越は、笑みを浮かべた。

しかし、敵戦闘機のパイロットは、あかぎ乗員が携帯していた拳銃を見ていた、そして、敵パイロットが起き上がった

村越「おい！」

敵パイロットは、あかぎ乗員から拳銃を奪った。

あかぎ乗員「おい！」

あかぎ乗員「取り押さえろ！」

敵パイロットと村越・あかぎ乗員といがみ合いとなり、敵パイロットと村越が倒れた瞬間、あかぎ艦内に銃声が鳴り響く。

あかぎの待合室にいた平賀も異変に気が付きが福内が敏感に反応した。福内は、立ち上

がつて、待合室から出ていた。

平賀「あ、福内！、出たらあぶないわよ！」

平賀達が甲板に駆け付けけるとそこにあつたのは、多数のあかぎ乗員と倒れた村越と拳銃を持った敵戦闘機のパイロットがいた。

あかぎ乗員「うわー!!!」

一人のあかぎ乗員が感情的になり、敵パイロットから拳銃を奪った。

あかぎ乗員「村越、くっ！この野郎！」

そして、奪った銃を敵パイロットに向ける」

敵パイロット「！」

敵パイロットは、怯えて身動きが取れなくなった。

あかぎ乗員「よくも・・・」

敵パイロットは、あかぎ乗員に拳銃を向けられてパニック状態となった。拳銃を向けたあかぎ乗員は、手が震えていた。その時であつた。

「撃つな！」

そこへ艦長の秋沢がやって来て拳銃に手をかけ、下ろした。

あかぎ乗員「艦長、こいつは、村越一尉を！」

秋沢「もう彼は、武器を所持していない」

あかぎ乗員「助かったんだ！生きていたんだ！、なのにな！、う、うく、ううううう」
あかぎ乗員は、その場で崩れ落ちた。秋沢は、敵パイロットに近づき、英語でこう言った。

秋沢「The sea would have been cold」
「Today is Christmas Eve」
「I don't know if it is in your country」
「in Japan」
「Celebrating regardless of the God who believes」
「Abou t one day today」
「I want to be calm」
」

そして、敵パイロットは、やってならない過ちと気づき、泣いた。

秋沢は、乗員に拳銃を渡した。

秋沢「彼を拘置室へ、何か温かい物を出してやってくれ」

あかぎ乗員「はい、行くぞ」

磯口は、村越に近づき、目を手で翳しながら閉じさせ、口に付いた血をハンカチで葺いた。

磯口「村越一尉を」

あかぎ乗員「はい……」

秋沢は、何も言わずに艦内に戻っていた。

磯口「各自、持ち場に戻れ」

あかぎ乗員「はい」

磯口は、村越が倒れていた場を何も言わず見下げた。

続く

第二十八話 決戦 前編

外務省

外務省関係者「外務大臣は、」

外務省関係者「中国大使と電話会談中です。4時間で六カ国の外相と会談したのにまだまだやる気です」

外務省関係者「国を思う気持ちは、人一番強いからな」

外務省関係者「局長、渡辺大使にたつた今、国際会議の議長から電話が」

外務省関係者「来たか」

2015年12月24日 JST 04:30

首相官邸では、小佐川が花瓶に飾られた花を見ていた。

航空母艦「あかぎ」

艦内に警報音が鳴り響く。

警戒機「ファルコンファイヤーからあかぎへ、敵空母から戦闘機発艦」

秋沢「対空警戒を厳となせ、先発隊は、5機、本隊を合わせれば30機だ。今度は、対艦ミサイルも来るぞ」

磯口「艦内閉鎖を確認し、敵機の攻撃に備えます」

敵空母から発艦した先発の五機があかぎに接近中。

あかぎ船務「ドラゴン隊の機体は、整備中です。上げれるのは、イーグル隊とデルタ隊の計十二機です」

秋沢「イーグル隊・デルタ隊、出撃準備」

あかぎ艦橋

磯口「第三区画、第四区画、閉鎖」

秋沢「イーグル隊・デルタ隊、準備出来次第、発艦せよ」

イーグル隊「了解」

小河原「私を行かせてください、敵機の癖も分かります」

岡崎「いいだろう、だが、敵討ちは、考えるな。指揮の目が曇る」

あかぎ乗員「魚雷です。二時の方向、距離17マイル、10本来ます！」

秋沢「いしがきの離脱が痛かったな。CICから艦橋、副長、対潜戦闘の指揮を頼む」

磯口「了解、面舵一杯、デコイ、一番・二番・三番・四番、発射用意」

あかぎ乗員「デコイ発射用意」

磯口「あかぎからたかお、魚雷を頼む」

南川「了解、アスロック発射用意」

たかお砲雷長「アスロック攻撃始め」

たかお乗員「発射用意よし」

たかお砲雷長「撃て！」

たかおの前甲板にあるVLSから対潜ミサイル「アスロック」が発射された

首相官邸

政府関係者「総理、国際会議から電話です」

小佐川「小佐川です」

その頃、あかぎからF-26戦闘機が発艦した。操縦しているのは、ドラゴン隊のリーダー「小河原」であった。甲板では、次の戦闘機が発艦準備に入ろうとしていた。

海中では、たかおが発射したアスロックが敵魚雷に命中した。

あかぎ「魚雷、八本撃破」

海中から敵対艦ミサイルが姿を現す。

あかぎ乗員「二発は、ミサイルです！」

磯口「CIWSだ！」

あかぎに搭載されているCIWSが火を噴き、全弾迎撃し、その衝撃波と残骸があかぎの甲板に降り注ぐ

あかぎ乗員「敵ミサイル、全て撃破」

あかぎ「敵戦闘機からさらにミサイル発射」

あかぎ乗員「10発です！」

はつかぜ乗員「10発、向かって来ます！」

西山「中SAMよ！」

はつかぜ砲雷長「中SAM、10番から20番、発射用意」

西山「撃て！」

はつかぜ砲雷長「撃てえー！」

はつかぜのVLSから中SAM、10発が発射された。

あかぎ乗員「敵ミサイル、10発撃破」

南川「先発は、五機の挨拶だ、この後、本隊と合流し畳みかけてくるぞ、砲雷長、しっかり見張れ！」

砲雷長「了解、対空警戒を厳となせ、繰り返し、対空警戒を厳となせ」

先発隊の上空には、本隊の25機が飛来中

磯口「敵機、30機の来襲か、各艦、最大船速、ジクザク航行を執れ！」

あかぎ乗員「最大船速！ジクザク航行！」

岡崎「こちら岡崎、先程のミサイルの衝撃波で二番機以降、発艦が困難です」

秋沢「一機だけか、小河原三佐、聞こえるか」

小河原「はい！」

秋沢「30機相手に1機では、戦えない、超低空飛行で敵空母に向かえるか？」

小河原「了解」

ミサイル駆逐艦「たかお」

たかお乗員「敵編隊との距離、80マイルを切りました」

南川「攻撃目標を敵編隊第1から第30機、60マイル圏内に来たら、撃つぞ」

たかお乗員「中SAM、31番から54番、発射用意」

秋沢「小河原、現在の高度は、」

小河原「海面ギリ、50フィートです」

秋沢「いいか、敵空母の甲板を攻撃し、使用不能させろ」

小河原「了解」

秋沢「小河原」

小河原「はい」

秋沢「くれぐれも機首上げをするな」

小河原「了解」

そして、小河原が乗るF-26戦闘機は、敵空母を目指していた。

続く

第二十九話 決戦 後編

たかお砲雷長「敵編隊、5.5マイルに突入して来ます。対艦ミサイルの射程内です」
南川「対空戦闘、一機も撃ち漏らすな、目標、敵攻撃機、攻撃開始」

たかお砲雷長「撃て！」

たかおのVLSから数十発の対空ミサイルが発射された。敵編隊の数機が撃墜したが多くがフレア等を使用し、攻撃を逃れた敵編隊があかぎに向けて数十発の対艦ミサイルを発射した。

西山「本艦の目標、たかおが撃ち漏らした敵機及びミサイル、まとめて撃ち落せ！」

はつかぜ砲雷長「了解、対空戦闘、中SAM攻撃始め」

はつかぜ乗員「データ入力完了」

西山「撃て！」

はつかぜ砲雷長「撃てえ！」

ミサイル駆逐艦「はつかぜ」のVLSから数十発の中SAMが発射された。それと同時に他の日ノ出駆逐艦も中SAMを発射し、迎撃していった。

その頃、小河原は、超低空飛行で敵空母を目指していた。

航空母艦「あかぎ」

ソナー員「艦長！潜水艦です、さらに7艦、方位190、距離14マイル、敵艦隊と我が艦隊の中間にいます」

あかぎ船務「ずっと潜んでいたのか」

今度は、所属不明の潜水艦が7隻、出現した。

磯口「あかぎより全艦へ、対潜戦闘用意」

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「福内さん！潜水艦です、更に7隻もいます！」

平賀「7隻も!?いつの間に・・・」

福内「ソナーに捕捉されないように更に深い海中に潜んでいたのね」

空母「あかぎ」

ソナー員「潜水艦隊、魚雷発射、14本来ます！」

磯口「マスクー開始！デコイ発射用意！」

「みくら」

寒川「潜水艦隊、魚雷を撃ちました！14本です！」

平賀「14!?!」

福内「そんなに撃ち込まれた、防ぎきれない！」

空母「あかぎ」

ソナー員「魚雷の進路が分かれました。7本が我々に向かって来ます」

14本の内7本があかぎ・みくらに向っていた。

ソナー員「残り、7本は、敵艦隊です！敵空母に接近中です！」

秋沢「何だと？」

「みくら」

寒川「残り7本が敵艦隊に向かっていきます！」

平賀「え!？」

福内「一体、どうゆう事なの・・・」

空母「あかぎ」

秋沢「小河原、聞こえるか！」

小河原「はい！」

秋沢「攻撃は中止！」

小河原「え？」

秋沢「すぐに戦線から離脱だ！」

小河原「了解！」

小河原は、直ちに右旋回を行い、敵艦隊から離脱していた

空母「あかぎ」

ソナー員「魚雷、来ます！」

潜水艦隊が放った魚雷は、あかぎ・みくらの寸前で爆発した。

磯口「自爆した？」

「みくら」

寒川「魚雷、自爆しました！」

志度「福内監察官、これは一体……」

福内「私にも分からないわ」

敵艦隊にも魚雷が向かっていたがあかぎと同様に寸前で爆発した。

ソナー員「敵艦隊周辺にも爆発音が」

あかぎ乗員「命中したのか？」

ソナー員「いや、寸前で自爆したようです。潜水艦7隻が浮上して来ます」

磯口「何が起きているんだ……」

そして、潜水艦7隻が海上に浮上し、各艦事に国旗を揚げた。

※7隻の国旗（アメリカ・イギリス・フランス・オーストラリア・インド・ロシア・中

国）

あかぎ乗員「識別信号を受信、これは、ホワイトドルフィンです。全艦、ホワイトド

ルフィンのコードです！」

そして、潜水艦7隻が国旗とホワイトドルフィンの旗を揚げた。

秋沢「……」

磯口「これ以上の戦線の拡大は、国際社会は、許さないという事か……」

あかぎ乗員「敵編隊、散開していきます！」

首相官邸

小佐川は、スクリーン上に日ノ出・ブルーマーメイド艦隊の中間に各国のホワイトドルフィンが現れたのを見て、安堵のため息をついた。

小佐川「間に合ったか、」

航空母艦「あかぎ」

あかぎ乗員「敵艦隊、針路を反転させ、日本近海から離脱していきます」

磯口「終わりましたね、艦長」

秋沢「ああ、日本に迫っていた危機は、回避された」

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「敵艦隊、針路を変え、離脱していきます」

平賀「終わったのね」

福内「そうね」

東京 ブルーマーメイド統合管制艦

ブルマー隊員「宗谷監督官、報告です」

真霜「どうしたの」

ブルマー隊員「敵艦隊が針路を変え、日本の海域から離脱したとの事です」

真霜「そう、報告、ありがとう」

ブルマー隊員「はい、失礼します」

ブルマー隊員が部屋から出た後、真霜は、力が抜けたようにソファアに座った。

真霜「終わったのね」

僅か一日であったが彼女にとっては、一週間に感じた。

そして、治安出動の命令が解除され、日ノ出・ブルーマーメイド艦隊は、横須賀基地に帰投していった。

続く

2016年の海洋実習の前日譚

第三十話 新鋭艦、横須賀配備

2016年1月23日、国籍不明の武装艦隊との戦いから一カ月が経過し、日本近海で多発していた海難事故が減少し、海は、平穏を取り戻しつつあった。

その頃、日ノ出国内にある海軍基地に一隻の最新鋭ミサイル駆逐艦がいた。この艦は、これから日本国・横須賀基地に配備されるため、出航準備をしていた。

その艦の名は、最新鋭ミサイル駆逐艦 DDG-300「はるみ」

搭載武装と外見は、駆逐艦「たかお」と変わらないが一番の見受けられるのは、乗組員全員が女性のみで構成されている事。

本計画の策定時は、男女共に乗艦する予定であったが女性幹部軍人及び新米女性海軍軍人の育成のため、計画が変更され、女性でも扱いやすいようになっていた。

はるみ艦長「そろそろ、時間ね、副長、出航準備を伝えよ」

はるみ副長「了解、総員、出航用意」

駆逐艦「はるみ」の上空には、日ノ出国の報道ヘリが飛行していた

アナウンサー「日本での訓練及び配備向け、新鋭艦「はるみ」がまもなく出発します」

はるみ砲雷長「三番離せ」

駆逐艦「はるみ」が岸壁から離れ、微速で公海に向けて動き出した。

はるみ艦長「両舷前進、微速」

はるみ航海士「両舷前進、微速」

はるみ乗員「基地司令官に敬礼します」

はるみ乗員「艦隊司令に敬礼、左、気をつけ」

ラッパが鳴り響く

はるみ乗員「かかれ！」

はるみ艦長「左、帽振れ」

はるみ乗員「左、帽振れ！」

はるみの乗組員は、被っていた海軍帽を取り、帽振れをした。

はるみ艦長「両舷前進、半速」

ゆっくり航行していた「はるみ」は、速力を上げて、日ノ出国の海軍基地から出航した。

ミサイル駆逐艦「はるみ」のスペック

全長169 m，全幅22 m

基準排水量：8，300トン，満載排水量，11，500トン

速力：30ノット以上
兵装

64口径127mm単装速射砲：1基，VLS（48＋64セル）

20mm機関砲（CIWS）：2基，三連装魚雷発射管：3基

艦対艦ミサイル発射筒：2基，12.7mm重機関銃，2基

対潜哨戒ヘリコプター（SH-60），1機

計画開始日：2018年9月30日

建造開始日：2019年6月15日

進水日：2020年8月18日

就役：2016（2021年）年1月6日

ミサイル駆逐艦「はるみ」の配備後

・個艦演習

・ブルーマーメイドとの共同演習

・日本周辺海域の哨戒等

配備期間は、2020年4月30日まで予定しているが司令部からの通達によって、配備期間が短縮又は延長される事を予測している。

しかし、まだ、駆逐艦「はるみ」は、数か月後に起きる“事件”をまだ知らない

続
く

第三十一話 航海訓練

出港から5日目 小笠原諸島沖

最新鋭ミサイル駆逐艦「はるみ」は、順調に日本を目指していた。

駆逐艦「はるみ」

艦長：京原 和泉

京原「教練、対空戦闘用意」

はるみ乗員「教練、対空戦闘用意」

はるみ航海士「取舵」

はるみ航海士「第二戦速、取舵」

はるみCIC

はるみ乗員「敵機、レーダー照射、補足されました」

砲雷長：畑宮 梢

畑宮「落ち着いて、対処するのよ」

はるみ乗員「了解、ESSM発射用意、イルミネーターLink、目標、接近中のミ

サイル、発射まで4秒前、3・2・1、目標、敵ミサイル、撃て！」

はるみ左舷ウイング

はるみ乗員「第一目標、命中、第二目標、接近中」

航海長：西神 小和

西神「頼みますよ、砲雷長」

副長：榎本 花音

榎本「C I W S、攻撃用意、E A攻撃始め」

畑宮「ミサイル近接戦」

はるみ乗員「C I W S、自動迎撃モード、撃ち方始め」

駆逐艦「はるみ」の前部にあるC I W Sが左舷を向いた。

はるみ乗員「ミサイル、左90°で突っ込んで来る！、本艦の左舷に着弾！」

はるみ乗員「柴代一曹、敵ミサイルの破片により負傷」

柴代「ええー……」

艦内放送「左舷にミサイル命中により浸水！」

はるみ乗員「急げ！ダメコンの手際こそ艦の命運を預かる仕事よ、ぐずぐずしていると

海中の中よ！」

京原「今日も天候に異常なしね」

榎本「訓練終了しました、艦長」

京原「了解」

榎本「今だ5分も遅れてますが・・・」

京原「まあ、まだいい方よ、10日前の10分と比べたら、乗員達の練度も上がりつつあるわ」

榎本「は！」

京原「張り切りすぎると先が考えられなくなる、緊張するのも程々に」

榎本「了解しました」

京原「ところで航海長、今の速力だとあとどのぐらいで横須賀に到着かしら？」

西神「は！今の速力だとあと2日で横須賀に到着するかと」

京原「そう、ありがとう」

駆逐艦「はるみ」 格納庫

はるみ整備員「よし、以上は、特になし」

女性パイロット「お疲れ様、機体の状態は、どうでしたか？」

はるみ整備員「あ、村越一尉、はい、機体のあらゆる箇所を点検しましたが特に異常は、ありませんでした」

村越「そう、ありがとう、無理しないようにね」

はるみ整備員「了解」

SH-60 対潜哨戒ヘリコプター、パイロット、村越 咲良 一等海尉

駆逐艦「はるみ」士官室

榎本「艦長、何故、私達が日本に派遣される事になったのでしょうか」

京原「何でもブルーマーメイドとの関係強化のためみたい」

榎本「ブルーマーメイドって、女性だけで構成された治安組織ですか？」

京原「ええ、私達の艦と同じで女性だけよ」

榎本「横須賀に到着した後、ブルーマーメイドとの模擬戦闘を行うんですよね」

京原「そうよ、相手は、私達が新米だと考えて、手加減をしながら、戦闘をするはず

よ」

榎本「でも我々は、」

京原「本気で行くわよ」

続く

第三十二話 横須賀、着任

2016年1月30日 日本国・横須賀基地

福内「ふう、もうすぐ2月になるわね」

平賀「そうね、武装艦隊との戦いから1ヶ月も経つのね」

福内「時間の流れて、早いわね」

福内と平賀がその様な話をしていると、向こうから一隻の艦が入港してきた。

平賀「うん？向こうから艦が来たわ」

福内「日ノ出艦のたかおかしら？」

平賀「いえ、たかおは、あそこにいるけど、もしかしたら、新しくやってきたのかも」

福内「ちよつと行ってみましょう」

平賀「そうね」

そう言つて、平賀達は、入港してきた艦に向かった。基地の岸壁には、秋沢と磯口がいた。

秋沢「うん？平賀監察官に福内監察官、どうしたんだ？」

平賀「いえ、屋上で海を見ていたら、沖合からたかおに似た艦が来たので、見に来た

のですが」

磯口「ああ、＼はるみ＼の事か」

福内「はるみ？」

磯口「あの艦の名前だ」

平賀「聞いた事がない艦ですね」

磯口「知らないのも仕方ない、あの艦は、最近、我が国で就役した新鋭艦だからな」

福内「へえ、外見は、駆逐艦「たかお」と変わりませんね」

秋沢「外見は、な、乗組員は、違う」

そして、ミサイル駆逐艦「はるみ」は、横須賀港の着岸した。そして、二人の女性海軍軍人が艦から降りてくる。

京原「本日から横須賀基地に配属される事となった京原一等海佐です」

榎本「同じく横須賀基地に配属される事となった榎本二等海佐です」

秋沢「長き航海、お疲れ、空母あかぎ艦長の秋沢一等海佐だ」

磯口「同じく空母あかぎ副長の磯口二等海佐だ」

京原「あの、そちらの方は？」

平賀「あ、私は、ブルーマーメイドの平賀監察官です」

福内「同じブルーマーメイドの福内監察官です」

京原「ブルーマーメイドの方ですね、着任の手続きが終わりましたら、自己紹介のため、基地に訪れますね」

平賀「はい」

そして、京原達は、秋沢達に連れられて、日ノ出基地内に入り、着任の手続きを行った後、ブルーマーメイドの基地に向かった。

京原「ブルーマーメイドは、LCSを配備しているけど、有事の際、対処できるのかしら・・・」

榎本「秋沢一佐から聞きましたがこのLCSには、VLSが搭載されている事から我々の知るLCSとは、異なるのかもしれませんが」

京原「そうかしら・・・あ、平賀さん達が乗艦している「みくら」が見えてきたわ」

平賀「京原一佐に榎本二佐、お待ちしております」

京原「お待たせして、申し訳ない、着任の手続きが長引いてね」

平賀「いえ、みくらの乗組員は、決められた仕事をしていたので大丈夫です。それは、艦内にご案内します」

京原「はい」

京原と榎本は、平賀に連れて、みくらの艦内に入っていた。

第三十三話 みくら乗員との紹介

京原達は、平賀に連れられて、艦橋の方に向かった。

福内「平賀、帰って来たのね」

平賀「ええ、あと、お客が来ているの」

寒川「来客ですか？」

志度「誰ですか？」

平賀「入っていいですよ」

平賀からの入室許可があり、京原と榎本が入ってきた。

寒川「平賀さん、この方々は？」

平賀「紹介するわね、こちらは、今日から横須賀に着任された日ノ出海軍新鋭艦、艦長の京原一佐と副長の榎本二佐よ」

京原「本日付で横須賀に着任する事となった京原一等海佐です」

榎本「同じ榎本二等海佐です。よろしくお願いします」

寒川「初めまして、私は、寒川二等保安監督正です」

志度「同じ志度二等保安監督正です」

京原「よろしく」

自己紹介の後、京原と榎本は、平賀達と雑談等を話し合っている内に昼時を迎える。

京原「もう、お昼になったね、そろそろ、艦の方に戻らないと」

平賀「あの、お願いってのは、何ですが」

京原「うん？ どうしました？」

平賀「みくらの食堂で昼食を摂られてはとうですか？」

榎本「どうしますか、艦長」

京原「お言葉に甘えましょう。無線ではるみに連絡して、（みくらで会食をとってから戻る）という事を伝えて」

榎本「了解しました」

榎本は、懐から無線機を出し、駆逐艦「はるみ」の乗員に会食をとってから戻るとい
う事を伝えた。

榎本「報告しました」

京原「平賀さん、大丈夫ですよ」

平賀「では、食堂に案内しますね」

平賀達に連れられて、京原達は、みくらの食堂に向かった。

みくら艦内 食堂

福内「京原艦長」

京原「うん？どうしたの、福内監察官」

福内「京原艦長、何故、海軍に入隊したんですか？」

榎本「あ、それ私も聞きたいです」

京原「海軍に入った理由か、それは、15年も前の事」

15年前

学生時代の京原「父さん、明日からまた長い航海に出るの？」

京原の父「ああ、今まではアジア圏が中心だったが、今度は、ヨーロッパへの航海になつたからな」

学生時代の京原「そうなんだ、体に気を付けてね」

京原の父「ああ、ありがとう、ヨーロッパの土産も沢山、買ってくるからな」

学生時代の京原「ふふ、もう、父さんたら」

京原の父「じゃあ、行ってきます」

学生時代の京原「行ってらっしゃい！」

1ヶ月後

京原が通学する学校

京原の担任「京原君、君のお母さんから電話だよ」

京原「母からですか？」

職員室

京原「母さん、どうしたの？」

京原の母「和泉！すぐに帰ってきて！」

京原「ど、どうしたの、そんなに慌てて！」

京原の母「お父さんが、お父さんが！」

京原「お父さんの身に何かあったの!？」

京原の母「とにかく帰ってきて！」

京原「うん！分かった！」

京原は、担任に早退する事を告げ、急いで自宅に戻った。

京原「母さん！お父さんに何かあったの？」

京原の母「和泉！うつく、うううう（涙）」

京原「母さん？」

京原の母「いい、落ち着いて聞いて、お父さんの船が海賊に襲われて、殺されたの」

京原「え、冗談でしょ・・・」

京原の母「冗談じゃないわ、テレビでも流れているわ」

そう言つて、京原の母は、テレビを点けた。

アナウンサー「繰り返してお伝えます。日ノ出時間の午前8時頃、日ノ出船籍の貨物船が海賊の襲撃に遭い、乗っていた乗組員全員、死亡しました」

京原「あ、あ・・・」

京原は、シヨツクのあまり、気を失い、その場に倒れる。

京原の母「和泉！和泉！しっかりして！、和泉！」

続く

第三十四話 辛き記憶を越えて

京原 「それ以来、海を見る事が嫌いになったんです」

榎本 「……………」

平賀 「……………」

福内 「……………」

志度 「……………」

寒川 「……………」

京原 「あ、すみません、暗い話になってしまつて……………」

福内 「いえ、でも、今は何故、海を愛する様になつたんですか？」

京原 「父を失つてから高校最後の修学旅行の時に私が乗っていた船が事故を起こしたんです」

平賀 「事故ですか、どのような事故ですか？」

京原 「船に積んでいた荷物が荷崩れを起こして、船尾から沈み始めたんです。そして、私が救命ボートに乗ろうとした時に船が激しく揺れて、そのまま、海に投げ出されてしまったんです」

平賀達「!!」

京原「船から投げ出され、海中に入つて、もう私、死ぬんだと思い、目を閉じました。その時、何処からか声が聞こえてきたんです」

寒川「声？」

京原「その声は、何処か懐かしくて、心の温まる声でした、気が付けば、私は、何処かの船の医務室に横になっていました、医務室にいた乗員にここは、何処かと聞いたら、
“ここは、航空母艦「あかぎ」だよと答えてくれました”

平賀「あかぎ、今、横須賀にいる空母の事ね」

京原「はい、後から知つたんですが、私が事故があつた年に就役したばかりの新鋭空母で艦隊演習を終えて、基地に戻る途中だったそうです」

平賀「当時、最新鋭空母だったのね」

京原「それで、何故か海が再び、見たくなつて、デツキの方に行つたら、ある人と出会い、会話等をして時間を過ごしました」

福内「ある人つて？」

京原「現在もあかぎの艦長をしている人です」

福内「え、それつてもしかして、秋沢艦長の事？」

京原「はい、そうです」

平賀達「え!？」

京原「秋沢艦長は、船乗りになる前は、海軍戦闘機隊のリーダー機でありながら、最強エースパイロットだったんです」

平賀達は、知らなかったのも仕方のない、まさか、秋沢一佐が艦長になる前は、戦闘機乗りだったという事に驚きを隠せずにいた。

京原「私は、秋沢氏に海は、怖くないのですか、と聞いたんです、そしたら、秋沢艦長が答えてくれたんです。実は、言うと私が艦長になつたばかりは、海を恐れていたがそれを打ち砕かねば、国の平和が守れない私な、京原さん、我々日ノ出軍に所属している者は、どんな過酷な状況下に起これようとも祖国を守るといふ強気、意志がなければ、守れないと教えてもらいました、それから私は、父が愛した海を守りたいという意思を持ち、海軍への道を歩む事にしたんです」

続く

第三十五話 元軍人の来日

2016年2月15日

一隻の日ノ出船籍旅客船がまもなく日本に到着する。

アナウンス「まもなく本船は、日本国・横須賀港に入港致します。お忘れ物・落とし物がないよう、ご注意ください。本日もご利用くださいませ、ありがとうございます」

旅客船の船内の乗客の中に50代の眼鏡をかけた男性が居た。大き目の荷物は、キャリーケースのみである。そして、船を下船した後、入国手続きを終えて、日本の土地に足を踏み入れた。

50代男性「ふむ、ここが日本か、しかし、本当に陸地の殆どが海底に沈んでしまっているとは、さて、折角、観光しに来たんだから、羽目を外すか」

そう言つて、男性は、船着場を後にし、横須賀市街に向かった。

50代男性「しかし、賑やかなだな。私の故郷とほぼ変わらないな」

男性は、活気に満ちている横須賀市街を見て、自分の故郷と同じであるという事を考えていた。

50代男性「もう昼か、コンビニに寄ってから三笠公園の方にも行ってみるか」
男性は、コンビニでおにぎりとお茶を購入し、三笠公園で昼を過ごす事にした。

50代男性「しかし、この国の海は、我が国の海よりも輝いているな」
その時、男性が所持している携帯電話が鳴る。

50代男性「もしもし、ああ、今日、横須賀に着いて三笠公園で昼を済ませている所だ。あと数分したらそっちに向かう、え、迎えにくる、いやいや、私は、確かに50代だがまだ若い世代に負けんよ、そうか、じゃあ、お言葉に甘えて、迎えて来てもらえるかな、分かった」

そう言つて、男性は、携帯電話を切る。

50代男性「まったく、幹部候補生時代から変わらぬな、」

数十分後

京原「お待たせしました、教官」

50代男性「教官は、と言うのはやめてくれ、今はもうとつくに海軍が退いて、今は普通の民間人だよ」

京原「そんな事言わないでくださいよ、桑田教官」

桑田 利夫（くわた としお）元日ノ出海軍、海軍幕僚長兼教官 2020年11月

除隊

桑田「しかし、変わらないな、京原君」

京原「え、そうですか？あれから変わったと思うのですが」

桑田「まあ、この話は、基地内で雑談する時に話そうか」

京原「あ、はい、では、横須賀基地に向かいます」

そして、桑田を乗せたハイヤーは、駐留日ノ出海軍横須賀基地に向けて、市街地を出発した。

桑田「幹部候補生学校を卒業してから、どうだ」

京原「はい、今は、新鋭艦「はるみ」の艦長として任務に就いています」

桑田「艦長という事は、責任も大きくなったという事か」

京原「はい、はるみに乗務している全乗組員の命を預かっているので艦長としての責任が大きくなりました」

桑田「そうか、だが、無理しない程度に指揮するんだぞ」

京原「はい」

続く

第三十六話 桑田の訪問

京原「桑田教官、まもなく基地に到着します」

桑田「おお、そうか」

日ノ出軍横須賀基地

日ノ出軍MP「身分証明書をお願いします」

京原「これでいいかしら？」

日ノ出軍MP「京原一佐、後部座席に居る方は？」

京原「来客よ、あと磯口二佐を呼んでほしいのだけど」

日ノ出軍MP「了解しました、どうぞ、お進みください」

そして、京原が運転するハイヤーが基地内に入っていた。

京原「私、車を止めてから来ますので、基地の案内は、磯口二佐がしてくれます」

桑田「そうか、久々に部下の顔を見れるのか」

そして、基地入り口でハイヤーが止まり、そこには、磯口が待っていた。

桑田「久しぶりだね、磯口君」

磯口「お久しぶりです。」 桑田艦長「」

桑田「はは、もう海軍から退いたんだから艦長と呼ばなくてもいいよ」

磯口「そうでしたね」

補足として、磯口が航空母艦「あかぎ」の副長をする前は、ミサイル駆逐艦「さわかぜ」の副長として、乗艦したため、桑田とも親密な関係を持っている。

磯口は、桑田を迎え、あかぎ艦長兼横須賀艦隊司令の元に向かった。その頃、京原は、乗ってきたハイヤーを基地内の駐車場に止めて、指揮官室へ向かうとしていた時、

平賀「京原さん！」

京原「うん？あれ、平賀さん」

ブルマー隊員の平賀に声をかけられた。

平賀「先、あなたの運転していたハイヤーを見かけたんですが、何処かに行っていたんですか？」

京原「うーん、出かけたというよりも古い友人を迎えに行った感じかな」

平賀「にしてもハイヤーで行くのは、変だと思うのですが」

京原「（感が鋭い人だな・・・）」

平賀「誰が乗っていたんですか？」

京原は、隠し通せないと考え、本当の事を話す事にした。

京原「えっと、古い友人と言うよりも私が海軍の幹部候補生時代からの人なんだ」

平賀「その人つてのは、誰ですか？」

京原「元日ノ出海軍 桑田利夫という方で昔、私が候補生時代に教官を務めていた人です」

平賀「へえ、京原さんの教官か」

京原「でその方は、教官になる前は、海軍幕僚長に就いていたの」

平賀「海軍は、分かるんですが幕僚長というのは、どのぐらいの階級なんですか？」

京原「うーん、そうだな、幕僚長のクラスは、ブルーマーメイドでは、安全監督室級かな」

平賀「そ、それで、凄い人じゃないですか！」

京原「桑田さんは、今は、もう海軍を引退していて、自宅でゆっくりと暮らしてみたい」

平賀「へえーそうなんですか」

桑田「おや、面白い事を話しているな、京原君」

京原「桑田さん！」

京原は、桑田がいる事に気がつかず、話してしまっていたので顔を赤くしていた。桑田は、平賀とも話をし、昨年の冬の武装艦隊との戦い等を話し、その場合は、大いに盛り上がったそう。

続
く

第三十七話 訓練

2016年2月16日

この日、ミサイル駆逐艦「はるみ」は、ブルーマーメイド艦「みくら」と共に訓練の為、横須賀港を出港し、太平洋上で水上戦闘の訓練を行う事となっていた。

京原「まもなく指定された海域に到達するわね」

榎本「今回の訓練は、所属不明艦からの攻撃を受けた時を想定した場合ですよね」

京原「ええ、攻撃を受けた想定よ」

はるみ乗員「艦長、みくらから通信が来てます」

京原「繋いで」

はるみ乗員「はい」

京原「艦長の京原です」

福内「福内です。今回の水上訓練の内容は、聞いておりますが詳細には、どのような物なのでしょう？」

京原「はい、最初の水上訓練は、所属不明の駆逐艦からの誘導弾による攻撃、そして、高速艇からの攻撃を迎撃する訓練です。」

福内「了解しました」

訓練内容を確認し、福内は、通信を切った。

数十分後

はるみCIC

はるみ乗員「水上レーダー感あり、本艦の70度、敵水上艦艇を確認、この目標、当部隊への攻撃を企図している模様」

はるみから離れた洋上には、退役した海軍艦艇（無人に改造済み）が敵役を務めていた。そして、無人艦から対艦ミサイル（模擬弾）が発射される。

はるみ乗員「対空目標探知、70度、敵水上艦艇からのミサイルを確認、ミサイルは、二機、重要船舶（みくら）に近接中」

畑宮「重要船舶に向かうミサイルを迎撃する、対空戦闘、CIC指示の目標、攻撃始め！」

はるみ乗員「ESSM、発射始め」

はるみ乗員「発射用意、撃て！」

はるみのVLSが開放され、ESSMが発射され、正確な迎撃コースをとり、模擬弾頭に命中した。

ブルーマーメイド艦「みくら」

平賀「いつも思うのだけど、日ノ出艦の攻撃力と機動力等が高いのは、凄いわね」

福内「そうね、私達ブルーマーメイドやホワイトドルフィンが有する艦艇以上の高性能艦ね」

はるみ乗員「ミサイル全て撃墜、新たに近接する対空目標なし」

畑宮「重要船舶を攻撃した敵水上艦艇に反撃する、対水上戦闘、CIC指示の目標、0

0SSM攻撃始め」

はるみ乗員「発射用意！」

はるみから00式艦対艦誘導弾(00SSM)が発射され、無人艦に命中した。

はるみ乗員「哨戒機より敵水上艦艇、撃沈の報告あり」

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「福内監察官、水上レーダーに反応あり、方位290度、高速艇です！数、3です」

福内「対水上戦闘、用意、目標、敵高速艇、攻撃始め」

志度「了解、目標、敵高速艇、撃ち方始め！」

みくらの主砲であるポフォース57mm砲が火を噴いた。そして、遠隔操作されている敵役の高速艇を次々と撃破していった。

京原「よし、現時刻を以って、対水上訓練を終了する」

京原の訓練終了の宣言により、艦内に安堵感が溢れだした。

続く

第三十八話 新鋭艦「はるみ」への招待

対水上訓練を終えた二隻は、横須賀に帰還し、今回の訓練の報告書を作成した。

京原「ふう、報告書の作成は、終わった。あとは、艦隊司令に報告するだけね」

その時、艦長室のドアにノックがした。

京原「どうぞ」

榎本「失礼します」

京原「副長、どうしたの？乗組員内で何か問題でも起こったの？」

榎本「いえ、以前、平賀監察官と福内監察官が乗艦している「みくら」に乗せてもらいましたが今度は、我々の方からこの艦に招待してみてもどうですか？」

京原「うーん、招待か、今、報告書を作成し終えたから、報告のついでに聞いてみるわね」

榎本「了解しました」

その後、京原は、今回の訓練結果を秋沢に報告し終えた後、はるみに平賀達を乗艦する許可を求めた。秋沢は、はるみにブルマー隊員を乗艦させる事を許可した。京原は、すぐに榎本二佐に許可が下りた事を伝えた。

2016年2月18日

平賀・福内・志度・寒川は、日ノ出海軍横須賀基地を訪れ、はるみを目の前にした。

志度「これが日ノ出海軍の新鋭艦「はるみ」

寒川「近くで見ると大きい城ですね」

京原「お待ちしてました。ようこそはるみへ」

京原は、平賀達をミサイル駆逐艦「はるみ」の艦内へと案内していた。まず、彼女達を連れてきたのは、艦橋である。

福内「艦橋にしては、高い位置ですね」

京原「この艦の艦橋の高さは、ビル6階に相当しますからね」

寒川「あの左右に椅子があるのですが、黄色と赤は、何の意味があるのですか？」

京原「はい、赤の椅子は、艦長が座る席で黄色は、艦隊司令が座る席です」

寒川「つて事は、時には、艦隊司令官の秋沢一佐も座るのですか？」

京原「はい、座る事もあります」

寒川「へえー」

その後、平賀達を連れていたのは、この艦の中枢と言うべき場所であった。

福内「京原一佐、ここは」

京原「ここは、この艦の中枢機能であるCIC、戦闘指揮所です」

志度「ここがはるみの指揮所」

平賀達がC I Cに入ろうとした時、

京原「あ、ちょっと待ってください」

平賀「どうしましたか？」

京原は、胸ポケットに入れていたカードを扉の横に合ったスキヤナーに通した。

寒川「あの、京原一佐、何をしたのですか？」

京原「実は、C I Cに入るには、私が持っている。この国から発行された許可証がないとどんなに同じ艦の乗組員でも入れないんです」

平賀「指揮所に入るには、許可証が必要なんですネ、私達の艦は、普通に出入りが出来ません」

京原「私達の艦を含む日ノ出艦艇には、技術者しか手を触れる事が出来ないブラックボックスがありますからね」

平賀「それだけ入室に厳しいという事ですか」

そして、京原と平賀達は、C I Cに入っていた。

平賀「指揮所が暗いのは、普通ですがこんな大きなスクリーンは、初めて見ました」
福内「それに日本列島だけでなく朝鮮半島や大陸も表示されている」

京原「私達の世界では、海上だけでなく上空や陸上からの攻撃もありますからね」

志度「多様な攻撃にも対処もしなければならぬという事ですか」

そんな時、CICに無線が入る

京原「はい、京原です、分かりました、すぐに伝えます」

平賀「あの何かあったんですか？」

京原「今から2時間前に小笠原諸島の南西海域で外国船籍の貨物船が武装した海賊に占拠された模様です」

福内「な!？」

平賀「何ですって!それで今、向かわせる事できるのは?」

京原「情報によるとブルーマーメイドの保安即応艦隊が急行していますが万が一に備えて、我々にも緊急出航命令が出ています」

その様な会話をしている時、平賀のスマートフォンに通知が入る、そこには、出動命令と表示された

平賀「京原一佐、我々も出動命令が出ました、直ちにみくらに戻ります」

京原「分かりました」

そして、横須賀港から日ノ出海軍駆逐艦「はるみ」と「たかはぎ」、ブルーマーメイドから

「みくら」・「みやげ」・「はちじょう」が出航し、占拠された外国船籍の貨物船を目指す。

続く

第三十九話 海賊との戦い 前編

出航から数時間後、小笠原諸島・南西海域

はるみ乗員「水上レーダーに艦影を捕捉、S I Fに反応あり、占拠された貨物船とブルーマーメイド艦「べんてん」です」

榎本「ついに捕捉したわね、あとは、貨物船に接舷して、部隊を送り込む事が可能であれば」

京原「だけど、何か嫌な予感がする」

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「福内監察官、べんてんから通信です」

福内「繋げて、」

???「遅いぞ！もし来るのが遅かったら、あたしだけでやるだけなのに」

福内「何を言っているんですか、もしあなただけでやらせると何が起こるか・・・」

???「何だよ、全く信用が出来ねえのか」

福内「貴女が昔、私や平賀監察官にやった事、忘れてませんか」

平賀「昔の話をしている時じゃないでしょ、今は、任務に集中して」

福内「すみません、それで作戦は、どの様にいきますか」

???「あたしが指揮するべんてんが貨物船に接近し、内火艇で鎮圧部隊を送り込み、海賊を制圧しつつ、人質を救助する感じだ」

福内「了解しました、宗谷艦長」

ブルーマーメイド保安即応艦隊「べんてん」艦長：宗谷真冬

はるみ乗員「艦長、べんてんが貨物船に接近していきます」

榎本「あとは、接舷してべんてんの部隊が鎮圧するだけですな、艦長？」

京原「何か変な胸騒ぎする、これで本当に解決なの？」

はるみ乗員「艦長、水上レーダーに新たに2隻の艦影を捉えました」

榎本「2隻の艦影？所属は、分かる？」

はるみ乗員「SIFに反応なし、不明艦2隻がべんてんに接近中」

榎本「一体、何をするつもりかしら」

京原「まさか！通信長！すぐにべんてんに回避行動を執る様に伝えて！」

はるみ乗員「え？あ、了解！」

榎本「艦長!?!どうしたんですか？」

京原「不明艦2隻の狙いが分かったの！」

ブルーマーメイド艦「べんてん」

べんてん乗員「宗谷艦長、通信です」

真冬「通信？、福内からか？」

べんてん乗員「いえ、日ノ出艦「はるみ」からです」

真冬「はるみから？分かった。通信を繋げろ」

べんてん乗員「了解」

真冬「こちら「べんてん」だ、はるみ艦長、何かあったか？」

京原「宗谷艦長！直ちに回避行動を！不明艦2隻がそちらに接近中！」

真冬「何を言っているんだ？こっちは、貨物船乗員を救助しなければ・・・」

その会話をしている時、べんてんの右舷側に何かが着弾し、水柱が立った。

真冬「うお!?何だ！」

べんてん乗員「砲撃です！」

真冬「砲撃だと！砲撃した位置は、分かるか？」

べんてん乗員「結果が出ました、我が艦の右舷90度から所属不明艦2隻が接近中

す！」

真冬「くつ、仕方がない、すぐに貨物船から離れるんだ！」

べんてん乗員「了解！」

べんてんは、直ちに回避行動を開始したが所属不明艦は、それでもなお撃て来る。

ブルーマーメイド艦「みくら」

志度「福内監察官、べんてんが所属不明艦2隻から砲撃を受けています！」

福内「何？、相手の所属は、分かる？」

志度「識別信号に応答がありません！」

平賀「まさか、今年の武装艦隊？」

みくらの艦内に緊張が走る、今年の戦闘で日本の海域からいなくなった筈の武装艦隊が再び民間船舶を襲撃している事。

寒川「でも、今年の武装艦隊とのやり方が全然違います、本来であれば、沈めてしまいう筈です」

福内「確かに貨物船を占拠し、人質を取るのには、以前の武装艦隊が執る行動じゃない」
その時、はるみから無線が入る

寒川「福内監察官、はるみから通信です」

福内「繋げて、福内です」

京原「福内監察官、今、べんてんを攻撃している艦は、今年の武装艦隊じゃない」

福内「では、今、攻撃している艦。」

京原「最近、退役した艦艇が何者かに強奪したという事をニュースで流れていました」

福内「じゃあ、その不明艦2隻は」

京原「海賊よって強奪された艦艇に間違いは、ないでしょう」
福内「では、どうすれば」

京原「ブルーマーメイド艦艇に危険は、大きいですが私に考えがあります」

続く

第四十話 海賊との戦い 中編

福内「京原一佐、考えというのは」

京原「まずは、福内監察官が乗艦している「みくら」を旗艦としている艦隊が敵強奪艦隊に威嚇射撃を行い、「べんてん」から引き離します、そこへ我々の艦隊が艦砲射撃で敵の兵装と機関を破壊し、戦闘及び航行不能にさせます。」

福内「なるほど、私達が先行して、威嚇射撃を行い、相手が気を取られている所を日ノ出艦隊が攻撃を行うという事ですか」

京原「はい、その通りです」

福内「分かりました、その作戦で行きましょう」

京原「しかし、無理はしないでください、貴艦隊も回避行動を専念しつつ、威嚇射撃をお願いします」

福内「了解しました」

そして、「みくら」を含む三隻のブルーマーメイド艦隊が先行するように「はるみ」を含む日ノ出艦隊は、後方に就いた。

福内「全艦、主砲、砲撃始め」

志度「撃ち方始め！」

福内の命令と同時に「みくら」・「はちじょう」・「みやけ」が強奪艦隊に砲撃を開始し、初弾は、強奪艦の右舷側の海面に着弾した。

強奪艦「スラヤール」

海賊1「何だ！何処からだ！」

海賊2「右舷側に別の艦を確認！ブルーマーメイドの増援だ！」

海賊3「兄貴、どうしやす？」

海賊1「目標を変更だ、先、砲撃したブルーマーメイド艦隊を攻撃、その事を後方にいる「ブリトウン」にも伝えろ」

海賊3「了解」

海賊が強奪した二隻は、攻撃目標を「べんてん」から「みくら」・「はちじょう」・「みやけ」に変更し、砲撃を再開した。

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「福内監察官、海賊がこちらに撃て来ました！」

福内「全艦へ、回避行動を専念しつつ、砲撃せよ」

みくらを含む艦隊は、敵からの攻撃を回避しつつ、威嚇射撃を続けた

海賊3「兄貴、奴ら撃ち返して来ましたぜ」

海賊1 「砲撃し続ける、今は、回避に専念しているがいずれは当たる」
ミサイル駆逐艦「はるみ」

榎本 「艦長の考えは、的中しましたね。海賊は、こちらに気付いていません」

京原 「よし、砲雷長、目標（強奪艦）の砲撃している主砲を破壊可能？」

畑宮 「自動射撃では、こちらの存在が気付かれてしまいます、手動に射撃なら気付かれずに破壊できるかと」

京原 「よし、敵主砲を手動照準で破壊よ」

畑宮 「了解、主砲操作をマニュアルで行います。捉えました！」

京原 「射撃を許可します！攻撃開始！」

畑宮 「撃ち方始め！」

はるみの127mm速射砲が初めて、敵（強奪）艦艇に対して火を噴いた。はるみが放った砲弾は、後方にいた敵艦「ブリトウン」の主砲に命中した。

強奪艦「スラヤール」

海賊1 「何だ!？」

海賊4 「後方にいた「ブリトウン」の主砲に敵弾が着弾した」

海賊1 「何!?!今は、どうなっているんだ！」

海賊4 「まだ、航行しているが・・・」

その会話の瞬間、ブリトウンの主砲の後方にあつた8連装発射機と対艦ミサイル発射筒、そして、機関部に再度、はるみが放つた砲弾が着弾した。

海賊1「今度は、どうした!？」

海賊4「再び、ブリトウンに砲弾が着弾、8連装発射機と対艦ミサイル発射筒、そして、船体後方にも着弾」

海賊1「お、おい、それ、まさか」

海賊5「こちら、ブリトウン、敵の砲撃で兵装及び機関部に命中弾、俺たちの艦は、戦鬪も航行も不能になつた」

海賊1「くそが!。こうなつたら、ラムアタックだ!」

強奪艦「スラヤール」は、針路を「みくら」にとり、接近してくる。

寒川「福内監察官、強奪艦が接近してきます!」

平賀「体当たりでもする気なの!？」

福内「全艦、取舵一杯!、全速力で退避!」

強奪艦「スラヤール」

海賊1「逃がさねえ、やられた仲間分の攻撃を味わえ!」

その時、

海賊1「ぬあ!」

海賊2 「うわあ！」

海賊3 「ぐわ！」

海賊4 「うぐ！」

強奪艦 「スラヤール」に強い衝撃が走った

海賊1 「おい！何が起きた！」

海賊3 「機関部及び艦尾に砲弾が着弾、航行が出来なくなっただ！」

海賊1 「ならば、主砲で！」

主砲で攻撃しようと命令を下そうとした瞬間、スラヤールの主砲が爆発した

海賊1 「な！主砲が！」

海賊2 「敵の砲撃で主砲使用不能！」

海賊1 「糞が！何処から撃てやがる！」

海賊3 「兄貴、水上レーダーに2隻が接近してくる」

海賊1 「ブルーマーメイドか？」

海賊3 「いや、それが・・・違うんだ」

海賊1 「何だと・・・」

海賊2 「兄貴、無線が流れている、艦内に流すぜ」

京原 「こちら、日ノ出海軍、駆逐艦「はるみ」である、直ちに武装を解除し、投降せ

よ、従わない場合は、更なる武力を以って、撃沈も視野に入れる」

海賊4 「げ、撃沈!？」

海賊2 「従わない場合、海の藻屑になれっというのかよ」

海賊1 「おい、落ち着け、これは、ただの脅しだ」

海賊3 「ここで死ぬなんて、御免だ！」

その言葉にスラヤールに乗る海賊たちは、死ぬ事に恐怖し、海に飛び降りた

海賊1 「おい！逃げるんじゃない！」

ブルーマーメイド艦「みくら」

寒川「福内監察官、海賊たちが海に飛び降りてますが」

福内「多分、京原艦長が言った事が結構、効いたのかもしれないわね」

平賀「とりあえず、強奪艦の海賊達を拘束するため、内火艇を向かわせるわね」

福内「了解、さて、問題は、どうやって、貨物船の乗員を救助するか」

寒川「福内監察官、べんてんから通信です」

福内「繋げて」

真冬「福内、助かったぜ、」

福内「私達だけじゃないわ、この作戦は、はるみ艦長の案で行ったのだから」

真冬「はるみ艦長がか、任務に戻るがあたしは、再度、貨物船の救助に向かう、」

福内「分かったわ、こちらも後から追うから先に向かつてください」

真冬「おう！」

そう言つて、無線が切つた

福内「ふう」

寒川「うん、福内監察官、はるみから連絡です」

福内「はるみから連絡、読んで」

寒川「はい、我が艦隊は、これより貨物船の救助に向かう。貴艦隊は、強奪艦の乗員の救助及び拘束に専念されたしとの事です」

福内「はるみに伝えて、了解しましたと」

駆逐艦「はるみ」

はるみ乗員「艦長、みくらが返答あり、「了解しました」との事です」

京原「よし、我が艦は、これより貨物船の救助に向かう、引き続き、戦闘態勢を維持」
はるみ乗員一同「了解！」

京原「副長、貨物船の救助に当たり、突入部隊の指揮を執つて」

榎本「え、でも、私は、この艦の補佐を」

京原「副長、船乗りになつて以来、“本来の自分を抑えていた”でしょう」

榎本「え……」

京原「あれから相当、溜まっているでしょう、だから、昔の貴女を久々に呼び覚ましてみれば」

榎本「……(?!?)ニヤリ、分かりました、私も最近、体を動かしていないので、いい運動になります」

京原「ふふ、行って来なさい、そして、存分に暴れて来なさい！」

榎本「了解！」

そして、榎本は、C I Cから出ていた。

はるみ乗員「いいんですか、艦長」

京原「いいのよ、副長は、任務を表でする前は、“裏”で遂行していたんだから」

続く

第四十一話 海賊との戦い 後編

駆逐艦「はるみ」の艦内にある部屋では、十八名の乗員が突入するための準備をしていた。

艦内で来ていた作業服から突入用の服に着替え、半長靴に履き替えた。そして、相手が銃火器を装備している可能性も踏まえ、防弾チョッキとヘルメット・ゴーグルを装着、武器は、9mm口径の自動拳銃と5.56mm口径の自動小銃とスタングレネードを装備した。使用している銃火器の弾丸は、特殊なゴム弾を使う事となった。

そして、榎本を含む突入部隊は、格納庫で待機していたSH-60に搭乗し、貨物船の救助に向かった。

はるみ乗員「艦長、突入部隊の第一陣が出発しました。第二陣は、数十分後に出発します」

京原「そう」

はるみ乗員「また、たかはぎからも増援部隊を発艦させたとの事です」

京原「了解、（あとは、頼みましたよ榎本副長）」

はるみ搭載のSH-60

榎本「いいか、我々の目的は、貨物船の乗員救助と海賊の制圧だ、到着後、激しい戦闘になる事が予測される各員、気を引き締める！」

突入部隊全員「了解！」

たかはぎ搭載のSH-60

たかはぎ乗員「もしも、貨物船の甲板又は艦橋のウイングに敵がいた場合は、狙撃しなければならぬとは」

たかはぎ乗員「安心しろ、使用する弾丸は、特殊なゴム弾を装弾している、可能な限り、相手を殺傷せずに済む」

たかはぎ乗員「だといいのだが」

ブルーマーメイド艦「べんてん」

べんてん乗員「宗谷艦長、後方から高速で接近する機影を探知しました」

真冬「まさか、高速ボートか？」

べんてん乗員「いえ、それにしては早すぎます」

べんてん乗員「我が艦の真横を通過します」

聞いたことのない轟音が鳴り響きながらべんてんの真横を通過していくSH-60

真冬「何だ、先の飛んで行った物は・・・」

べんてん乗員「先、あの飛行物体の後ろに“日ノ出海軍”という文字がありました」

べんてん乗員「おそらく日ノ出側も突入部隊を送ったのでしよう」

真冬「負けてられないな」

真冬は、貨物船に向つていた日ノ出の突入部隊を見て、いい勝負になると感じた。

ヘリパイロット「まもなく貨物船に着きます！」

榎本「よし、全員、降下準備！」

貨物船

海賊「な、何だありや!？」

海賊「まさか、ブルーマーメイドの新装備か！」

海賊「とにかく撃ち墜とせ！」

海賊達は、携帯していたアサルトライフルで榎本が乗る第一陣のヘリに向かって発砲

突入隊員「海賊が撃て来ました！」

ヘリパイロット「危険なので銃弾が届かない高度まで上昇します！」

ヘリのパイロットは、これ以上の接近は、危険だと判断し、回避行動を始めた

榎本「突入支援ヘリ、聞こえるか？甲板上からの攻撃で降下する事が出来ない、敵勢

力の排除してくれ」

たかはぎ乗員「了解、おい、仕事だ」

たかはぎ搭載の哨戒ヘリの扉が開き、隊員は、狙撃銃持ちいつでも発砲出来るの体制

を執った。

たかほぎ乗員「狙撃準備完了」

榎本「発砲を許可する、やれ！」

榎本の合図と共に狙撃銃の引き金に指をかけ、撃った

海賊「ぐわ！」

一人撃つと、

海賊「のわ！」

また、一人撃つ、数十分で甲板上にいた海賊を排除した。

たかほぎ乗員「甲板上にいた脅威を排除しました」

榎本「了解、よし、皆、降下準備を始めろ」

はるみ搭載のヘリが甲板上の上空でホバリングし、ロープを下ろし、そのロープに隊

員が両手で掴んだ。

榎本「準備はいいな！」

はるみ乗員「はい！」

榎本「よし、降下開始！」

合図と同時に降下した突入部隊第一陣は、甲板上で身動きが取れなくなった海賊の腕に手錠をかけて拘束した。中には、抵抗をする者もいたが銃口を向けられると大人し

くなった。そして、後を続けてきた第二陣が到着し、二陣に拘束した海賊を見張るよう
に榎本が命じ、一陣は、船内に突入した。

はるみ突入隊員「うん？」

はるみ突入隊員「どうしたの？」

はるみ突入隊員「今いる場所から左に曲がると海賊6人、徘徊している」

はるみ突入隊員「スタングレネードを使用して、一気に制圧するか」

榎本「その必要はない」

はるみ突入隊員「え、榎本さん、何をする気ですか？」

榎本は、床に小銃（アサルトライフル）を置き、両手に格闘技で使うグローブを装着
していた。その瞬間、海賊がいる方に飛び出した。

はるみ突入隊員「あ！榎本さん！」

海賊達が走って近づいてくる榎本を見て、

海賊「何だテメエは！」

海賊「構わねえ！撃ち殺せ！」

海賊は、持っていた自動小銃で榎本に発砲したが中々当たらない。

海賊「何だ！こいつ！」

海賊「当たたらねえ！」

その瞬間、榎本がジャンプし、回し蹴りを喰らわせる。

海賊「ぐえ！」

海賊の一人目は、そのまま壁に顔を打ち、気絶した。

海賊「この野郎！」

二人目は、パンチをしたが躲され、逆に榎本の強烈なパンチが腹に命中。

海賊「ぐ、オエー」

あまりのパンチの強さに嘔吐してしまい、その場で行動が不能となった。

海賊「舐めるな！このアマ！」

三人目は、逆上し、殴り掛かるが榎本が前蹴りをし、男性の弱点に命中、

海賊「ぐおおおおお」

その瞬間に回し蹴りが頭に当たった後、勢いに余って顔面が壁に直撃し、その場で気

絶

海賊「いい気になってんじやねえぞ！」

四人目は、サバイバルナイフを取り出して、襲い掛かるが肘打ちされた挙句、背負い投げされ、体を強く打ち身動きが取れなくなった。

海賊「こ、この野郎!!」

五人目は、そのまま殴り掛かるが榎本に顔面を殴れ、ノックアウト。

海賊「ひい！た、頼む！命だけ取らないでくれ！」

六人目は、榎本のあまりの強さにびびってしまい、降伏すると言ったが

榎本「少し寝てろ」と拳の一発を頭に食らわせた。

海賊「うっ」

六人目は、その場で気絶した。

はるみ突入隊員「う、嘘でしょ・・・」

はるみ突入隊員「六人をたった一人で制圧してしまう何って・・・」

榎本「何、立ち止まっているんだよ、早くしないと海賊が抵抗しだすぞ」

はるみ突入隊員「あ、はい」

突入隊員は、すぐに海賊六人の腕に手錠をかけた。

榎本「ところでこの部隊からの連絡は、来ているか？」

突入隊員「いえ、今のところは、」

無線「bチームからaチームへ、応答願います。」

突入隊員「aチーム、どうしたの」

無線「搜索中に抵抗勢力（海賊）と交戦し、これを鎮圧、同時に扉の見張りをしていた船室内に当該船舶の乗員を発見しました」

突入隊員「了解、周囲を警戒しつつ、避難誘導に従事せよ」

無線「了解」

突入隊員「榎本さん、bチームから連絡で抵抗勢力を鎮圧と同時に人質となっていた貨物船乗組員を発見し、保護したようです、現在、避難誘導を従事しています」

榎本「よし、私たちは、このまま海賊の制圧を続けるぞ」

bチーム

はるみ突入隊員「もうすぐ、船外に出ます！」

貨物船員「でも、どうやって我々を脱出させるんですか？」

はるみ突入隊員「すぐに分かります！」

貨物船の船外に出るところには、日ノ出軍のSH—60三機がエンジンを止めずに待機していた。

貨物船員「あの、これは・・・」

はるみ突入隊員「時間がありません！急いで乗ってください！」

船員達は、急いでへりに乗った。

へり乗員「これで全員ですか？」

貨物船員「はい！全員です！」

へり乗員「了解しました！少し揺れますので気をつけてください！」

へりは、出力を全開にし、飛び立った。

貨物船員「う、嘘だろ！」

貨物船員「これ、空を飛んでいるぞ！」

今まで空を飛ぶ乗り物は、飛行船か気球ぐらいだけだと思っていた船員達にとって、驚愕なものであった。

海賊「おい！、まだ連絡が来ねえのか！」

海賊「何度に呼び掛けているが、応答がねえんだよ！」

海賊「こうなったら、俺たちが直接、行くしかないな」

部屋の外、

突入隊員「榎本さん、海賊の残党とリーダーと思わしき人物がいます。」

榎本「よし、一気に畳みかけるぞ、スタングレネード用意」

突入隊員「了解」

突入隊員の一人がスタングレネードを取り出し、安全ピンを抜き、部屋内に放り投げた。

海賊「何だ、これ？」

その瞬間

パーン！

海賊「ぐわあああ」

海賊「目が！目が！」

海賊「耳がいてえええ!!」

海賊達が怯んだ所を見過ごさず、榎本達が突入し、海賊に向け、発砲。

海賊「おい、大丈夫か?、!?!」

スタングレネードの効果が切れるとリーダー以外が手錠を掛けられていた。それ同時に貨物船の救助部隊と思われる人々に銃火器を向けられ、包囲されていた。すると榎本が海賊のリーダー格に近づき、

海賊「何だ、テエめらは、ぐあ！」

榎本は、海賊の口に銃口を咥えさせ、こう言った

榎本「既にてめえの仲間は、拘束しておいた、あとはお前だけだ、抵抗するならお前の脳髓を撃ち抜くぞ」

海賊「わ、分かった、こ、降伏する・・・」

リーダー格は、あまりの殺気に怯え、降伏した。

ブルーマーメイド艦「べんてん」

べんてん乗員「宗谷艦長、はるみの突入部隊からの連絡です」

真冬「読んでくれ」

べんてん乗員「貨物船を占拠していた海賊を全員、拘束、貨物船の乗組員は我が艦と

僚艦「たかはぎ」に退避させたとの事です」

真冬「はあ、結局、べんてんの出番は、なかったか・・・」

べんてん乗員「そう言う事ですな」

真冬は、自分達の艦が活躍できなかつた事を不満気を感じた。

その後、福内の艦隊と合流し、海賊の引き渡しを行い、任務は完了した。

続く

第四十二話 基地への外出

2016年3月5日

海賊との戦いから2週間以上が経過した。今日から駆逐艦「はるみ」の定期点検の為、乗組員全員、久々の丘に喜びで溢れていた。京原と榎本も久々に基地外出で、横須賀の街で観光を踏まえ買い物を楽しんでいた。

京原「横須賀市街に出かけるのは、桑田さんの送迎以来だったわね」

榎本「私は、横須賀中心部に来るのは、初めてなのですが」

京原「とりあえず、よこすかカレーで食べにいきませんか？」

榎本「カレーですか、別に構いませんが・・・」

京原「決まりね」

京原は、榎本を連れて、よこすかカレーの本店に行き、それぞれの艦艇のカレーを食したという。食べ終えた後、二人は、公園に寄り、少し休む事にした。

京原「今日は、楽しい一日だったわね」

榎本「そうですね、日ノ出での外出は、何度かありましたが国外は、初めてです」

京原「たまには、異なる地を歩く事も良い事よ」

榎本「はあ、ちよつと喉乾いたので自販機でドリンクを買ってきましたね」

京原「うん、気を付けてね」

そう言つて、榎本は、ドリンクを買いに行つた。だが、その隙を狙つていた輩がいた。

輩1「なあ、ねえちゃんよ、俺らと遊ばんか？」

京原「何ですか、あなたは、私には、連れの友人がいるので」

そう言つて、その場から離れようとするが輩が腕を掴んできた

輩2「おいおい、俺らと楽しい事しようぜ」

京原「嫌！離してください！」

京原は、抵抗したが

輩1「おい、これが見えねえのか？」

京原「!!」

輩が刃物を見せられ、京原は、身動きが取れなくなつてしまった。

榎本「おい、テメエら、私の友人に何してやがる・・・」

そこへ京原の悲鳴を聞いて、榎本が戻つてきた。

輩2「ああ？何だ、おめえがこの女の連れか？」

榎本「すぐに京原から離れる、屑野郎共」

輩1「この野郎、調子に乗りやがって！」

輩の一人が京原に向けていた刃物を榎本に向かつて、襲い掛かったが

榎本「甘い……」

簡単に躲され、肘打ちをかけられた

輩1「ぎやああ、腕が……」

輩の一人目が怯んだを見計らって、榎本は、思い切り背負い投げをした。

輩2「てめえ、いい気になるなよ！」

もう一人も殴り掛かるが榎本の強烈な拳が腹に命中した。

輩2「うう、オエ——」

榎本「何だテメエら、挑んでおきながら、この程度か、すぐにここから立ち去れ、こ

のまま居続けるなら、分かっているよな？」

輩1「ひいひい、すんませんでした!!」

輩2「おい、置いていくなよ——!!!」

京原を絡んでいた輩は、榎本の殺気にビビり、その場から逃げて行った。

榎本「全く、ナイフを常時しているなんて、油断出来ない街ね」

京原「副長、助かりました。」

榎本「ん？あ、いえ、勝手に体が動いただけですから」

京原「もう、ん、！、副長！左腕から血が、」

榎本「え？あ、本当だ・・・」

「どうやらナイフの攻撃を避ける際に、少し掠ったようだ。」

榎本「このぐらいの傷、任務以外、軽い方です」

京原「駄目です！傷口が悪化したら、どうするんですか、それにそのままの姿で街を歩いて、騒ぎになったらどうするんですか！」

榎本「わ、分かりました」

京原は、自分の鞆から応急道具と書かれた袋から消毒液と包帯と絆創膏等を取り出し、手当をした。

京原「一時的だけど、処置は、終わり」

榎本「あ、ありがとうございます」

榎本は、頬を赤くした。

京原「いいのよ、さて、そろそろ基地に戻りましょう」

榎本「は、はい」

続く

第四十三話 意外なところからの依頼

2016年3月20日

二週間に及ぶ長期間の休暇を終えたはるみの乗員達は、新たな任務に備えていた時、秋沢から出頭命令が出された。

京原「出頭命令と言っていたけど、何かしら・・・」

榎本「まさか、二週間前の騒動の処分でしょうか・・・(汗)」

二週間前の休暇初日に京原が輩に絡まれている所を榎本が助けに入ったが輩とはいえ、他国民を殴りつけたのは、問題だという考えから自分は、他の艦に異動されるのではないかと焦っていたが

京原「いえ、どうやら、その騒動の処分じゃないみたい」

榎本「では、何でしょうかね・・・」

京原達は、司令官室に着くとノックをした。

秋沢「入れ」

京原「失礼します」

秋沢「休暇明けにすまん」

京原「いえ、ところで我々に出頭命令の内容は、何ですか？」

秋沢「実はな、“横須賀女子海洋学校”から依頼が来たんだ」

京原「横須賀女子海洋学校？」

秋沢「我々と協力関係であるブルーマーメイド隊員を養成する為の教育機関らしい」

京原「何故、海軍に依頼が来たんですか？」

秋沢「何でも今年の海洋実習では、教官艦がいるんだが万が一に備えてそれを補助する艦が必要となった」

京原「もしかして、我々が呼ばれた理由は」

秋沢「ああ、私は、この依頼を受諾して、貴官が乗艦している艦を派遣しようと考えている」

榎本「しかし、我々以外にも派遣が可能な艦艇がいるのでは・・・」

秋沢「最初は、そう考えたのだが、男性よりも同じ女性であれば、距離を縮める事が可能だ」

京原「分かりました。その件を受諾します」

秋沢「分かった、私は、すぐに電話で横須賀女子海洋学校に連絡し、今回の件が受諾されたと伝えておくよ」

京原「はい、了解しました」

そして、京原達は、司令官室を退室した。

基地の岸壁で停泊していた内火艇の乗り、横須賀女子海洋学校に向かった。

京原「まさか、学校自体がフロート艦とは、驚きね」

榎本「ええ、そうですね、あ、まもなく着きますよ」

そして、京原達を乗せた内火艇は、横須賀女子海洋学校の岸壁に停泊した。

京原「ここが横須賀女子海洋学校ね」

榎本「この上に校舎があるみたいですね」

京原「あら？誰かがこつちに来るわね」

一人の女性が京原達に近づいて来る、おそらくこの学校の関係者と思われる

???「京原一佐に榎本二佐ですね」

京原「はい、そうです」

榎本「あの、貴女は？」

???「申し遅れました、私、この学校の指導教官の古庄 薫と言います」

京原「京原一佐です、よろしくお願ひします」

榎本「榎本二佐です、よろしくお願ひします」

古庄「校長がお待ちしております。ついて来てください」

古庄の誘導で京原達は、校舎内に入っていた。

続く

本編

第四十四話 横須賀女子海洋学校

古庄の案内で校内を歩く京原と榎本は、校舎内を見て何処か懐かしさ感じていた。

古庄「どうかされましたか？」

京原「いえ、この学校の校舎が自分達がいた学校と同じで何処か懐かしさを感じていました」

古庄「そうですか」

京原「それにしても校舎内が静かなのですが」

古庄「3日前に終業式を終えて、今は、校長と私を含む職員しかいません」

会話しながら歩いていると校長室と書かれた札が見えてきた。古庄は、京原達に入口前で待機していてほしいと言い、ドアをノックした。

校長「どうぞ」

古庄「失礼します、〃宗谷校長〃、京原一佐と榎本二佐をお連れしてまいりました。

京原「あれ？宗谷って、何処かで聞いた苗字……」失礼します。日ノ出海軍はるみ艦長の京原です」

榎本「同じくはるみ副長の榎本です」

校長「お待ちしておりました。どうぞ、お掛けください」

古庄「校長、私は、これで失礼します」

校長「ええ、ありがとう」

そう言つて、古庄は、校長室から退室した。

京原「あの、すみません」

校長「はい、」

京原「“宗谷真冬”さんつて、ご存知でしょうか」

校長「ええ、私の娘達です。申し遅れました。私は、横須賀女子海洋学校長“宗谷真

雪”です」

京原「娘さんだったんですね、ところで我々海軍にどのような用件でしょうか」

真雪「今年度の海洋実習は、西之島新島の海域で行うのですが昨年の件もあり、教官艦一隻では、対応が困難である事からあなた方に生徒の指導をしていただきたいのですが」

榎本「昨年、確か、“日本近海不明艦隊事件”の事ですね、艦長、どうしますか」

京原「分かりました。私は、貴校の依頼を引き受けようと思えます」

真雪「京原艦長、ありがとうございます。我が校の入学式は、来月の初めから行われ

ます」

京原「分かりました。」

その後、3月20日のやり取りを終えた京原達は、学校の岸壁に停泊していた内火艇に乗り、横須賀海軍基地に戻って行った。翌日には、駆逐艦「はるみ」を横須賀海軍基地から横須賀女子海洋学校の岸壁に停泊させた、

3月25日は、一時的に日ノ出海軍の艦籍登録から外れ、ブルーマーメイドの艦籍に入り、艦番号も「300」から「Y300」に変更された。

艦長室

京原「一時的でもしばらくの間は、海軍とのお別れか、でも、引き受けた以上、守らないと」

京原は、来ていた海軍の制服を脱ぎ、ブルーマーメイドの隊員が着る制服に着替えた。

京原「待たせたわね」

榎本「いいえ、大丈夫です、京原一佐」

京原「ふふ、私達（はるみ乗員）は、今日からブルーマーメイドの所属になったのよ、階級に気をつけなさい」

榎本「あ、失礼致しました。」京原一等監察官」

京原「これからもよろしくね、」榎本二等監察官」

続く

第四十五話 入学式

2016年4月1日 横須賀女子海洋学校

京原「綺麗な桜ね」

榎本「春の本番の季節に入りましたからね」

京原「ええ、うふふ」

榎本「?、どうかしましたか?」

京原「いえ、私達が幹部候補生学校の入学式を思い出したの」

榎本「そういえば、丁度、穏やかな風の吹く日でしたね」

京原達がかつて幹部候補生時代の話をしているとスキッパーを停める栈橋からバナナを食べながら登校してきた学生が茶ドラの猫に気を取られているうちに栈橋の段差に躓いて、歩いてきた同じ学生にぶつかってしまう。

??? 「うゝ、あ、ごめんさない!大丈夫?」

??? 「大丈夫だ、全く気をつけろ、ふん」

榎本「あ、危ない!」

巻き添えを喰らった生徒がその場から離れようとした時に落ちていたバナナの皮を

踏んでバランスを崩してしまい、海に落ちそうとなった。京原は、咄嗟の判断で走り、生徒の手を引つ張つたが逆に京原が海に落ちてしまった。

榎本「ちよつと、貴方、大丈夫？」

???「は、はい」

榎本「あ、京原さん！大丈夫ですか!？」

京原「ぷはあ、あはは、海に落ちるなんて、何年振りかしら」

京原は、海に落ちるなんて懐かしく感じ笑っていた。

榎本「大丈夫ですか？手を貸してください」

京原「ありがとう」

榎本「とりあえず、そのままだと風邪を引きますのでシャワー浴びて来ててください」

京原「はいはい、あと、そのの二人共」

???「はい！」

京原「早く行きなさい、入学式に遅れるよ」

???「はい！」

二人は、学校の入学式場に急いで向かった。

9:00

超大型直接教育艦「武蔵」のマストに学校旗が掲げれた。

古庄「では、宗谷校長よりご挨拶です」

真雪「皆さん、入学おめでとうございます、学校長の宗谷真雪です。皆さんは座学・実技で優秀な成績を収め、この横須賀女子海洋学校に晴れて入学しました。すぐに海洋実習が始まりますが、あらゆる困難を乗り越えて立派なブルーマーメイドになつてください。」

終了後、クラスの配置の書類が配られていった。

???「すごい、すごい！、もかちゃん、武蔵だよ、しかも艦長！、すごい！」

もえか「ミケちゃんだって、艦長さんになつたじゃない、晴風の」

明乃「うう、だけど、晴風は航洋艦クラスだから、正式には、艦長つて言わないらしいよ……」

もえか「でも、艦長は艦長だよ、小さい艦の方が、隅々まで目が行き届いて、いいんじゃないかな？」

明乃「そっかあ、一クラスの人数は、武蔵も晴風も一緒だもんね、ある程度自動化されてるとは言え、大きい艦は大変だね」

もえか「やりがいは、あるけれど」

明乃「でも私で大丈夫かなあ……艦長の仕事つて、受験勉強でやつただけだし」

もえか「ミケちゃん、きつといい艦長さんになると思うよ……ほら……あれが晴風

だよ」

明乃「なんか、かわいい」。「へ．．．あそこが、家になるんだな」

もえか「やつと会えたのに．．．また、離れ離れだね．．．」

明乃「大丈夫だよ、艦は別々だけど．．．でも、同じ海の上だもん」

もえか「ミケちゃん．．．」

明乃「私には、晴風の．．．もかちゃんには、武蔵の新しい仲間ができるし．．．」

もえか「．．．そうだね．．．海の仲間は、家族だもんね」

明乃「頑張つて、卒業して、ブルーマーメイドになろうね!」

もえか「うん」

明乃「海に生き!」

もえか「海を守り」

明乃「海を往く!」

『それが、ブルーマーメイド!!』

会話している最中、明乃が奥の方にある艦艇に目を向ける。

明乃「そういえば、奥にいる“巡洋艦”みたいな艦は、何だろうか?」

もえか「何だろう、ブルーマーメイドの新しい艦かな?」

続
く

第四十六話 出航

明乃「そういえば、奥にいる〝巡洋艦〟みたいな艦は、何だろうか？」

もえか「何だろう、ブルーマーメイドの新しい艦かな？」

榎本「そのの二人共、何をしている」

明乃「え？」

もえか「うん？」

明乃ともえかが振り向くとそこには、京原と榎本が立っていた。

明乃「あ!？」

もえか「ミケちゃん、知っている人？」

明乃「う、うん、登校する際に躓いて、巻き込んでじゃった人が海に落ちそうになった時に助けようとして、海に落ちてしまった人」

もえか「ミケちゃん、ちゃんと謝らないと」

京原「いいのよ、海に落ちるなんて、私が学生の時にあつた事だから、ところで貴方達は、先から何を見ていたの？」

もえか「あ、はい、奥にある〝巡洋艦〟みたいな艦を見ていたんです」

京原「巡洋艦みたいな艦？、あ、あれは「はるみ」よ」

明乃「はるみ？」

京原「私達が乗る艦よ、自己紹介を忘れていたわね、私は、はるみ艦長の京原監察官
よ」

榎本「副長の榎本監察官です」

もえか「二人は、ブルーマーメイドの人、何ですね」

京原「ええ、同時に教員でもあるわ」

榎本「おっと、京原艦長、そろそろ、打ち合わせ時間です」

京原「そうね、私達は、失礼するわね」

明乃「もえか「はい！」」

晴風 艦内

晴風クラス達「同じクラスになれたね」

???「（はあ、何で晴風何だろう、これじゃ私、落ちこぼれだ）」

???「宗谷さん、久しぶりだね、元気出して、宗谷さんが艦長じゃないなんて、何かの
間違いだよ、成績トップクラスなのに、」

真白「ん、」

明乃「ああ！、一緒に艦なんだ」

真白「ついてない」

明乃「縁があるのかな？」

真白「絶対ない！」

明乃「えへ・・・あつ、私、岬明乃。二人は？」

???「宗谷さん、お知り合い？」

真白「知らない、知らないったら、知らない」

明乃「宗谷さん？宗谷ましろさん、副長さんだよね、貴方は？」

???「私は、機関助手の、」

明乃「黒木洋美さん」

洋美「あ、うん」

明乃「よろしくね！」

真白「(岬、明乃、)」

数十分後

指導教官である古庄と京原達が晴風の教室に入ってきた。

古庄「晴風クラス、全員揃ったか？」

真白「(あれ、この二人は、)」

真白は、何処かで会った事を思い出した。古庄は、周りを見渡し、

古庄「艦長！」

明乃「はい！」

真白「(艦長!?)」

明乃「起立！」

古庄「指導教官の古庄です。今日から貴女達は、高校生となつて、海洋実習に出る事になります。辛い事もあるでしょうが、穏やかな海は、よい艦乗りを育てないと言言葉があります。仲間と助け合い、厳しい天候にも耐え、荒い波を越えた時に、貴女たちは一段と成長してはるはずです。また陸に戻つた時、立派な艦乗りになつた貴女達と会える事を・・・楽しみにしています。」

古庄は、自己紹介と海洋実習の意義について、伝え終えたと京原達の話に入る

古庄「それと今年度の海洋実習では、臨時教官が就いていますので紹介します」

京原「皆さん、初めまして、教官艦「はるみ」艦長の京原 和泉です」

榎本「同じく教官艦「はるみ」副長の榎本 花音です」

古庄「彼女達は、1年の間、海洋実習を共にします。分からない事があつたら相談をするように、では、各自、出航準備」

説明を終えた、古庄と京原達は、それぞれの教官艦に向かう為、退室した。

明乃「あの！、古庄教官！」

古庄「何、岬さん？」

京原は、追いかけて来た明乃に頷いた

明乃「あの、如何して私が艦長なのでしょう」

京原達は、会話に介入せず話を聞く事にした。

明乃「その、私は、艦長なれる程の成績では、」

古庄「では、聞くけど、貴女の理想の艦長とは？」

明乃「え？、それは、艦の中の、お父さんみたいな、あの、船の仲間は、家族なので」

古庄「んっ、ではそうならばいいは、この晴風にふさわしい立派な艦長に」

晴風 艦橋

明乃「あれ、五十六？」

五十六「ぬ、」

????「ね、こ」

????「可愛い、」

真白「うわあ、また、お前が、いえ、艦長が連れて来たんですか？」

明乃「勝手に乗り込んだみたい」

その時、出港を知らせる合図が鳴る。

明乃「あ、出港用意しないと、」

真白「この猫、如何するんだ!？」

???「もう降ろせないですし、鼠を退治してくれるから、良いんじゃないんですか？」

真白「そんな!猫と一緒に航海するのか」

明乃「じゃ、五十六は、大艦長という事で」

真白「私より階級が上・・・」

明乃「あ、そうだ!、改めてまして艦長の岬明乃です。よろしくね」

真白「副長の宗谷ましろだ」

???「私は、書記の納紗幸子です」

???「水雷委員の西崎芽衣よ」

???「すみません!、遅れました、ごめんなさい・・・はあ、はあ、わ、私、こ、航海

長の知床鈴です」

鈴「貴方は？」

???「ほう、ほう」

明乃「砲術委員の立石志麻さんだよね？」

志摩「うん」

晴風クラスの自己紹介をしている時、

榎本「自己紹介は、構わないが出港準備をお忘れてないよな？」

何故か、榎本が晴風にいた。

明乃「あ、榎本教官」

榎本「もう出港時間を過ぎてるぞ、早くしないと遅刻行きだぞ、」

艦橋に置かれた時間を見るともう出港時間を過ぎている事が分かった。

艦橋にいる全員「うわー！、急げ！」

榎本「それと京原艦長から貴方にこれを渡します」

明乃「これは？」

榎本「携帯型無線機よ、我々との交信は、その機械を使いなさい」

明乃「分かりました」

榎本「よし、すぐに出港準備を完了させるのよ」

明乃「はい！」

そう言つて、榎本は、はるみに戻っていた。

数分後

はるみ艦橋から晴風が動き出した事を確認した。

榎本「京原艦長、晴風が出港を確認しました」

京原「よし、我々も出港するわよ、両舷前進、微速」

西神「了解、両舷前進、微速」

そして、はるみも横須賀女子海洋学校から出港した。

京原「航海長、操艦、両舷前進原速、赤黒なし、針路150。」

西神「航海長、いただきます、両舷前進原速、赤黒なし、針路150。、本艦は、これより西之島新島沖を向け、航行します」

京原「よし、我が艦は、航洋艦「晴風」の後方に就く」

そして、はるみを含む横須賀女子海洋学校の艦艇は、問題なく出港した。その先に起こる危機があるとは、まだ、誰も知らない。

続く

第四十七話 集合地点の途中

4月5日（出港から4日目）

京原「予定通りにいけば、明後日には、西之島新島に到達するわね」

榎本「そうですね。我が方も異状なく航行しています。順調にいけば、いいですね」

教官艦「はるみ」 ウィングデッキ

はるみ見張り員「うん？あれ、晴風の速力が落ち始めている。」

柴代「どうした？」

はるみ見張り員「あ、柴代さん、前方を航行している晴風の速力が落ち始めているの

ですが、何かあったんでしようか？」

柴代「艦長達に報告してくる」

柴代は、ブリッジにいる京原達に声をかけた。

柴代「京原艦長」

京原「どうしたの柴代保安監督正」

柴代「はい、我が艦の前方を航行している晴風の速力が落ち始めているのですが」

榎本「確かに距離が縮まって来ている」

京原「速力の低下、おそらく機関の故障である可能性があるわね、榎本副長、無線で晴風に連絡を執ってくれないかしら」

榎本「了解しました」

その頃、晴風では

真白「海洋実習の集合場所に向かっている時に機関の故障なんて、ついてない」

幸子「これは、万事休すですね」

鈴「ココちゃん、感心している場合じゃないよ〜!」

そんな時、京原から渡された無線機が鳴る

幸子「艦長、無線機が鳴ってますよ」

明乃「あ、うん、もしもし」

京原「もしもし、岬艦長?」

明乃「京原教官!」

京原「岬艦長、あなたの艦の速力が落ちているのだけど、何かあったの?」

明乃「実は、機関が故障してしまって、修理する必要が・・・」

京原「(やっぱり)分かった。機関故障での遅刻は、こちらから古庄教官に伝えておくから大丈夫よ」

明乃「分かりました」

京原「それと、」

明乃「はい？」

京原「私達の艦から2名の機関科を向かわせるわね」

明乃「ありがとうございます！」

はるみは、速力を落としながら晴風に接近していき、左舷側に接舷し、ラツタルを繋げた。そして、二名の乗員が晴風にやって来た。

星沢「教官艦「はるみ」機関長の星沢 優香や」

灘島「同じく機関助手の灘島 正美です」

媛萌「応急員の和住媛萌です」

百々「同じく応急員の青木百々です」

星沢「貴方達、機関室まで案内してほしい」

星沢達は、応急員の媛萌と百々に連れられて、晴風の機関室に向かった。機関室に着くと扉をノックした。

黒木「はい」

晴風の機関助手の黒木が返事をする。扉が開かれた。

柳原「おう、何でえおめえらは？」

星沢「教官艦「はるみ」機関長の星沢や」

灘島「同じく機関助手の灘島です」

星沢「晴風の機関を修復の手伝いに来たんだが」

柳原「おお！そうか！私は柳原麻侖だ！」

黒木「私は、機関助手の黒木洋美です」

星沢「自己紹介も終えたし、故障したエンジンを見せてくれないかしら？」

自己紹介を終え、柳原と黒木は、星沢達を機関室からエンジンルームに案内した。

そして、星沢達は、持ってきた工具を床に置き、レンチを取り出した。

灘島「確か、晴風の機関は、高圧缶でしたね」

星沢「ああ、機関を高圧缶にする事によつてどの航洋艦より早い速力を実現する事が可能や、だけど、晴風に搭載されているこいつ（高圧缶）は、安定性があまり良くないから、最大速力を出そうとすると一気に逝つてしまう。それにこの艦は、教育艦になる前は、新装備を実証試験する為の試験艦つ的だったからな」

柳原「なあ、クロちゃん、ありや、」

黒木「間違いないわね、機関に関する知識が豊富で仕組みも知っているから、かなりの技量を持っているわ」

柳原と黒木が星沢達の事を話していると

星沢「二人共、高圧缶の何処かに破損箇所がないか、確認してもらえへんか？」

柳原「お、おう」

黒木「分かりました」

星沢・灘島・柳原・黒木の四人は、晴風の機関の修理及び点検を共に行った。

続く

第四十八話 突然の砲撃

2016年4月7日 6:00 西之島新島

古庄「全艦集合した？」

副教官「いえ、武蔵と晴風、そして教官艦「はるみ」がまだです、はるみからの情報によると機関不全（エンジントラブル）により到着が遅れるとの事です」

古庄「仕方ない事よ、あの艦は」

その頃、晴風とはるみは、集合地点である西之島新島を目指していた。

真白「現在位置は」

鈴「えつと、28。10 \times 50" N、139。33 \times 30" E、72.4マイル」

真白「あと何分で集合場所に着く、」

鈴「じゅ、巡航速度18ノットで4時間」

真白「はあ・・・始めての海洋実習に遅刻するなんて、ついてない」

鈴「ご、ごめんなさい。私が方向間違えたから」

京原「でも、機関が損傷しなかっただけでも、不幸中の幸いよ、本格的に壊れたら、一旦、横須賀に曳航しなければ、ならなかったし、実習どころ話じゃないわよ」

真白「それもそうですが・・・」

幸子「エンジンが直ったので、しばらくの間は、大丈夫だと思いますけどね」

芽衣「晴風は、高圧缶だからね、速度は速い分、故障が相次ぐだもん」

真白「はあ、ついてない、そういえば艦長は、」

明乃「今日は、いい天気だね、五十六」

五十六「ぬ・・・」

明乃「やつぱり海っていいな、」

芽衣「艦長、副長が読んでるよ」

明乃「あ、芽衣ちゃん」

芽衣「このままだと集合時間に間に合わないで、」

明乃「さるしまには、通信員のつぐちゃんが遅刻の連絡をしてもらたよ」

芽衣「でも呼んで来いってさ」

明乃「うん」

五十六「う、う、」

一方、はるみ 戦闘指揮所

はるみ乗員「艦長、S I Fに反応あり、教官艦「さるしま」及び多数の教育艦を確認」

京原「さるしまからの無線連絡は、来た？」

はるみ乗員「いえ、応答がありません」

京原「変ね、連絡来てもいい頃なのに」

榎本「ええ、確かに可笑しいですね」

京原達がさるしまからの連絡が来ない事に疑問を抱いていた時、晴風では、

明乃「どうしたの？」

真白「何処へ行っていたんですか！」

明乃「ちよつと甲板に、」

真白「遅刻しそう何を！」

明乃「遅れるっていう連絡は、もうつぐちゃんに送って貰ったし、だから五十六に餌

を・・・」

突然、砲声が鳴り響く。

マチコ「ん・・・は!？」

放たれた砲弾が晴風の右舷側に着弾し、水柱が上がる。

はるみ 戦闘指揮所

はるみ乗員「晴風の右舷側に砲弾が着弾」

京原「着弾!？」

榎本「レーダー員!、何故、捉える事が出来なかつた？」

はるみ乗員「砲撃艦からのレーダー波が無かった事からマニュアルによる砲撃かと」
榎本「すぐに砲撃艦を解析せよ！」

はるみ乗員「了解！」

京原「副長」

榎本「はい？」

京原「艦内放送で伝え、〃総員、対水上戦闘用意〃と促せ」

榎本「え!?!、あ、了解、副長より達する！総員、対水上戦闘用意！、これは、訓練ではない！」

艦内の廊下では、それぞれの持ち場に行く為、多くの隊員で互いしていた。

艦橋にいる隊員は、カポックと鉄帽を着用した。この放送は、外にも流れていた。

はるみの放送「〃副長より達する！総員、対水上戦闘用意！これは、訓練ではない」

明乃「嘘……」

真白「教官艦「はるみ」が戦闘態勢に……」

明乃と真白は、撃ち返すのではないかと動揺した。

芽衣「いいな、はるみは」

こんな切羽詰まった状態に芽衣がはるみが撃つ事を羨ましがっていた。

はるみ乗員「副長、砲撃艦が判明しました」

榎本「何処の艦だ？」

はるみ乗員「それが、教官艦「さるしま」です！」

京原「(え!?)」

榎本「さるしまだと!? 馬鹿な、教官艦が撃ってきたというのか？」

はるみ乗員「はい! あ、レーダーに反応あり、目標は、3! 晴風への直撃コースです

!」

京原「C I W S! A A W オート!」

榎本「艦長!」

京原「この距離じゃ、ミサイルも主砲も間に合わない!」

はるみ乗員「了解! 前甲板C I W S、攻撃開始!」

はるみの前甲板にあるC I W Sが火を噴いた。

航洋艦「晴風」

内田「教官艦「はるみ」、発砲しました!」

真白「何だと!」

その瞬間、晴風に直撃寸前で目標(砲弾) 3発が空中で爆発した。

慧「我が艦に直撃しかけていた砲弾が空中で爆発しました!」

芽衣「凄お! 機関銃で砲弾を撃ち落ちちゃった!」

芽衣は、CIWSの迎撃で砲弾を撃ち落した事に興奮状態であった。

幸子「それにしてもはるみの戦闘能力がかなり高いですね。」

幸子は、あまりにもはるみの戦闘能力が高い事に疑問視していた。

はるみ 戦闘指揮所

はるみ乗員「目標3の撃破を確認！」

榎本「何とか撃ち落としましたね」

はるみ乗員「しかし、このままでは限界が来ます」

京原「やむを得ない・・・副長、晴風に繋げて」

榎本「分かりました」

晴風 艦橋

幸子「艦長、はるみからです」

明乃「繋げて、明乃です。京原教官、どうしたんですか？」

京原「砲撃してきた艦が判明したわ、教官艦「さるしま」よ」

明乃「え、古庄教官が、どうして・・・」

真白「遅刻したからだ、怒られて当然だ」

京原「だけど、遅刻したくらいで砲撃をする必要は、あるのかしら・・・」

真白「それは・・・」

明乃「魚雷を撃とう」

真白「魚雷!？」

芽衣「え、マジ?、撃つ?、撃つの?」

京原「魚雷、確か晴風に搭載されている魚雷は、訓練弾(模擬弾)だったわね」

明乃「はい、訓練弾であれば、沈んでしまう事は、ありませんのでその間に回避する事が出来ます」

はるみ 戦闘指揮所

京原「副長、貴方の考えも聞きたい」

榎本「私は、艦長の言われた通りに動くまでです」

周りにいたはるみ乗員全員が頷いた。

京原「岬艦長、私の判断で魚雷の使用を許可します」

真白「しかし!、我々は、あえてこの攻撃に耐えるしかないだろう!」

京原「我々も本当であれば、攻撃を避けたい、だけど、はるみに乗る私達に課せられているのは、晴風の安全を確保する事なの、その事は理解してほしい」

真白「う、わ、分かりました」

真白は、渋々と認めた。

明乃「弾頭模擬弾!」

芽衣「戦闘、右、魚雷戦！」

はるみ 戦闘指揮所

京原「さるしまの目を我々に引き付けよ！」

榎本「了解、砲雷長、主砲による威嚇射撃、始め！」

畑宮「了解、主砲砲撃始め、但し、海面のみとする！」

はるみが砲撃を開始した。

理都子「魚雷発射まであと30秒」

芽衣「目標良し、方位核左90度、敵速18ノット、距離6マル」

明乃「3マルまで寄せて」

理都子「あと20秒……あと10秒……発射用意良し」

芽衣「発射、用意良し！」

明乃「攻撃始め！」

晴風の第一魚雷発射管から模擬弾頭（訓練魚雷）が発射され、高速でさるしまの左舷に着弾した。

芽衣「よっし、命中！」

幸子「さるしまの速度が落ちました」

明乃「よし、取り舵一杯、最大戦速！」

鈴「取り舵一杯」

麻侖「出力全開」

明乃「戻ーせ、0度ヨーソロー、鳥島南方10マイルまで退避！」

はるみ 戦闘指揮所

はるみ乗員「模擬弾の命中を確認しました」

京原「よし、晴風と共に当海域から離脱する」

晴風とはるみは、西之島新島海域から離脱していた。

さるしま 艦橋

古庄「・・・」

魚雷の命中し、二隻の離脱後、古庄は、何も発せず、手持ちのタブレットで状況を羽田港湾管理局に電文を打電していた。

2016年4月7日 夕方

幸子「それにしても、あの砲撃は、何だったんでしよう・・・」

芽衣「ちゃんと逃げられるかどうかの抜き打ち特訓だったんじゃない」

京原「いえ、そのようなスケジュールは、入っていなかったわ」

鈴「それにしても、本気すぎだよ、」

榎本「確かに本気で我々を沈める気だったんでしょか」

京原「まだ、分からない。だけど、何かとんでもない事態が起ころうとしているのかもしれない」

明乃「でも、大きな怪我の子が、出なくて良かった・・・皆掠り傷程度で済んだみたいだし・・被害状況まとめたら学校に報告した方がいいよね。」

真白「どれだけ、叱られる事か、」

その時、晴風の無線機が鳴る。

幸子「あ、無線ですね。取ります・・・大変です・・・」

明乃「え？」

幸子「晴風とはるみが、我々の艦とはるみが反乱したって！」

真白「反乱!？」

はるみ 戦闘指揮所

はるみ乗員「我が艦と晴風が反乱しと！」

榎本「どういう事なんだ!？」

京原「嫌な予感が当たった」

続く

第四十九話 反乱容疑

2016年4月7日 夕方 横須賀女子海洋学校

真雪「晴風とはるみが反乱!？」

教頭「はい、集合時間に遅れて到着した晴風とはるみは、突如、教官艦「さるしま」を攻撃、撃沈したそうです。」

真雪「何故、そんな事態に、それに同じ教官艦であるはるみが、どうして、攻撃を……」
教頭「さるしま艦長、古庄教官は、意識を失った状態で、まだ詳しい事は、分かっていません。」

横須賀女子海洋学校では、西之島新島での反乱の状況が報告していた同時刻、

秋沢「はるみがさるしまを攻撃しただと?」

反乱の情報は、在日日ノ出海軍にも伝えられていた。

磯口「はい、本日、西之島新島で横須賀女子海洋学校の海洋実習の為、向かっていた。はるみと教官艦「晴風」が突如として、同校所属の教官艦「さるしま」を攻撃し、撃沈したとの事です。」

秋沢「古庄教官の容態は?」

磯口「発見時、意識を失った状態であった事です」

秋沢「磯口二佐、速やかに海上安全整備局及び日本国土交通省、そして、横須賀女子海洋学校の関係者を招集せよ、そして、この事を直ちに大使館経由で本国に連絡！」

磯口「了解」

秋沢は、席を立ち、机に置いてあつた海軍帽を被り、急ぎで部屋を出た。

その頃、はるみと晴風は、鳥島沖を目指して航行していた

無線「……学生艦及び教官艦が反乱、さるしまを攻撃、さるしまは、沈没、艦長、以下乗組員は、全員無事……」

京原「教官艦「さるしま」は、沈没したけど、古庄教官を含む乗組員全員が無事であった」

榎本「しかし、さるしまが発砲したのに対して、何故、我々が反乱したと報告したのでしょうか？」

畑宮「うーん、さるしまが発砲した際、最初から撃沈するのが目的だったので……京原「その仮説は、低いの等しい、もしさるしまが反乱行為に及ぶのであれば、何かしたの声明と要求を出してくる筈だけど、それすらない、それに……」

畑宮「それに？」

京原「晴風が放った模擬魚雷が直撃した時、あの状況であれば、瞬時な対応をすれば、

沈没を免れる事が可能であつたにもかかわらず、何もしなかつた……」

榎本「艦長、我々は、今後の行動は、どうしますか」

京原「今、言える事は、晴風と共に第二集合地点である鳥島沖を目指す事ね」

榎本「了解」

その頃、晴風では

芽衣「何で反乱した事になつてるの!?先に攻撃してきたのさるしまでしょ!」

鈴「ええ、わ、私に言われても、」

真白「知床さんに言つたつて仕方ないだろ、」

芽衣「ああ、ごめん、ごめん」

鈴「でも、どうして沈没しちやたんだらう、模擬弾だつたのに、もしかすると、これも演習の一貫なんじゃあ」

真白「演習で沈没するか」

幸子「なら、わざと沈没したとか。私たち偶然にも何か、さるしまの黒い秘密を知つてしまつたんですよ!」

真白「始まつた……」

芽衣「私ら遅刻した、だけじゃん」

幸子「お前らーみたなー」(わたしたちーなにもみてましえーん)(ええーいこのまま

いかしてはおけーん) (ずどーん) (あつ逃げられた) (ええーいこのまま秘密と共に沈んでやるううう)」

芽衣「全部、妄想でしょ・・・」

真白「それより納沙さん、そのタブレット通信切つてある?」

幸子「大丈夫です。さつき艦長の指示があつたときにオフにしています」

真白「通信機器が使えないのは、不便だけだな」

芽衣「まあ、今、発見されたら面倒だしね、仕方ないよ」

明乃「ごめんね、不便だと思うけど、第二合流地点、鳥島沖までだから」

鈴「位置情報のビーコンも切つてあるけど、わ、私たちお尋ね者つてことだよね? 高校生になつたばかりなのに、犯罪者になつちやたんだよね? こんな嘘だよね? 嘘だといつて〜!」

志摩「・・・う・・・」

幸子「どうかしましたか? 立石さん」

志摩「・・・嘘・・・」

鈴「あ、ありがとう、いつてくれて」

その後、京原の意向で晴風を護衛しつつ、鳥島沖に向かつて行った。

続
く

第五十話 関係者会議

はるみと晴風が鳥島沖を目指していた時間帯、日本国内では

海上安全整備局1「乗組員全員は、無事であるが攻撃を行ったはるみと晴風を野放しにしておく訳にはいかんだろう」

海上安全整備局2「もし、万が一、民間船舶が攻撃されたら、どうするんだ」

海上安全整備局3「事態が深刻になる前に撃沈するべきでは・・・」

海上安全整備局の関係者は、反乱したはるみと晴風をこのまま、野放しにしたくないや民間船舶が攻撃を受けたら、挙句の果てには、二隻とも撃沈すべきだという意見も上がった、しかし、

真雪「待つて下さい！事実確認が出来ていない状況です。晴風とはるみを沈めても問題解決には、なりません！」

海上安全整備局3「だが、万が一にも備えて、ブルーマーメイド及びホワイトドルフィンに治安出動を出した方がいいだろう！」

真雪と海上安全整備局関係者と揉め事になっている時、

秋沢「うーん・・・」

国交省関係者「秋沢司令、どうされましたか？」

秋沢「いえ、さるしまが沈没した報告でどうも不自然に感じる事があるだけです」
国交省関係者「不自然な事ですか？」

秋沢「海上安全整備局の皆さん、晴風がさるしまに対して、攻撃した兵装は、分かり
ますか？」

海上安全整備局2「兵装ですか、左舷船体に被弾と報告があつたので、魚雷かと」

秋沢「宗谷校長、海洋実習の際、航洋艦及び巡洋艦に搭載される魚雷は、」

真雪「実習では、模擬弾頭の魚雷を搭載していますが」

秋沢「模擬弾頭であれば、迅速な対応をすれば、沈没が免れるはずなのですが、その
作業を行わなかった。あくまで仮説ですがさるしまの艦内で何か異常事態が起きてい
たのでは？」

海上安全整備局2「それが、分からない状況なんです・・・」

海上安全整備局1「しかし、二隻を撃沈した方が事態を鎮静化しやすいのでは」

秋沢「いや、むしろ、状況を悪化させる可能性があります」

海上安全整備局1「何故ですか、」

秋沢「はるみは、現在は、ブルーマーメイドの指揮下にいますが建造元及び乗組員は、
我が国にであり、はるみを沈めてしまった場合、ブルーマーメイド及びホワイトドル

フィンとの協力関係に亀裂を入ります」

真雪「最悪の場合は、どうなるのですか？」

秋沢「最悪の場合、はるみを攻撃した時点でブルーマーメイド及びホワイトドルフィンとの協力関係を破棄の上、日本に駐留している日ノ出軍全部隊が本国に完全撤退し、日本が昨年の危機的状況に陥つても支援には、一切、応じなくなるでしょう」

海上安全整備局の関係者全員の表情が青ざめた。現時点で日本の海域の均衡を保つ為にいる日ノ出が手を引いたら、再び、昨年の冬に発生した事件を再燃させてしまう事になる。

秋沢「その為にも事実確認を行うと同時に反乱の容疑を掛けられた、晴風とはるみを一刻でも早く居場所を発見し、聴取する事です」

この会議で晴風とはるみの搜索が急務となると同時に事態が悪化する事なった。

続く

第五十一話 所属不明艦、探知

2016年4月8日 午前5時

はるみ 戦闘指揮所

畑宮「もう事態発生から一日目が経とうしているのか・・・」

ソナー員「砲雷長、スクリー音を探知しました」

畑宮「スクリー音って事は、潜水艦？」

ソナー音「いえ、微かですが波切りの音が聞こえるので水上艦かと」

畑宮「水上艦か、艦橋に伝えるわ」

はるみ 艦橋

畑宮「CICから艦橋へ、京原艦長」

京原「畑宮砲雷長、どうしたの」

畑宮「ソナー員よりスクリー音を探知しました」

京原「潜水艦？」

畑宮「いえ、微かな波切りの音も確認できたので水上艦かと」

京原「晴風にも聞いてみるわね」

京原は、携帯型無線機の電源を入れた。

晴風 艦橋

携帯型無線機の着信音が鳴り響く。

幸子「艦長、無線機が鳴っていますよ」

明乃「うん」

明乃は、無線機を取り、繋げた。

京原「岬艦長、聞こえる？」

明乃「京原教官、どうしました？」

京原「はるみのソナーがスクリー音を感知したのだけど、波切りの音もするから水上艦だと思うのだけど、そちらのソナーは、何か捉えた？」

明乃「確認します。万里小路さん、ソナーに何か変化は、あった？」

万里小路「いえ、特に変化はないですわ」

明乃「そう、ありがとうね」

万里小路「どう致しまして」

明乃「京原教官、こちらのソナーには、変化がありません」

京原「そう、だったら、こちらでその艦の正体を調べるまでね」

明乃「どうやって調べるのですか？」

京原「このはるみにでしか出来ない事よ」

明乃「？」

晴風と並走していたはるみが先行し、後部の格納庫が開いた。

明乃「え、何あれ!？」

真白「はるみの格納庫から何か出てきたぞ！」

幸子「何でしょうか、あれは!？」

芽衣「何あれ!？」

志摩「うい!？」

はるみの格納庫から出てきたのは、対潜哨戒ヘリ「SH—60」であった。「そして、プロペラが回り始め、機体が飛び始めた。

芽衣「飛んだ!？」

明乃「嘘!？飛んでるよ！」

真白「一体全体、どうなっているんだ!？」

志摩「うい!？」

四人が驚いている中、

幸子「凄い！空想の産物と言われた水素やヘリウムを使わない飛行船（SH—60）がお目にかかれるなんて！」

幸子は、空想の産物といわれた物に興奮し、持参していたタブレット端末で写真を撮っていた。

京原「村越一尉、これはあくまで偵察よ、相手に気づかれない高度で撮影を開始せよ、」
村越「了解、これより本機は、所属不明艦の偵察に向かいます」

そう言つて、はるみとの無線を終えて、SH—60は、未確認艦の偵察に向かうのであつた。

第五十二話 アドミラル・シュペー戦 前編

2016年4月8日 SH-60

村越「さて、不明艦を捉えた海域に着いたが、何処にいるんだ？」

渡葉「機長、本機の左下方にいます」

村越「よし、現高度を維持しつつ、撮影を開始するぞ、」

小田辺「了解」

小田辺は、ヘリ搭載の偵察カメラを起動し、所属不明艦の撮影を開始した。ところが、

小田辺「あ、あれ、どうしたんだろう……」

村越「どうした？」

小田辺「不明艦を拡大するにつれて、映像が乱れて、あ、完全に映らなくなりました……」

た……」

村越「故障したのかな？」

小田辺「いえ、正常に動いています。」

村越「仕方ない、カメラを使って、所属不明艦を撮るしかないな、出来るか」

小田辺「少し高度を落としてもらえれば、大丈夫です。」

村越「分かった、少し高度を下げる」

村越は、カメラが撮影できる距離まで降下した

小田辺「よし、撮影を開始します」

小田辺は、カメラの撮影ボタンに指を伸ばし、押した。

カシャ、カシャ、カシャ

小田辺「撮影、完了しました。」

村越「了解、そろそろ燃料が限界だ。はるみに帰還するぞ」

そして、SH-60は、はるみへの帰還の途についた。

晴風 艦橋

明乃「あ、先、飛んでいたのが帰ってきたよ」

真白「はるみに降り立ちましたね」

幸子「でも、何しに飛んで行ったんでしょうかね？」

明乃「分からない」

SH-60がはるみに着艦した後、洗浄されながら、格納された。

畑宮「艦長、哨戒機から所属不明艦の写真が届きました」

京原「ありがとう、見てもいいかしら？」

畑宮「はい」

畑宮は、偵察写真を京原に渡した。

京原「この艦、大きさは、巡洋艦クラスだけど砲塔と砲身が大きいわね」

榎本「うーん、巡洋戦艦的な艦でしょうか？」

京原「ちよつと分からないわね、この情報を晴風にも送って」

榎本「了解」

晴風 艦橋

幸子「艦長、はるみからです」

明乃「うん」

京原「岬艦長、聞こえる？」

明乃「はい、大丈夫です、京原教官、どうしたんですか？」

京原「先、飛んでいた飛行体が所属不明艦の写真を撮ってきたの、その特徴を言うから、探してもらえるかしら？」

明乃「分かりました、ココちゃん、お願いできるかな？」

幸子「分かりました」

京原「言うわね、所属不明艦、主砲が前後合わせ、二基六門、左右共に副砲が多数、おそらく10cm以上もあり、艦尾に魚雷発射管が左右に一基ずつよ」

明乃「ココちゃん、何か分かった？」

幸子「あ、出ました。ドイツキュラント級直教艦ですね。主砲は、28cm三連装砲が二基、左右に15cm・10cmの副砲が複数あり、艦尾に53cm魚雷発射管が二基八門です」

京原「装甲の薄い晴風やはるみにとっては、危険ね、最悪の場合、轟沈は、免れないわね」

明乃「教官、どうしますか？」

京原「別ルートで鳥島沖を目指すのもいいけど、燃料の事もあるから進行は、維持しましょう」

真白「京原教官、迂回した方が・・・」

京原「それもいいけど、ドイツキュラント級と接触すれば、何か分かるかもしれない」

真白「しかし、さるしまの時と同じ事があったら、」

京原「その時は、我々が貴方達を守り抜くわ」

真白「はい」

明乃「りんちゃん、進路は、このまま維持して」

りん「は、はい」

数時間後

はるみ乗員「水上レーダーに感あり、SIFの反応なし」

はるみ乗員「艦橋からC I Cへ、右舷ウイングより報告、二時の方向にドイツチュラント級を確認、艦番号・W 2 0 7、艦名・アドミラル・シュペーです」

京原「シュペーか、確か」

榎本「はい、ドイツのヴィルヘルムスハーフェン校の所属艦です。今年度の横須賀女子海洋学校の海洋実習に参加する為に来日した艦です」

京原「でも、どうして、この海域にいるのかしら、C I Cから艦橋へ、発光信号及び無線に応答は、」

はるみ乗員「発光信号及び無線連絡を行いました但双方ともに応答がありませんでした」

京原「さるしまと同じね」

榎本「そうですね」

はるみ 右舷ウイング

はるみ乗員「うん？、な!、右舷ウイングよりC I Cへ、シュペー前甲板の主砲がこちらに向けてきました!」

京原「やはり、さるしまと同じ状態!晴風に連絡、直ちに回避行動を始め!」

榎本「了解」

晴風

マチコ「シユペー、主砲を旋回しています！」

明乃「え!？」

真白「撃ってくる!？」

幸子「問答無用ですな」

榎本「岬艦長、聞こえるか！」

明乃「榎本教官！」

榎本「すぐに回避行動を執るんだ！急げ！」

明乃「あ、はい！、りんちゃん、面舵一杯！、前進一杯！」

鈴「面舵いっぱい！」

マチコ「着弾！」

続く

第五十三話 アドミラル・シュペー戦 後編

2016年4月8日 昼

マチコ「シュペーも速度を上げました！」

真白「追ってきた・・・」

鈴「早く逃げようよ！」

シュペーの28cm主砲が再び、晴風とはるみに向けて撃つて来た。

幸子「シュペーは基準排水量12100t、最大速度 28.5ノット、28cm主砲六門、15cm砲八門、魚雷発射管八門、最大装甲160mmと小型直教艦と呼ばれるだけあって巡洋艦並のサイズに直教艦並の砲力を積んでいます」

マチコ「着弾！」

幸子「しゅ、主砲の最大射程は約36000m、重さ300kgの砲弾を毎分2.5発発射可能で！一発でも当たれば、一瞬で轟沈です。まあ、15cm砲副砲でもうちの主砲よりも強いんですけど」

真白「砲力と装甲は、向こうが遙かに上」

明乃「うちが勝っているのは、速度と敏捷さだけ」

鈴「このまま、機関全開にし続けたら完全に壊れちゃうよ〜！」

芽衣「魚雷撃って足止めする？」

真白「もうない！」

芽衣「ああ！そうだった！」

明乃「こっちの砲力は？」

志摩「70で5」

明乃「7,000で50ミリ・シユペーの舷側装甲は？」

幸子「80ミリです」

志摩「30」

明乃「30まで寄れば抜けるのね」

芽衣「ちゃんと会話が成立してる」

幸子「これが、艦長の器ってやつですか〜」

真白「そんなわけないだろ！」

明乃「マロンちゃん！出し続けられる速度は？」

麻侖「第4戦速まで、でえい」

真白「第4戦速・・・27ノットか・・・」

幸子「向こうの最大戦速とほぼ同じです」

明乃「どうしたら・・・」

はるみ CIC

畑宮「艦長、このままでは我が艦と晴風が危険です。主砲での対処は困難です。誘導

弾頭（ミサイル）の使用許可を進言します」

榎本「だが、弾薬庫に直撃でもすればシュペーが爆沈しかねないぞ！」

畑宮「しかし、被害が出る前にやらなければ、大変な事になります」

榎本「だけど、シュペーに乗艦しているのは、晴風と同じ学生なのよ、」

京原「榎本副長、確か晴風を始めとするこの世界の艦艇には、三重安全装置が施されていたはずよ、例えば、ミサイルを使っても安全装置が作動する可能性があるわ、今、シュペーを振り切るには、それしかないわ」

榎本「という事は」

京原「畑宮砲雷長、SSM、対艦誘導弾の使用を許可します。但し、シュペー艦尾を攻撃せよ」

畑宮「了解しました！」

京原「榎本副長」

榎本「はあ、全く、訓練でも変わりませんね、了解、総員に達する！対水上戦闘用意！」

はるみ艦内に艦内警報が鳴り響き、乗組員が各位の配置に向かった。

京原「岬艦長、聞こえる！」

明乃「京原教官、聞こえています」

京原「晴風は、速やかにシュペーの射程外へ退避せよ、我が艦これよりシュペーへ攻撃を行う！」

真白「何を言っているんですか！さるしまの時と同じになります！」

京原「実弾で艦尾を攻撃すれば、足止めが可能よ！」

真白「これ以上やったら、本当に反乱したと見なされます！」

ここで我慢していた京原の堪忍が切れる

京原「いい加減にしろ！貴方は、晴風と乗員の命がどうなってもいいって言うの！艦長の補佐をする立場なのにその様な大事な事も知らないのか、ええ!!」

京原の激怒に艦長の明乃は、固まり、航海長の鈴と砲術長の志摩は、泣き出してしまひ、芽衣と幸子が二人を慰める。真白は、京原の激怒に怯えてしまった。

京原「兎に角、晴風は、シュペーの射程外へ退避せよ」

明乃「了解しました。りんちゃん、取舵一杯！」

鈴「取舵いっぱい！」

晴風は、退避行動を開始した。

はるみ乗員「晴風、退避行動を開始しました」

京原「これで攻撃が出来る」

攻撃が可能となった、その時、

はるみ乗員「右舷ウイングよりCICへシュペーから小型艇が接近、晴風に向かいます！」

榎本「小型艇？、どういう事なんだ？」

はるみ乗員「小型艇の乗員が海上に落ちました！」

榎本「味方同士で攻撃をしているのか？」

京原「小型艇の乗員救助は、晴風に任せるとよ！我々は、シュペーを足止めをするのよ！」

畑宮「了解！対水上戦闘用意！17SSM！攻撃始め！」

はるみ乗員「発射用意！てえ！」

はるみ乗員がSSMの発射ボタンを押した。そして、はるみの左舷側にあるSSMの発射筒から17SSMが放たれる。晴風の左舷側にいた「山下 秀子」が発射を目標した。

秀子「はるみ、噴進弾を発射！」

真白「噴進弾!？」

放たれた17SSMは、超高速でシュペーに接近、艦尾に近い所で急上昇し、その後、急降下し、シュペーの甲板を貫いて、大爆発したが安全装置が働き、すぐに火は、収まった。

芽衣「凄い！百発百中だ！」

志摩「うい！」

攻撃を見た芽衣と志摩は、興奮していた。一方、明乃は、真白の反対を振り切つて、スキッパーに乗つて小型艇の乗員の救助に向かった。そして、救助後、乗員は収容された。はるみ乗員「艦長、小型艇の乗員の収容が完了したとの事です」

京原「よし、全速力で当海域から離脱する」

晴風 機関室

麻侖「ぶつ壊れちまうよお〜！」

洋美「本当・・・」

2016年4月8日 夕方

明乃「美波さん」

美波「艦長」

明乃「どーお？」

美波「外傷は、ない。脳波も正常・・・後は、意識が戻るのを待つしか」

明乃「そっか、ありがとう、私見てるから美波さん、食事してきて」

美波「感謝、極まりない」

晴風の食堂では、お昼に食べる筈であったカレーが振舞われていた。はるみの方では、

京原「はあ、」

榎本「艦長、どうぞ」

榎本は、マグカップに入れたコーヒーを京原に渡した。

京原「ありがとう、う、ふう、落ち着いた」

榎本「艦長、大丈夫ですか？少し艦長室で休まれた方がよろしいのでは？」

京原「大丈夫、交代時間まで何とかやり遂げるから」

榎本「あまり、無理をしないでくださいね」

京原「もう、副長は、心配性なんだから」

はるみ乗員「ん？、これは、艦長！非常通信回線です！」

京原「非常通信回線!?何処から？」

はるみ乗員「超大型直教艦、武蔵からです！」

榎本「武蔵だと！」

晴風

真白「艦長、至急、艦橋に来てください！」

明乃「シロちゃん、どうしたの？」

真白「非常通信回線が！」

明乃「どこから!?!」

真白「武蔵からです」

明乃「武蔵」

もえか「こちら武蔵、こちら武蔵」

明乃「もかちゃん!?!私、明乃。どうかした、何かあったの!?!」

もえか「非常事態発生、至急救援、現在、アスンシオン島北西、アスンシオン島北西、

至急救援を、至急救援を」

畑宮「アスンシオン島、北マリアナ諸島の方です」

榎本「何故、そのそんな所に武蔵がいるんだ？」

畑宮「半世紀以上前は、日本統治領であった事からアツソングソン島とも呼称されて

います」

京原「これではつきりした事は、異常事態が起きているのは、さるしまだけではない

事ね」

榎本「どうしますか、艦長」

京原「本来であれば、司令部に伝えるべきだけど、今は、反乱の容疑が掛けられている以上、すぐに向う事は、出来ないわね、我々は、このまま、横須賀を目指す」

続く

第五十四話 海中からの刺客

2016年4月8日 夕方

はるみと晴風が横須賀を目指していた頃、

横須賀女子海洋学校

老松「校長、海上安全整備局より連絡です」

真雪「読んで」

老松「はい、今回の晴風とはるみの件、速やかに学内で処理できない場合、大規模反乱行為と認定する、その際、貴校所属艦は拿捕、それが不可能なら、撃沈することです」

教頭「このままでは、本当に反乱と見なされて、ブルーマーメイド本隊の治安出動もあり得ます」

真雪「まだ、真実が分からないのに、生徒たちを危険な目にあわせるわけにはいかない！もちろん、晴風と共に行動しているはるみの乗組員もよ、私たちは、生徒たちと教官である京原さん達の安全の為、あらゆる手を尽くしましょう」

教頭「はい！」

真雪「まずは、国交省の統括官に連絡を」

場は、変わり、在日日ノ出海軍基地では、

磯口「秋沢司令、我々の意見は、届かなかったみたいですね」

秋沢「ああ、結局、どの国でも責任逃れをする為に証拠隠滅に走る、全く、」

磯口「1時間程前に本国から連絡がありました」

秋沢「本国は、何と言ってきた？」

磯口「はい、はるみ及び晴風の捜索の為、強襲揚陸艦「いおうじま」を旗艦とする艦

隊が出航したとの事です」

秋沢「そうか、何としても早く見つけんとな」

晴風では、

明乃「(武蔵からの救援要請、どうしよう)」

数分後

幸子「損傷の確認、出来ました」

真白「状況は」

幸子「現在、機関修理中、”3番主砲使用不能、魚雷残弾なし、爆雷残弾1発、戦術航法装置並びに水上レーダー損傷、通信は、受信のみ出来ますが」

※晴風がシユペーから退避している時、主砲弾一発が直撃した事による。

真白「航行に必要な所の修理最優先でどれくらいかかる？」

幸子「機関だけなら後8時間くらいですね」

真白「まず、そこからだな、機関長！動きながらで、大丈夫か？」

麻侖「何とかする〜！でも、巡航以上は、出せねいぜ〜！」

真白「分かった、巡航で学校に戻る最短コースでいいですね、艦長？、艦長!!」

明乃「えっ？、シロちゃん、何？」

真白「はあ、しつかりしてください」

明乃「ごめん、つい、」

2016年4月8日 夜

はるみ 艦橋

はるみ乗員「辺りがすっかり暗くなりましたね」

西神「そうね、肉眼では、識別する事は、難しいけどレーダーが動いているから、大丈夫よ」

はるみ乗員「でも、水上艦からの攻撃は、もう無いですよね？」

西神「水上艦からの攻撃は、ないけど、この闇に乗じて攻撃してくる”刺客”は、いるから気を抜いては駄目だぞ」

はるみ乗員「了解！」

晴風 通信室

八木「ふ、ふ、ふーん、うん？、海上安全委員会」

幸子「八木さんが、緊急電傍受したそうです」

明乃・真白「どこから!？」

幸子「海上安全委員会の広域通信ですわね」

真白「広域通信？、えつと、現在、横須賀女子海洋学校の艦艇が逸脱行為をしており、同校全ての艦艇の寄港を一切認めないよう通達する、また、以下の艦は抵抗するようなら撃沈しても構わない、教官艦はるみ、航洋艦晴風!？」

志摩「げ、げき」

芽衣「撃つのは、好きだけど・撃たれるのは、やだあく!」

明乃「何処の港にも寄れないって事？」

真白「そう言うことだな」

鈴「私たち完璧にお尋ね者になってるよお」

明乃「もしかして、武蔵も同じ状況なのかも、だから、非常通信を」

真白「こつちと違って、簡単に沈むような艦じゃない」

明乃「でも、助けを求めてた、だから」

真白「我々の方が助けが必要だろ！、それに、実技演習もしてない私たちがどうやっ

て助ける気だ、学校へ戻る方針を変えるべきじゃない、武蔵の事は、学校に報告して任せよう」

明乃「分かった・・・シロちゃんの言うとうり、学校へ戻ろう」

志摩「うい」

明乃「じゃあ私が艦橋に入るから、皆は、休んで」

幸子「今夜の当直は、私と鈴ちゃんです」

真白「正しい指揮をする為には、休むのも必要だ」

明乃「私は、大丈夫だから」

真白「いいから！休んでください！」

明乃「うん、分かったよ、シロちゃん」

晴風 明乃の部屋

明乃「（もかちゃん、助けに行きたい、でも、今は）、はあく、もつと艦長として、しっかりしないと・・・」

数時間後

はるみ CIC

はるみ乗員「ソナー探知、方位30°、潜水艦の可能性あり」

榎本「了解した、総員、対潜戦闘用意！」

榎本は、すぐに京原を呼んだ。

晴風

幸子「艦長、水測の万里小路さんが、何か海中で変な音がするって、艦長！、艦長！」

明乃「総員配置！」

艦橋

明乃「ココちゃん、報告して！」

幸子「えつと、方位30に二軸の推進機音、感2、現在音紋照合中です」

明乃「水上目標がないって事は、潜水艦？」

芽衣「ふあああゝ如何したの？こんな時間に？」

明乃「シロちゃんそれ！」

幸子「何やってるんですか」

真白「ん、わあ、これは、その、見るな！」

光「主砲、配置よし」

麻侖「機関は、まだ修理中、巡航以上は、出せねえぜ」

マチコ「見張り異常なし、何も見えませんが」

真白「か、各部、配置に着きました」

楓「音紋照合いたしました。東舞校所属艦、伊201ですわ」

明乃「ありがとう万里小路さん」

楓「どう致しまして」

芽衣「東舞校？」

幸子「男子校ですね」

秀子「へえー男子校なんだ」

まゆみ「潜水艦は全部男子校ですもんね、でも狭くて暑くて臭くて」

鈴「わ、私には無理」

幸子「取り敢えず、教官艦「はるみ」にも伝えた方が」

明乃「うん、そうだね」

はるみ CIC

榎本「艦長、晴風のソナーが潜水艦を探知、所属が判明したとの事です」

京原「何処の潜水艦？」

榎本「東舞校所属の伊201です」

京原「東舞校、ホワイトドルフィンの養成学校か」

畑宮「この伊201は、ドイツからの技術導入により建造された潜水艦です」

榎本「我々では、あまり脅威ではないですね」

京原「だけど、戦術航法装置及び水上レーダーが破損、そして、機関修理中の晴風に

とっては、厄介な相手、引き続き、対潜警戒を維持よ」
榎本「了解」

続く

第五十五話 伊201との戦闘

2016年4月9日 深夜

明乃「そういえば、伊201って、どんな艦何だろう？」

幸子「えつとですね、あ、ありました、基準排水量1,070トン、水中速度20ノットは出る高速艦ですね」

明乃「20ノットって、晴風に比べたら、全然遅いよ」

真白「こっちは、水上、向こうは、水中でそれだけ出るが凄いの、通常の潜水艦は、6ノット程度だ」

志摩「20と6」

明乃「へえー、約三倍も速いんだ、武装は？」

幸子「53cm魚雷発射管四門、25mm単装機銃二丁、魚雷10本！」

楓「魚雷2本いらっしやいました！」

明乃「マロンちゃん、出せる限りで最大戦速！」

麻侖「今は、手が離せ出え、クロちゃん頼んだ！」

洋美「了解」

はるみ CIC

はるみ乗員「魚雷音、探知、方位270°、伊201は、晴風に向けて魚雷を発射した模様」

京原「晴風に魚雷を当てさせるな!、VLA攻撃用意」

畑宮「了解、VLA攻撃始め」

はるみ乗員「発射用意、てえ!」

はるみから発射の警報音が鳴り響く

真白「な、何の音だ?!」

幸子「はるみからです!」

はるみのVLSからVLA(対潜ミサイル)が発射された。

晴風 見張り台

マチコ「はるみが噴進魚雷を発射しました!」

明乃「え!噴進魚雷!」

真白「おかしい、噴進魚雷は、対艦用のはずだが」

発射されたVLAは、ブースターを切り離し、パラシュートを開いた。

明乃「万里小路さん、発射音は、どっちから?」

楓「魚雷音方位、270°。近づきます!感2、感3、」

秀子「はるみが発射した噴進魚雷が海面に落下しました！」

V L Aが海中で動き始めた、目標は、

楓「はるみの魚雷を探知しましたわ、目標は、伊201が発射した魚雷ですわ！」

真白「何!?!」

明乃「魚雷を魚雷で迎撃しようとしているの?!」

明乃と真白は、驚きを隠せずにいた

はるみ CIC

はるみ乗員「アスロック、敵魚雷に命中します！」

伊201の魚雷とはるみのアスロックが正面で接触し、爆発、海上に大きな水柱が立った。

晴風

マチコ「左30。に水柱を確認！」

楓「水中で爆発音を確認しましたわ、晴風に向けられていた魚雷二本全て、撃破されましたわ！」

芽衣「魚雷で魚雷を撃破、凄お!!」

志摩「うい！」

幸子「はるみの戦闘能力が恐ろしい程、高いですね」

明乃「うん、そうだね」

鈴「ぜ、全速が出せれば、多分振り切れると思うけど」

麻侖「だから全速は出せねえって！」

鈴「わ、分かっています」

明乃「万里小路さん、相手の位置分かる？」

楓「恐れ入りますが、もっとゆっくり進んで頂かないと」

鈴「速度落としたら、やられちゃうよ！」

明乃「とにかく今は逃げ回ろう！」

はるみ C I C

はるみ乗員「アスロツクの命中を確認、敵魚雷全弾、撃破しました」

畑宮「油断するな、まだ、脅威が去った訳じゃないからな」

はるみ乗員「了解」

2016年4月9日 午前2時前

マチコ「周囲、何も見えません」

真白「1時間経過か、速度差からも、十分距離は、開いたかと」

明乃「そうなの？」

真白「向こうも、最高速度ですつと水中を動けるわけじゃない」

明乃「じゃあ、何とか逃げられたかな」

鈴「逃げるなら任せて」

幸子「それって自慢する所ですか？」

鈴「こ、ココちやうん」

ある程度の時間が過ぎた頃・・・

明乃「万里小路さん、何か聞こえる？」

楓「あら、お許しあそばせ。起きておりますわ」

明乃「御免ね、こんな遅くまで、でも、もう少しお願い」

楓「畏まりました」

志摩「ふわあく、ねむ」

芽衣「ふわあくあー駄目だく眠い」

ほまれ「そんな、みなさんに杵埼屋特製のどら焼きです」

晴風 マスト

マチコ「♪・・・！」

マチコがどら焼きを口にしようとした時、魚雷を視認

マチコ「雷跡2！ 左120度30、こちらに向かう！」

晴風 医務室

ミーナ「え、え、え、な、何じやく！」

晴風の後方で魚雷が爆発した

はるみ CIC

畑宮「ソナー員、どうして、魚雷を捕捉が出来なかった！」

はるみ乗員「ソナーに探知されないよう、最高水深から放たれた可能性があります」

畑宮「となると、伊201は、確認の為に浮上している可能性があるな、ソナー員、アクティブソナーを使い」

はるみ乗員「了解、アクティブソナー、照射！」

はるみのソナー員がアクティブソナーを照射した。

はるみ乗員「ソナー反応あり、方位220。距離3500」

畑宮「副長、SH-60を発艦させ、周囲海域を搜索してみても、どうでしょうか？」

榎本「戦闘状態で発艦させるのは、危険すぎる」

畑宮「では、どう対処しますか？」

畑宮と榎本が伊201への対処を考えていた時、京原が、

京原「だったら、伊201を脅してみるか？」

畑宮・榎本「え？」

晴風

明乃「あと6本」

真白「こんなに直ぐ見つかるとは」

ミーナ「このド下手くそな操艦は、何何だ！艦長は誰じやい！．．この船はド素人の集まりか！」

幸子「今、潜水艦と戦闘中ですよ」

ミーナ「そんな事、分かっとる！、ならば夜戦中なのに照明が付けているとは、何事だ！」

明乃「全部照明消して」

芽衣「何にも見えない！」

ミーナ「陽明を鳴らしておかないからだ！、航海灯も消せ！どま抜けどもが！」

鈴「こんな事したら、他の船とぶつかっちゃう」

ミーナ「戦闘時に自分の姿を晒すドアホがいるか！」

ミーナ「次の事を言うとしたその時、はるみから再び警報音が鳴る。

ミーナ「な、何の音だ！」

幸子「再び、はるみからです！」

ミーナ「はるみ？」

明乃「私達と一緒にしている教官艦だよ」

明乃がはるみの短い紹介をした後、はるみのVLSから再びVLAが発射される。マチコ「はるみ、再び噴進魚雷を発射しました！」

明乃「え、また、噴進魚雷？」

真白「一体、教官は、何を考えているんだ？」

ミーナ「というか、噴進魚雷は、対艦用だろう」

再び、放たれたVLAがある地点でブースターを切り離し、パラシュート降下後、海中の中で動き始める。

楓「はるみの魚雷を探知しましたわ、目標は、・・・え!？」

明乃「万里小路さん、どうしたの？」

楓「はるみの魚雷の目標は、伊201です！」

ミーナ「何!？」

明乃「そんな！」

真白「まさか教官は、伊201を沈める気なのか!？」

芽衣「嘘、でしょう・・・」

鈴「本当にお尋ね者になっちゃうよ〜！」

志摩「うい・・・」

晴風・艦橋にいた全員が緊迫した状態になり、そして、大きな水柱が立った。

マチコ「左舷に水柱を確認！」

明乃「そ、そんな・・・」

真白「我々は、完全に反乱者となっていました」

鈴「(；ω；) ウウウ」

明乃達は、本当に反乱者になってしまった事に絶望感に包まれていた。しかし、

楓「岬さん！スクリー音を探知しましたわ！」

明乃「え？」

真白「スクリー音？って事は、」

楓「はい、はるみの魚雷は、伊201に命中する寸前で爆発しましたわ！」

明乃「よ、よかった」

真白「はあ、」

艦橋にいた全員が安堵のため息をついた。

マチコ「左舷に気泡を確認！」

楓「浮上します！」

その時、無線機が鳴り響く、明乃が無線機を取る。

明乃「岬明乃です！」

京原「岬艦長！、これより当海域から離脱します。我が艦について来て！」

明乃「了解しました！、りんちゃん！、最大戦速ではるみの跡を追って！」
鈴「ヨーソロー」

そして、晴風は、はるみの跡を追いながら、潜水艦のいる海域から離脱して行った。

続く

第五十六話 戦闘後

2016年4月9日 早朝

晴風 医務室

明乃「美波さん、起きてる？」

美波「臣民暁を覚えず、魚雷に砲火の音、一服の茶をきすいする」

明乃「ありがとう、うわく！しょっぱく！」

美波「青人魚名物、塩ココア」

明乃「ひよとして、塩だけで砂糖を入れなかったの？」

美波「フン・・・(ニヤリ)」

明乃「美波さん、わざと・・・？、あつ、ところでシユペーの子は？」

その時、医務室の扉が開く

ミーナ「何だ？、ワシに何かようか？」

明乃「さつきは、ありがとう、おかげで助かったよ」

ミーナ「ふん、寝ていた所を叩き起こされたがな」

明乃「あ、聞いてもいい？貴方達の艦で何があったか」

ミーナ「我がアドミラル・シュペーか」

明乃「そう、あ、もし、言いたくなかったら」

ミーナ「いや、わしもよく分からんが、聞いてもらった方がいいな、我らの貴校との合同演習に参加する予定だったのは知っておるな？」

明乃「うんうん、初めて知ったよ」

ミーナ「まあ、それはいい、ワシらは合流地点に向かつていたんだが、突然電子機器が動かなくなつて調べようとしたら誰も命令を聞かなくなつた」

明乃「反乱？」

ミーナ「分からん、ワシは艦長から他の船に知らせるよう命じられて脱出してきた」

明乃「艦長？」

ミーナ「帽子を拾ってくれたのは感謝している。あの帽子は我が艦長から預かつた大事な物：シュペーに戻つて艦長に返さなければ、必ず」

明乃「分かつた、私も手伝うよ」

ミーナ「！」

美波「同舟相救う、その船を同じくして渡りつて、風にあう渡ればその相救うや左右の手の如し」

幸子「艦長！校長からの全艦帰港命令が出ました！」

明乃「お！」

幸子「えくと、「私は全生徒を決して見捨てない。皆を守るためにも全艦可及的速やかに学校に帰港せよ」との事です！」

その後、今後の事を話し合うため、晴風とはるみが接舷し、京原と榎本がやってきた。明乃「学校から全艦帰港命令が出ました。晴風も学校側が責任をもつて保護するので戻ってくるようにつて、帰還中は一切の戦闘行為は禁止だそうです」

あかね&ほまれ「良かった」

真白「だがまだ広域には、晴風に対する警戒は続いている、どの港にも寄港できない、我々は、密かに学校に戻らねばならない」

明乃「それから、新しい友達を紹介します！ドイツの、ヴィナブラウシュユガインゲンマメ、あれ、何だっけ？」

ミーナ「サイシュン！ヴィルヘルムスハーフェン校から来た、ヴィルヘルミーナ・ブラウンシュヴァイク・インゲノール・フリーデブルクだ、アドミラル・シュペーでは副長をやっていた」

明乃「長いから、ミーちゃんの良いかな？」

ミーナ「誰が、ミーちゃんじゃ！」

晴風の乗員がシュペーの乗員を話している時、京原は、悩んでいた。

榎本「艦長、この子達に我々の事を話しますか？」

京原「…例え、誤魔化してもいずれば、話さなくてはいけないわね、」

榎本「そうですね、分かりました。岬艦長、ちよつといいかな？」

明乃「榎本教官、どうしました？」

榎本「実は、我々は、本当の事を話そうと思うの」

明乃「どういう事ですか？」

明乃は、本当の事とは、何か分からずにいた。

京原「晴風の皆、これは、一回しか言わないから、よく聞いて」

晴風の乗員は、何を話すのかをまだ分からなかったがここで京原は、言う。

京原「シユペー及び伊201との戦闘で噴進弾や噴進魚雷を見たという人は、手を挙げてほしい」

京原の言葉に艦橋にいた全員が手を挙げた。

明乃「京原教官、一体、どうしたんですか」

京原「うん、実は、あの装備は、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンには、搭載されていない装備なの」

晴風一同「え!？」

その場にいた晴風の乗員全員が驚いた。

真白「え、ブルーマーメイドやホワイトドルフィンには、搭載されていない装備って、
どういう事ですか!」

真白は、その事に対して、詰め寄った。

京原「あの装備は、他の国で正式された装備を搭載している、そして、それを搭載しているはるみとそれに乗る私達は、最初からブルーマーメイド人間じゃないの」

明乃「え!」

芽衣「ブルマー人間じゃない」

京原「それに私達は、日本人のように見えるけど日本人じゃないの」

晴風一同「え!?!」

真白「日本人じゃない、だったら、京原教官達は、何者なんですか!?!」

京原「分かりました。私達が何者なのかを話すわね」

京原は、はるみは、元々日ノ出国で建造された最新鋭イージス艦であり、イージス艦とは何か、それを運用しているのは何処なのかを全て話した。

京原「これがはるみと私達の本当の姿よ」

晴風一同「・・・」

晴風の乗員全員が戸惑いを隠せずにいる。

真白「まさか、京原教官達が軍人だなんて」

幸子「信じられません・・・」

明乃「・・・」

京原「晴風の皆さん、今まで黙って言って、ごめんなさい」

頭を深々と頭を下げ、晴風の乗員全員に謝罪した。

明乃「教官を頭を上げてください」

明乃は、京原に頭を上げてほしいと言った。

明乃「誰も京原教官の事を責めていません、寧ろ、感謝しています、私達、晴風の皆を守ってくれたんですから！」

晴風一同「そうだよ!」、「教官がいなかったら、ここまで来れなかったしれない」

京原「晴風の皆さん、ありがとう、今後も私達は、皆さんと共に行動します、これからもよろしく願います!」

そして、晴風とはるみは、横須賀を目指して動き出すのであった。

続く

第五十七話 物資調達

学校からの全艦帰還命令を受けたはるみと晴風は、針路を横須賀に向けて、航行していた。

2016年4月13日 午前10時

晴風 倉庫

媛萌 「お米が120kg、缶詰肉が10箱程」

百々 「まだまだ余裕つすね、あつ」

百々がトイレトペーパーの段ボールに視線向ける。

媛萌・百々 「ん？」

百々が段ボールを引っ張ると

百々 「あれ!？」

トイレトペーパーの在庫がなくなっていた。

晴風 艦橋

真白 「横須賀までどれくらい掛かる？」

鈴 「えっ!?!、えっと、26時間かな」

真白「艦長、可能な限り急ぎましょう、学校側から戦闘停止命令が出ているとはいえ、これ以上他船と遭遇したくない」

志摩「うい」

芽衣「ああ、もう撃てないんだ〜！」

真白「艦長？」

明乃「・・・」

真白「艦長！」

明乃「ん!?、ふあ〜ごめん」

幸子「私、本当は武蔵のSOSに応えたいの!」「何を言っている!全艦学校に戻れと言われただろう!」「わかつている!でも!」

艦橋にいる全員「アハハ・・・」

明乃「うん、きっと武蔵は大丈夫!私達は急いで学校へ戻ろう!」

媛萌「艦長!大変!大変!」

百々「一大事つす!」

30分後

はるみ 艦橋

京原「副長、横須賀まであとのぐらいかしら?」

榎本「はい、現速力だと翌日の昼頃には、横須賀に到達するかと」

京原「分かったわ」

はるみ乗員「艦長、晴風から連絡です、ちよつと変な要請なんですが・・・」

京原「変な要請？」

はるみ乗員「何でも晴風の生徒がトイレットペーパーを無駄に使用した事で在庫が底を尽くしたの事です」

榎本「何をやっているの・・・」

京原「物資か、確かにさるしまの件がなければ、予定通りに補給艦から補給が得られただけだね」

榎本「それで、晴風は、何って言っているんだ？」

はるみ乗員「何でも四国沖にオーシャンモールとよばれる洋上の商業施設がある事からそこで調達する為、はるみの乗組員に同行してほしいとの事です」

榎本「同行っても言ってもな・・・」

京原「いいじゃないの、副長、岬さん達と共に行動してきなさい」

榎本「艦長に言われたら、仕方ないですね」

榎本は、物資調達に同行する乗組員を決め、航海科から2名、砲雷科から3名が志願し、計6名となった。

あくまで物資の調達であるが万一に備えて、9mm拳銃とMP5短機関銃を持たせた。

そして、はるみ搭載の複合艇に乗り、晴風の乗員と合流し、オーシャンモールに向かつて行った。

明乃「ところで榎本教官、大きい鞆ですな、何が入っているんですか？」

榎本「あまり、見せたくないけどね」

そう言つて、榎本は、鞆のファスナーを開けた。中身を見た明乃達は、ゾツとした。

明乃「あのそれつて、拳銃ですか」

榎本「ええ、本物の銃火器よ」

媛萌「え、それつてまずいんじゃないや……」

榎本「何事もなければ、使う事はないけど、何かあつた場合は、脅し程度には出来る」

美甘「そ、そういうものですか」

その様な会話をしながら、オーシャンモールに向かうのであった。

第五十八話 買い出しと交流

2016年4月13日 昼 オーシャンモール 四国沖店

明乃「うわ〜！」

美波「平和だ」

美甘「お茶する時間ぐらいあるよね」

媛萌「ないから」

美甘「媛萌ちゃん、それかえって目立つよ」

榎本「確かにそんな恰好をしていたら、逆に怪しまれるぞ、マスクは、着けていいが
サングラスは、外した方がいいわ」

媛萌「あ、はい」

そう言つて、媛萌は、サングラスを取った。

はるみ乗員「それにしても海上にこのような大型施設を見るのは、初めてです」

はるみ乗員「我々の国には、中々見られない物ですね」

榎本「よし、これより班を二手に分ける、何かあつたらトランシーバーで連絡するよ
うに」

はるみ乗員一同「了解」

そして、食料品と日用品に分けた買い出し班は、行動を始めた。

その頃、はるみ艦橋

京原「ここがはるみの艦橋よ」

芽衣「凄く高い！」

幸子「色々な計器が一杯ありますね」

鈴「操舵輪は、晴風は、木で出来ているけど、こっちは、鉄なんだ」

三人が計器や操舵輪等を見ている時、真白は、ある物に見た。

真白「京原教官、左右にある椅子は、何ですか？」

幸子「そういえば、左右にある椅子は、何でしょうか？」

京原「これは、それぞれのトップが座る椅子よ」

鈴「トップ？」

京原「ええ、右の赤い椅子は、艦長が座る席で左の黄色の椅子は、艦隊を指揮する司

令官が座る椅子よ」

真白「司令官が座るといふ事は、旗艦になる事もあるんですか？」

京原「そうよ」

はるみ 前甲板

畑宮「これのはるみの主砲である64口径127mm単装速射砲だ」

順子「かなりスマートな形をしているね」

美千留「ブルーマーメイドやホワイトドルフィンの艦は、多くは、こうゆう形をしているよね」

光「確か、今の艦は、殆どが自動で照準を合わせる事が出来るよね」

志摩「うい」

畑宮「主砲射程は、37km、武蔵の46cm砲の射程である42kmに大体は、勝っているぞ」

光・美千留・順子「へえー」

志摩「うい」

畑宮「あと、この主砲が撃てるのは、通常弾頭だけでなくヴォルカノ砲弾も発射可能だ」

志摩「うい?」

光「ヴォオ、ヴォルカノ砲弾?」

美千留「どのような砲弾ですか?」

畑宮「ヴォルカノ砲弾、別名：射程延長弾と呼ぶ、ビーコン（GPS信号）を受けながら正確に目標に命中させる砲弾だ」

順子「ビーコンを受けながら、正確に目標に命中させる何って」

美千留「もう、それは、砲弾じゃなくて、誘導弾じゃん」

志摩「うい」

光「ところでヴォルカノ砲弾の射程ってどのくらいだろう、延長弾だから40 kmぐらいかな？」

畑宮「いや、通常砲弾の射程が37 kmに対して、ヴォルカノ砲弾の射程は、100 kmにも及ぶぞ」

光・美千留・順子「ひゃ、100!？」

志摩「うい!？」

4人は、驚きを隠せなかった。

同じ場所ではるみのレーダー員が「宇田 慧」・「八木 鶴」・「野間 マチコ」にレーダーの説明をしていた

はるみ乗員「あの八角形がこの艦の目であるアクティブ・フェイズドアレイ・レーダーです」

慧「大きい」

鶴「そうだね」

マチコ「うん」

はるみ乗員「このレーダーは、はるみの艦橋に取り付けられ、合わせて4枚であり、常に四方の状況を見張っています」

慧「へえー」

鵜「ところではるみのレーダーの探知範囲って、どのぐらい何ですか？」

はるみ乗員「はい、このレーダーの探知範囲は、半径およそ500kmです」

慧・鵜「広い！」

マチコ「！」

はるみのレーダーの探知範囲に驚くがそれだけでは、終わらない。

はるみ乗員「このレーダー最大の利点は、タイムラグがないという事です」

鵜「タイムラグ？」

慧「いわゆる時間のずれだよ」

はるみ乗員「はい、通常のレーダーは、回転しながら電波を照射しているので僅かなタイムラグが発生します」

鵜「確かにレーダーが向いてない所の目標を一時的に探知ができなくなる時があります」

はるみ乗員「しかし、はるみのレーダーの場合は、回転しなくとも電波を照射しているので目標を常に見張る事が可能です」

慧・鵜「凄い」

はるみ乗員「また、このレーダーは、数百の目標を探知する事が出来る他、数十の目標を同時に攻撃する事が出来ます」

慧・鵜「数百の目標を探知するだけでなく数十を同時に攻撃も!？」

マチコ「もはや鉄壁」

その他、晴風の各科事に見学を行っていた。

主に艦橋・C I C（特別）・前甲板・厨房・医務室・格納庫。

続く

第五十九話 調達終了と駆引き

2016年4月13日 夕方

榎本「取り敢えず、日用品と食料は、大体は、調達したわね」

はるみ乗員「あとは、何が必要ですかね・・・」

明乃「あとは、トイレットペーパー何ですが」

美甘「買い出し必要なお金、全て使い切っちゃたし・・・」

媛萌「今、あるのは、買い物時に貰えた福引券だけだし・・・」

はるみ乗員「そういえば、食糧調達の時に福引ができる場所を見ましたよ」

明乃「え！、何処にありましたか？」

はるみ乗員「えっと、確か食料品店の外にあったよ」

榎本「じゃあ、来た道に戻るか」

晴風とはるみの乗員は、福引の会場に向かっている時、

はるみ乗員「副長」

榎本「どうしたの？」

はるみ乗員「どうやら我々の後を追っている者がいます、どうしますか？」

榎本「泳がしておきなさい、おそらく」同じ人魚よ」

はるみ乗員「分かりました」

福引会場

明乃「うーん、何が当たるかな・・・」

美甘「トイレットペーパーだといいね・・・」

媛萌「ポケットティッシュじゃないといいな」

榎本「もしも、はずれたら、私がトイレットペーパー代を出すから安心しなさい」

明乃「はい、ありがとうございます」

そして、明乃は、抽選器のハンドルを回す。

店員「トイレットペーパー1年分おめでとうございませう！」

福引の1等であるトイレットペーパー1年分が当たった。

明乃「やった〜！」

美甘「艦長、じゃなくて岬さん凄〜い！」

媛萌「何て運の良い、抽選券1枚しか貰えなかったのに・・・」

榎本「何とも幸運な主だ・・・」

はるみ乗員「そうですね」

美波「でも1年分なんて如何やって、持って帰るんだ？」

明乃・美甘・媛萌「あ・・・」

榎本「取り敢えず、持つて行ける分だけでいいんじゃないかしら」

明乃「そうですね」

明乃達が話している中、榎本とはるみ乗員は、

はるみ乗員「副長、やはり、我々を捕らえる気ですね、彼女達は」

榎本「そうね、何処かで作戦を練るを必要があるわね、岬さん」

明乃「榎本さん、どうしましたか」

榎本「買い物で疲れたでしょう、近くに珈琲店があつたから、少し休みましょう」

美甘「え、でも、もうお金が・・・」

榎本「私が出すから大丈夫よ、但し、他の晴風の乗員には、内緒よ」

明乃・美甘・媛萌「やった!」

そうして、明乃達と榎本達は、珈琲店に入り、テーブル席に着くと明乃達は、好きな物を注文していた。一方、榎本達は、モール内の地図を見て、何かを話し合っていた。

明乃「あの榎本さん、何を話しているんですか?」

榎本「岬さんに晴風の皆、落ち着いて聞いて、買い出し終えた直後から見張られてい
る」

明乃・美甘・媛萌・美波「え!?!」

媛萌 「誰に見張られているんですか？」

榎本 「私と同じブルーマーメイドよ」

媛萌 「ブルーマーメイド!？」

榎本 「和住さん、落ち着いて、騒がしくすれば、一気に捕らえに来る」

明乃 「どうしよう」

榎本 「そこで考えがある」

30分後

寒川 「平賀さん、対象が出てきました」

平賀 「ええ、追うわよ」

平賀達は、ゆっくりと距離を縮めながら、明乃達・榎本達に近づくと

榎本 「小声（皆、走れ!）」

平賀 「な!？」

志度 「平賀さん!」

平賀 「追うわよ!」

寒川・志度 「はい!」

榎本の判断に慌てた平賀達は、すぐに走りながら後を追った。

榎本 「よし、皆、二手に分かれるぞ!」

志度「二手に分かれました！」

平賀「あなたは、晴風の乗員を！寒川、貴方は、私と一緒にいるみの乗員を追うわよ」

寒川「はい！」

路地裏

寒川「平賀さん……」

平賀「可笑しい、確かにここを入ったはずよ……」

寒川「でも、居ませんよ……」

平賀「一体、何処に……」

カラン、カラン、

平賀「ん？これは、一体……」

バン！

平賀・寒川「うわあ！」

平賀「げほお、げほお、寒川、大丈夫!？」

寒川「はい、な、何とか、キヤ！」

平賀「寒川!?!どうしたの!、いた!」

煙の中、何者かが平賀達を取り押さえた、

寒川「は、離して!う、んー!!!」

平賀「ちよつと、離しなさい！う、んー!!!」

榎本「小声（上手くいった?）」

はるみ乗員「小声（はい、上手くいきました）」

榎本「小声（よし、連れて行くぞ）」

続く

第六十話 人魚同士の尋問

オーシャンモール内 廃倉庫

不特定多数の人数に拘束された平賀と寒川は、使わなくなった廃倉庫に監禁されていた。動かそうにも手と足が繩的な物で縛られている他、目隠しもされて、周りの状況が把握できずにいた。

寒川「平賀さん、私達、どうなってしまうのでしょうか・・・」

平賀「分からないわ」

ガチャン

平賀「(ん、誰か来る・・・)」

榎本「さて、お話を聞かせてもらいましょうか・・・」

平賀「榎本二等監察官・・・」

榎本「まず、貴女方は、ここで何をしているんだ？」

平賀「わ、我々は、宗谷監督官の命令で・・・」

榎本「命令？それは、晴風とはるみ乗員を抹殺する事か？」

平賀「ち、違います！宗谷監督官や宗谷校長は、晴風とはるみの無実を訴えています

！」

榎本「それなら、何故、教官や生徒艦を撃沈せよとの命令を出したんだ？一つ間違えれば、全員の命が危険に晒されたんだぞ！」

平賀「あれは、海上安全整備局の上層部の一部が勝手に出した命令であって、我々ではありません！今、宗谷監督官や宗谷校長は、撃沈命令の撤回の為に奔走しています！」

榎本「言い訳にしか聞こえん、裏では、暗殺工作をしているんだろう」

平賀「本当です！我々の事を信じてください！」

榎本「では、宗谷監督官に聞いてみるとするか・・・」

榎本は、携帯を取り出し、安全監督室に繋がる電話番号を掛けた

安全監督室

真霜「もしもし」

平賀「む、宗谷監督官ですか・・・」

真霜「平賀監察官？どうしたの、何かあったの？」

平賀「その、榎本監察官と接触したのですが・・・」

真霜「榎本監察官と!?、彼女は、今何処に!?」

榎本「もしもし、宗谷監督官か？我々がブルーマーメイドに移籍した日以来でしたね」

真霜「そ、そうね」

真霜は、はるみがブルーマーメイドに移籍した日に榎本と会話をしているが今、通話で聞いている彼女の声は、真逆であつた。信頼していた仲間に裏切られ、殺氣立つた声をしていた。

榎本「あの撃沈命令を発したのほ、貴女ですか、宗谷真霜監督官」

真霜「いいえ、違うわ」

榎本「しかし、校長からの依頼と今回の撃沈命令を見ると裏で双方が結託して、はるみと晴風の存在を抹消と考えれば、辻褄が合うのだが？」

真霜「それは、誤解よ！我々も校長も貴女方を救う為に・・・」

榎本「それを証明できる物は、あるんですか？」

真霜「今は、我々を信じてとしか言えないわ・・・」

榎本「私は、そういう言い方をする人が嫌いです、私は、今の話の用に何度も信じた挙句、裏切られました、撃沈命令が出て以来、ブルーマーメイドの関係者を信用が出来ないんです」

真霜「でも、我々が撃沈命令を出した証拠は、持っていないでしょう？」

榎本「そうですね、確かに立証出来る証拠は、ないな」

真霜「なら、此処はお互いに信頼し合う事が必要じゃないかしら？」

榎本「まあ、そうだが」

真霜「今、母さん、宗谷校長がはるみと晴風の補給の為、明石と間宮を派遣しています。私もあの討伐命令を撤回する様に動いています、だから、榎本監察官、我々を信じてください」

榎本「宗谷監督官、貴方が言った事は、一時的ですが信用します、だが、もし、それが虚偽だった場合は」

真霜「な、何をやる気なの!？」

ガチャと金属の音がした。

榎本「虚偽であった場合は、今、拘束している彼女らを秘密裏に処理させてもらう」

平賀「嘘、榎本監察官は、私達を殺す気なの!？」

寒川「そんな、私達は、榎本さんの手で殺されるんですか!？」

榎本「平賀さん達には、言っていない事を教えてあげます、私は、海上勤務になる前は、日ノ出海軍内に創設された特殊部隊出身でね、部隊に在籍していた時は、数十人の海賊（テロリスト）の命を任務遂行の為に殺してきた、つまり、殺しに対する躊躇いも感じない」

平賀「はあ、はあ、（半ベそ）」

平賀は、榎本の過去を聞いて、半ベそを搔いていたが冷静さを保っていたが

寒川「嫌だ！死にたくない！」

寒川は、榎本に殺される恐怖で泣き出してしまった。

榎本「まだ、殺しはしない、情報が虚偽だった場合だ、あと、宗谷監督官、貴方にも言っておく、もし強硬的手段を取ろうなら彼女達の命の保証は、ないからな」

真霜「わ、分かったわ・・・」

そう言って、榎本は、電話を切った。

榎本は、平賀達に他のブルーマーメイド隊員を引き上げる指示をし、スキップパー乗り場に向かった

続く

第六十一話 晴風、確認

榎本達の尋問で宗谷真霜が属している安全監督室は、晴風とはるみの無実を証明の為に奔走している事を平賀達から知った、しかし、その間にさるしまやシユペー、そして、伊2001からの攻撃を受けていた事から平賀達の事をまだ信用する事が出来ない榎本は、平賀に他のブルーマーメイド隊員を撤収させる事を命令し、本場に補給艦を向かわせたを確認出来るまでは、手錠をかけた。その後、明乃達と合流したが拘束された平賀と寒川を見て、四人は、啞然していた。晴風に帰還する際、二艇のスキツパーの内、一艇は美甘がもう一艇には和住と美波は乗り、明乃は、榎本達が使った複合艇に乗った。一方、榎本達は、平賀達が乗ってきた哨戒艇に乗り、平賀と寒川は、腕に手錠を掛けられ、他のはるみ乗員に殺気立った目で見張られていた。哨戒艇を操縦している志度も榎本から殺気立った形相で見張られており、変な真似をすれば、即殺されると悟った。

2016年4月13日 夕方 合流地点

合流地点ではるみと晴風は、停泊していたが天候の変化なのか洋上はかなり荒れていた。

晴風

芽衣「そろそろ榎本教官と艦長達が戻ってくる時間だよね？」

幸子「此処で合流にしたんですけどねえ〜？」

真白「教官と艦長は、まだか！」

鈴「ひっ!?!」

幸子「まだですなえ〜」

真白「何呑気に買い物してるんだ？」

五十六「ぬう〜」

真白「ん?、ひっ!?!」

真白は、五十六を見て驚いてしまう、理由は、昼間に現れた鼠を追いかけて、やっと捕獲してきたのだ。

志摩「かわ・・・いい・・・／／／／／／／」

五十六「ぬっ」

五十六が捕らえたネズミ(?)を立石が持つと、俺の獲物を奪うな!と言うように奪い返そうとしたが

芽衣「こら・・・」

芽衣に抑えられて奪え返せないかった。

幸子「人懐っこいですなえ〜」

真白「生き物は、持ち込み禁止だろ!!」

幸子「飼い主が見つかるまで預かっておきましょう」

真白「んっ……」

晴風 見張り台

マチコ「ん?……」

見張りをしていたマチコが遠くの水平線上に浮かぶ4つの物体を発見し、再度、確認すると

マチコ「!?、間宮・明石および護衛の航洋艦二隻! 右60度!! 距離200此方に向かう!!」

晴風と同じく、横須賀女子海洋学校が有している給糧支援教育艦間宮・工作支援教育艦明石、それを護衛する航洋艦浜風と舞風であった。

鈴「また攻撃されちゃうの?!」

真白「嫌な予感が当たった!」

鈴「ど、如何しよう教官と艦長、まだ戻ってきてないし」

真白「ボイラーの火を落としてるから、いずれにせよ逃げられない!」

志摩「……」

明乃・榎本達、そして、平賀達も晴風に向かっていた。

そうしている間に晴風は、間宮、明石、浜風、舞風に囲まれた。

光「囲まれた！」

果代子「うえ〜」

鈴「逃げられないよ〜！」

ミーナ「ドマヌケ共が何をやっている!!・・・艦長や教官は如何した!?!」

幸子「まだ戻ってきていません！」

ミーナ「何〜!?!」

その時、

晴風 電探室

慧「電探に感あり!、大型艦1、巡洋艦9！」

見張り台

マチコ「前方より不明艦隊、こちらに向かう！」

真白「まさか、ブルーマーメイドの主力？」

真白は、不明艦隊がブルーマーメイドの主力艦隊と思っていた

マチコ「!、不明艦隊より発光信号！」

真白「野間さん、解読！」

マチコ「了解、タツスル、コウヨウカン「ハレカゼ」、シキユウ、ムセンヲアケラレタ

シ

真白「八木さん、無線を繋げてくれ」

八木「分かりました」

そう言つて、八木は、無線の受信を開始した。

八木「どうぞ」

真白「こちら航洋艦「晴風」副長の宗谷真白です」

???「こちら日ノ出海軍、第4派遣艦隊、旗艦いおうじま、貴艦は、直ちに武装解除せよ」

真白「(日ノ出海軍・・・確か京原教官がいた場所)こちら、航洋艦「晴風」、分かりました武装を解除します」

鈴「私達、捕まっちゃうのく！」

芽衣「副長！そんな事、従う必要ないよ！」

真白「無理に決まっているだろう、航洋艦2隻でも不利なのに、向こうは、10隻もいるんだぞ、しかも相手は、正規軍の艦艇何だぞ、」

晴風艦橋に気まずい空気が流れている中、

???「航洋艦「晴風」へこちらいおうじま、すまないが貴艦の隣にいるはるみのある乗員を呼んでくれないか？」

真白「誰を呼べばいいですか？」

??? 「はるみ艦長、京原和泉一佐、いや、京原和泉一等監察官だ」
真白「!？」

続く

第六十二話 砲雷長の暴走

真白「わ、分かりました」

そう言つて真白は、携帯型無線機で京原を呼び出した。

真白「京原教官、聞こえますか？」

京原「宗谷副長、どうしたの？」

真白「日ノ出海軍第4派遣艦隊旗艦「いおうじま」の指揮官が教官との通信を呼び掛けています」

京原「分かったわ」

京原は、無線手にいおうじまとの通信を繋げる様に伝えた。

無線手「繋がりました。」

京原「こちら教官艦「はるみ」艦長の京原です」

???「こちらいおうじま、〃京原君〃とんでもない事に巻き込まれてしまったな」

京原「あの何故、私の名前を・・・」

???「二ヶ月くらい前に君と会っているぞ」

京原「え、まさか、桑田教官!？」

桑田「その通りだ。」

いおうじまの指揮官は、二ヶ月前にあつた元海軍軍人の桑田であつた。桑田が今、指揮官になつてゐる理由を言うとした時であつた。

はるみ乗員「艦長！」

京原「どうしたの？」

はるみ乗員「晴風の砲雷長が機銃を回して来ました！」

京原「え!?!」

晴風

志摩「カレーなんか食つてる場合じゃねえー!!」

真白・幸子・鈴・ミーナ「!?!」

四人が志摩を見ると先まで大人しい性格だつた彼女が赤い目をし、威嚇してゐた。まるで恐ろしい事に合い、身を守るのかのように・・・

幸子「た、立石さん？」

ミーナ「何だカレーって？」

鈴「と、兎に角、逃げないと」

幸子とミーナが立石にかけ、鈴は、この場から離れようと言うが、

志摩「何言つてるんだ！逃げてたまるか、攻撃だあー!!」

芽衣「お、撃つのか、撃つのか？」

志摩は、攻撃すべきだと言い、芽衣は、攻撃と言っているが冗談だと考えた。

真白「止めろ！戦闘は禁止だ！」

志摩「黙れ！」

鈴「たまちちゃん、どうしちゃったの急に！」

幸子「もう逃げるのは嫌！」「そうよね、逃げちや駄目！私、戦う！」

真白「いいから止めろ！」

志摩「離せ……」

芽衣「大人しくしろ……」

暴れ出す志摩を真白と芽衣が押さえようとするが、

真白・芽衣「うわぁ……」

志摩の尋常ない力で壁に叩き付けられる。

ミーナ「お、落ち着け！」

志摩「うううう!!!」

言う事を聞かず、艦橋を飛び出した志摩をミーナが追いかける。

甲板で伺っていた砲雷科の者達は、志摩の様子を見て、飛び移る方向を見た。

そして、7.7mm機銃が配置されている場所に辿り着くと志摩は、躊躇なく銃口を

明石に向ける。

芽衣「本気に撃つ気だ！」

芽衣は、冗談で言っているのだと思っていたが志摩は、本気だった。

志摩「明石、間宮、おめーらにやられるタマじゃねえんだこっちは!!」

志摩は、引き金を引き、7.7mm機銃を四方八方に乱射し始めた。

デッキにいった真白と芽衣、幸子、鈴は、床に伏せる。

それを見た砲雷科は、怯える。

ブルーマーメイド哨戒艇

志度「晴風から発砲！」

平賀「発砲!?!?! 榎本さん、どうゆう事ですか？」

榎本「分からない、誰が撃ってるんだ？」

はるみ複合艇

はるみ乗員「何が起きてるだ？」

明乃「タマちゃん!?!」

はるみ乗員「タマちゃんって、明乃さんの艦の砲雷長？」

明乃「はい、でもどうして……」

強襲揚陸艦「いおうじま」

いおうじま乗員「艦長、晴風から発砲を確認！」

いおうじま艦長「何!、発砲だと?」

いおうじま乗員「如何しますか? 護衛している駆逐艦に反撃命令を出しますか?」

いおうじま艦長「止める! 相手は、子供なんだぞ、武装を向ければ、更に刺激する事になる、出来る限り控えろ!」

いおうじま乗員「了解!」

晴風 デツキ

芽衣「ああ、撃っちゃたね」

ましろ「何て事をしたんだ!」

撃っていた機銃の弾薬が切れ、隣にあった機銃に移ろうとした時、

ミーナ「このドアホウの・・ドマヌケがあ・・!」

追いついたミーナが志摩を思い切り投げ飛ばす。しかし、投げ飛ばした場所は、暗く冷たい海であった。

ミーナ「しまった!」

止めるとはいえ、暗い大海原に投げ飛ばしてしまった重大さに気づく

「タマちゃん!!・・・立石さーん・・・」

甲板にいた砲雷科の者達が志摩の安否を心配する、すると志摩自ら、晴風の甲板に

戻ってきた。

志摩「う！・・・???」

ミーナとデツキにいた4人が志摩の元に駆け寄る。

幸子「大丈夫ですか」

鈴「タマちゃん」

ミーナ「よくぞ、ド無事で！」

芽衣「それを言うなら、ご無事だって・・・」

ミーナが志摩に泣きながら抱き着き、芽衣が誤った日本語をツツコムのであった。

幸子「あら？・・・貴方そんな所にいたの？」

幸子は志摩のスカートのポケットに入っていたネズミに気づく。

ネズミは、海水に浸かっていたのかぐったりしていた。

明乃「タマちゃん大丈夫？・・・」

志摩「うい・・・」

芽衣「いつもの調子に戻ってる」

志摩は、いつも通りの無口な状態に戻っていた。

明乃「聞いて！・・・補給艦の皆は、助けに来てくれたんだよ・・・!!」

真白「え？」

真白が明石のマストを見ると救助を意味する信号旗が掲げられていた。

続く

第六十三話 反乱容疑、取り消し

2016年4月14日 朝

晴風では、明石及び問宮から食料や備品等の補給が行われていた。

同時にはるみも日ノ出の補給艦からも補給が行われていた。

明乃「此方、海上安全整備局、安全監督室情報調査隊の平賀二等監察官！」

真白「誠に申し訳ありませんでした!!、あ、あの、姉さん、宗谷真霜がいる部署の方ですか？」

平賀「ええ、私は、宗谷一等監督官の命令で貴方々に接触したんです」

明乃「シロちゃんのお姉さんって、ブルーマーメイドだったんだ!?!」

真白「うん」

平賀「海上安全整備局は、さるしまの報告を鵜呑みに晴風とはるみが反乱したという情報を流しています・・・ですが、我々、安全監督室の見解は、異なっています」

真白「えっ？」

平賀「先程、教員の榎本さんや艦長の岬さんからも聞きましたが、晴風とはるみは自衛の為にやむを得ず交戦したのですね？」

真白「はい！、その通りです！」

平賀「今回、攻撃した生徒は？」

明乃「とりあえず拘束してます」

晴風 営倉

芽衣「しばらく拘束されるのは仕方ないよね．．．まあ、私も付き合うからさ！」

志摩「うん．．．」

芽衣「いや．．．良い撃ちっぶりだったよタマ！．．．引つ込み思案な砲術長だなくつて思っていたけど、見直した！」

志摩「でも．．．何であんな事したのか．．．？」

芽衣「心に、撃て撃て魂があるんだよ！」

志摩「うい？」

コン、コン

あかね・ほまれ「差し入れでーす」

あかね「立石さんがカレー食べたがっているって聞いたから」

志摩「あ．．．とう．．．」

芽衣「ありがとうって言っている。」

杵匣姉妹の計らいに志摩が感謝しきれない代わりに芽衣が言い、杵匣姉妹は、微笑ん

だ。

晴風 甲板

明乃「すみません、普段は大人しくて、あんな攻撃する子じゃないんだけど……」

平賀「また戦闘になると思って気が動転したのかもしれないわね。」

珊瑚「ほんとに教官艦が攻撃してきたの？」

明乃「うん」

優衣「我々は演習が終わった後に合流する予定だったから状況がよく分からなかったの……」

明乃「あの、じゃあ如何して、私達に補給を？」

優衣「校長先生の指示で……」

真白「お母さ、校長の？」

平賀「我々も宗谷校長に依頼を受けたの、海上安全整備局の見解と違って、校長は晴風とはるみがさるしまや潜水艦を攻撃したとは思えない、と主張しているわ。さるしまの艦長、古庄教官の意識がやつと戻ったみたいだから、これで何が起こったのかが解明できると思う」

明乃・真白「……」

平賀「後程、発砲した生徒には、聴取を行います、それでは、後は頼んだわね、2人

共？」

珊瑚・優衣「はい！」

明乃「ありがとう」

真白「何故、私に？」

明乃「だってシロちゃんのお母さんが私達を信じてくれたから、疑いが晴れたんだもん」

真白「・・・うちの母は自分の信念を貫く人だから・・・」

明乃「それでこそブルマーだね！」

真白「ブルマー!?!」

明乃「うん、皆ブルマーメイドの事、こう呼んでいるよ」

真白「ブルマーメイドを略すな!!、ん?え、ええ!?!」

明乃「うあ・・・」

真白「な、何故、猫が増えてる!?!」

優衣「あ、うちと明石の猫よ」

明乃「そうなんだ！」

珊瑚「補給艦はネズミが発生しやすいので飼っているの」
ましろ「来るな・・・来るな・・・来るな・・・来るな・・・!」

明乃「シロちゃんって、猫に好かれて良いな」

横須賀女子海洋学校 校長室

真霜「晴風とはるみの艦長、乗員共可笑しな様子はありませんでした」

真雪「「そう、ありがとう」

真霜「海上安全整備局にも報告を上げたけど……まだ、晴風やはるみに危険分子がまだ乗船しているのではないかと疑っているわ……学校に戻る前に全員拘束するべきではないかとの意見もあるの……これ以上晴風やはるみに何かあると、私だけじゃなくお母さんの立場も危うくなるわ」

真雪「私の心配はしなくて良いわ、でも、何か異常事態が発生している……貴方はその解明を急いで」

晴風 医務室

幸子「結局、飼い主が見つからなくて、此処で預かって置いて貰えますかね？」

美波「無問題（モーマンタイ）但し、ハムスター……には非ず……」

幸子「じゃあ何ですかね？」

美波「調べてみる。」

はるみ 甲板

平賀「あの、榎本監察官」

榎本「うん？何？」

平賀「あの時、私と寒川を本当に殺す気だったんですか……？」

榎本「あ、これを見れば、分かる」

榎本は、自動拳銃の弾倉から銃弾を一つ取り出し、平賀に渡した。

平賀「え、この銃弾って……」

榎本「そう、私が使った拳銃には、実弾じゃなく空砲弾を装填していたのよ」

平賀「じゃあ、どうして、本気で殺す様な言動をしたんですか？」

榎本「かつて、私が所属していた部隊では、捕らえた人員を尋問する事もあるから、あまり口を割らない者は、心理戦で相手の精神を限界まで追い詰めて、吐かせていましたから、まあ、終わったたら、相手を丁重に扱いますけどね……」

平賀「……(汗)」

平賀は、榎本の恐ろしさを改めて実感し、絶対に敵にしちやいけないと感じた。

続く

第六十四話 武蔵発見と東舞校における「はるみの話」

4月15日 太平洋

太平洋・日本近海海域を三隻の日ノ出海軍所属が航行していた。

第28駆逐隊所属「はまぎく」「あじさい」「さくら」

駆逐艦「さくら」CIC

(通信) 乗員「通信長、哨戒中のSHより報告」

通信長「何だ？」

乗員「横須賀女子海洋学校所属艦を発見したとの事です。」

通信長「その艦の大きさは、？」

乗員「映像を出します」

通信長「拡大してくれ」

乗員「はっ」

通信長「此奴は、武蔵だな」

乗員「しかし、何故、この海域に武蔵が・・・」

通信長「分からん、すぐにこの情報を艦長に報告する」

艦橋

乗員「艦長、哨戒中のSH（哨戒ヘリ）が武蔵を発見したとの事です」

瀬川「分かった。この情報、僚艦二艦に報告する他、この海域に別艦隊は、いるか？」

乗員「同海域には、東舞校所属の艦隊が航行しております」

瀬川「よし、通信長にこの情報を東舞校艦隊にも回ませ」

乗員「はっ！」

同海域

東舞校教員艦隊 旗艦「あおつき」

東舞校主任「教頭先生、同海域を航行している日ノ出海軍から入電です、発第28艦

隊所属艦「さくら」宛東舞校所属旗艦「あおつき」、武蔵を発見、北緯19度41分東経

145度0分で巡行中、無線で呼び掛けるも応答無し」

東舞校教頭「・・・」

東舞校主任「ビーゴンの反応も消えていますし、恐らく無線も含め、電装系の故障だと

思われます」

東舞校教頭「武蔵の位置を横須賀女子海洋学校に連絡しよう、まあ、見つかって良かった・・・

随分と心配しているだろうな、生徒の安全確保は、優先事項なのに、複数同時に

実習艦が行方不明になるとは・・・」

東舞校主任「幸い伊201に乗艦していた我が校の生徒達は、全員無事に救出できましたが……」

東舞校教頭「晴風とはるみは教員艦（さるしま）とも撃ち合いになったというし……一体何が……いや、何が起きたにせよ、直ちに武蔵の保護に向かおう！……哨戒船を呼び戻せ」

東舞校主任「了解、そういえば、今回の教育艦の搜索に何故、日ノ出海軍も参加しているのでしょうか？」

東舞校教頭「本来であれば、日ノ出が出動する事は、無いがはるみが大きく影響してのかもしれない」

東舞校主任「はるみって、最近、ブルーマーメイドに配備された新鋭艦ですか……」
東舞校教頭「表向きは、そう言われているが実際には、教官艦の補助する為に日ノ出海軍からブルーマーメイドに移籍してきた艦だ」

東舞校主任「じゃあ、はるみの乗組員全員」

東舞校教頭「ああ、軍人だ」

東舞校主任「大丈夫でしょうか……」

東舞校教頭「多分、大丈夫だろう、これも聞いた話では、はるみは、女性幹部や新人隊員を育成する為に造られた艦だ、それに乗組員全員が女性で構成されているのは、日

ノ出では、初めてだそうだ」

東舞校主任「我々は、男女別に違う艦を使っています。が日ノ出では、違うんですか？」
東舞校教頭「日ノ出海軍内にも女性軍人は、いるんだが日ノ出では、男女共用で艦に
乗務しているみたいだ」

東舞校主任「やつは、日ノ出と我々では、認識が違うみたいですね」
東舞校教頭「そうだな」

続く

第六十五話 東の間の平穩 前編

東舞校艦隊と第28駆逐隊が武蔵の保護へと向かっていた同時刻、晴風とはるみは、太平洋上にある無人の小島に停泊していた。補給完了後、間宮と明石、そして、日ノ出海軍第四派遣艦隊と離れた後、晴風の釜の温度（機関の出力）が上がっていない事や昨夜の立石の暴走での聴取により、足止めを受けていた。

聴取が終わるまで時間がある事から晴風では、昼の12時まで休息をとっていた。

「うわぁ……ひぁ……」 「ひぁ……マチ……！」

スキツパー

美海「イルカだ！」

百々「生イルカっす！」

晴風 甲板

真白「こら、準備運動をせずに！、そのまま飛び込むのは、止めて下さい！」

明乃「イ、イルカっ！！」

光「対象まで距離、5・0、全長は、2m30cmつてとこ、バン！！」

順子「バキユンとくる感じ！」

美千留「102、10度旋回！」

真白「こんなのにのんびりしてて、良いのか？」

明乃「入学式から此処までずっと、皆緊張の連続だったしね、ちよつとぐらい羽伸ばしても良いんじゃないかな……」

真白「伸ばし過ぎだろ……」

明乃「皆、ホツとしてるんだよ……私達、反乱したわけじゃないって、わかつて貰えた見たいだから……」

真白「とは言え、速やかに学校に戻るべきでは？」

明乃「まだタマちゃん、平賀さん達に話し聞かれてる見たいだし、釜の温度も上がりきつていないから……」

晴風 機関室

麻侖「う、畜生、上がれでえい！」

晴風 甲板

明乃「私達直ぐには、出発できないよ」

美海「は〜い、撮るよ」

真白「しかし、一刻でも早く、着いた方が、」

明乃「明石と間宮は、着いたかな」

真白「えっ?」

明乃「武蔵のところに」

空「今月の運勢は・・・」

桜良「あつ! さそり座は、9位!」

麗緒「おうし座は11位・・・」

留奈「ビリじゃないから良いんじゃない」

真白「因みにふたご座は何位だ?」

空「12位・・・特に水辺では、運気が下がりますって・・・」

真白「わぁ・・・!?!」

美千留「あつ!」

順子「御免、御免」

明乃「あつ、あつ、」

真白「ついてない・・・」

留奈「すごつ! 当たってる!」

桜良「あつ、心理テストもあるよ!、宗谷さん、やってみる?」

真白「やらん!」

空「知床さんやってみる?」

鈴「え!?私!?!」

晴風 倉庫

芽衣「くゝあゝいゝなゝ!、いゝなゝ!、私もキヤツキヤウフフしたなゝ!」

平賀「もう少しで終わるから、頑張つてね」

榎本「おいおい、今、聴取をしているんだ、ボヤのも大概にしろ」

芽衣「はい」

福内「立石さん、もう一度聞くけど、何故、急に攻撃したのか、如何しても思い出せないのね?」

志摩「うい．．．」

芽衣「思い出せないなら仕方ないよ、タマちゃん!、私だつて撃てるものなら撃つてたし、あの状況だつたらさ!」

榎本「．．．確かに急迫不正の侵害、簡単に言えば、追い詰められた人間からすれば、自己防衛が働くのも可笑しくないわね」

芽衣「教官．．．」

志摩「うい．．．」

榎本「だが、本当に自分に危害を加えようとしているのか、冷静に対処しないと悪い方向に繋がってしまう、もう少し冷静さが大事だぞ、立石砲術長」

志摩「うい……(コクリ)」

平賀「終了しましょうか？」

福内「以上の聴取内容をまとめ海上安全委員会に報告します」

横須賀市内にある病院

ブルマー隊員「晴風とはるみの反乱を最初に報告したのはさるしまですよね？、何故反乱と断定を？」

古庄「晴風とはるみが実習の集合時刻に遅れて当該海域に到着し、その際此方から砲撃を行いました、晴風は魚雷で反撃し本艦に命中、これを反乱とみなし報告しました」

ブルマー隊員「遅刻程度で先制攻撃を行った理由は？」

古庄「それは……」

ブルマー隊員「他の乗員は、全て艦長が命令したと証言しています。」

古庄「命令した事は、よく覚えていますが、ですが、何故そう言う判断に至ったか、自分でも、不明なのです。」

真霜「監督官の宗谷です、ご苦労様、差し入れを持って来たわ。」

ブルマー隊員「はっ、恐れ入ります。」

真霜「私も古庄教官から話を聞きたいのだけど、少し良いかしら？」

ブルマー隊員「はい」

真霜「大丈夫ですか古庄先輩？、救助が来るまでの間、海を漂流してつたて、聞きましたけど」

古庄「後輩に心配かけるなんて情けないわね、ありがとう大丈夫よ」

真霜「すみません、調書が完成するまでは、此処に居てもらいます、これ、食べて下さい。」

古庄「・・・生徒と京原さん達に向かって発砲したのに、何故そんな事をしたのか思いつけない何て、自分に腹が立つわ・・・」

真霜「他の乗組員もちゃんと記憶はあるのに何故こんな事をしたのか思い出せないと言言しているんです、先輩だけじゃありません、サルベージしたさるしまの戦術情報処理システムもログが消えていました。」

古庄「ログ、消失、13時20分から機能を喪失していたとみられる、か・・・晴風とはるみは本当に大丈夫？」

真霜「京原監督官のお陰で艦長以下全員無事です、あつ、ちよつとすいません……先輩すいません、ちよつと急用が、それ食べてくださいね！」

後編へ続く

第六十六話 東の間の平穩 後編

晴風 艦内通路

ミーナ「ん、ちよつと小さいの……やあ、主計課は遊びに行かんのか？」

ほまれ「うつ、うん、後で行くよ！」

ミーナ「わし……避けられとるのかな？」

晴風 甲板

福内「聴取を終了したのでこれで失礼します。」

平賀「発砲についての正式な処分は帰港した後で学校から下されると思うけど、損害もなかったし嚴重注意程度で済むんじゃないかしら」

明乃「ありがとうございます。」

榎本「平賀監察官、福内監察官、ご迷惑とご心配を掛けつてしまい、本当に申し訳ない」

平賀「頭を上げてください、榎本監督官」

福内「榎本さんだけが悪い訳ではありません……」

榎本「そう、だな……」

平賀「では、横須賀まで晴風の事をよろしく願ひします」

榎本「はい」

福内「では……」

榎本「岬艦長、横須賀まで再び、貴艦と共に行動となりましたのでよろしく頼む」

明乃「此方こそ、よろしく願ひします！榎本教官」

榎本「うん……」

そう言つて、榎本は、はるみに戻つていた。

明乃「タマちゃん！、お疲れ様！」

志摩「うい……」

明乃「大丈夫だよタマちゃん！、学校にはちゃんと説明して私も一緒に謝るから」

芽衣「また私もばつちり付き添うよ、一応、海に落ちたことだし、念のため保健室に

見てもらおうか？」

志摩「うい……」

明乃「ん？、如何したのリンちゃん？」

鈴「うっ……うっ……」

明乃「皆と遊ばないの？」

鈴「さ、さつき心理テストをやったんだけど……」

明乃「ん？」

鈴「私の性格って、真面目系クズって言う結果で……」

明乃「え!？」

鈴「当たっていると思う、だって私、逃げてばかりの逃げ逃げ人生だし……」

明乃「逃げ逃げ人生？」

鈴「うん、小学校の時にね、皆で肝試しをしたんだけど、友達を置いて逃げちゃったの！」

明乃「……」

鈴「いつもいつも気付いたら逃げてばかりで、そんな時は、いつも一人で海を見てた、不思議と気持ちが悪く落ちて……それで海が好きになって、ブルマーを指して艦に乗って逃げ逃げ場はないから逃げ逃げてやめられると思ってたんだけど、結局また艦ごと逃げ出して……」

明乃「逃げるのは悪くないと思うよ！」

鈴「え!？」

明乃「だって、私達、3回も戦闘したのに無事なんだよ!、それは、リンちゃんが逃げてくれたおかげだよ!、的確に状況を見極めてうまく逃げるのはリンちゃんの長所じゃないかな!」

鈴「……」

はるみ 左舷

榎本「……」

はるみに戻った榎本は、艦の左舷から青く輝く海を眺めていた。

榎本「この世界は、他の国々と戦争がない理想的な場所……でも、戦争という実体という恐怖を知らない人々が多い、もし、晴風と同じ人間が突然、相手の命を奪えと言われたら、彼女達は、躊躇するかもしれない……だけど、私は、己や大切な人の守る為、私を武器を持つて戦う、例え、死後が地獄であろうとも……」

晴風 医務室

美波「無憂無風、帰ってよし」

芽衣「大丈夫だつてさ、タマちゃん！」

志摩「うーい」

芽衣「うー、チュ、チュ」

美波「触るな、漂流物から拾ったから、菌を持っているかもしれない」

芽衣「の……ほ……やっぱ、解剖とかするの？」

美波「……ぬふふ」

芽衣「うーい、行こうタマちゃん！」

志摩「うい！」
美波「うん？、はっ!? . . . んっ . . .」

続く

第六十七話 武蔵、発砲

東舞校艦隊と合流した第28駆逐隊は、武蔵の保護に向けていた。日ノ出艦隊は、東舞校艦隊の後方にいた。あくまでも東舞校艦隊のバックアップという名目である以上、指示無しでは、発砲（火力支援）する事が出来ない。

そして、東舞校艦隊が武蔵を発見した。

東舞校艦隊 旗艦「あおつき」

東舞校主任「武蔵、安定して巡行中ですな。」

東舞校教頭「皆、無事なら良いが……」

と会話をしていると武蔵が主砲を旋回させ、向けてきた。

東舞校主任「うん?……」

そして、

武蔵の46cm砲が火を吹いた。

東舞校主任「撃つてきました!?!」

東舞校教頭「何、如何いう事だ!?!、一体?！」

東舞校主任「四番艦（ゆきづき）から受信、機関部被弾!航行不能!、繰り返す!、機

関部被弾！航行不能！」

曰ノ出艦「さくら」

乗員「武蔵の砲撃により東舞校四番艦、被弾！」

瀬川「何？学生が撃つてきたのか？」

乗員「はい、あつ、東舞校二番艦が武蔵に接近していきます、恐らく、呼び掛けようです！」

瀬川「あれでは、砲撃の的になるだけだぞ！」

武蔵の砲撃により東舞校の四番艦が被弾し、轟沈という事態は、免れたが機関が破壊された事により航行不能となつてしまった。それを見た二番艦（べにづき）は、武蔵に向けて、発光信号を送つたが・・・

東舞校主任「発光信号を送っていますが応答ありません！」

東舞校教頭「我々を脅威と誤解しているのか？、二番艦は接近し音声で呼びかけてくれ！」

べにづき 音声信号

『武蔵の生徒諸君、我々は東舞高の教員だ！、君達を保護する為に来ている、速やかに停船し指示に従い・・・』

音声信号で呼び掛けも武蔵は、砲撃し、二番艦の左舷艦首付近に命中した。

べにづき 艦内通路

東舞校教員 「防水作業急げ！」

あおつき 艦橋

東舞校教頭 「……砲撃を止めさせよう、何所かに穴を開けて傾斜させれば砲は仕えなくなる。」

東舞校主任 「……生徒の艦を、撃つ事になります……！」

東舞校教頭 「砲を撃てなくしてから生徒を保護する」

東舞校主任 「……了解、対水上戦闘用意！」

東舞校教員 「対水上戦闘用意！」

東舞校教員 「主砲、配置よし！」

東舞校主任 「各部配置よし！、非常閉鎖よし！、対水上戦闘用意よし！」

東舞校教員 「三番艦（あまつき）、被弾！」

東舞校教頭 「対水上戦闘！噴進魚雷、攻撃始め！」

東舞校教頭 「噴進魚雷、発射始め！」

あおつきのVLSから数発の噴進魚雷が発射された。

日ノ出艦 「さくら」

乗員 「東舞校艦「あおつき」より噴進魚雷の発射の確認！」

副長 「まさか、武蔵を沈める気では……!？」

瀬川 「いや、艦を傾斜させて、主砲の無力化と速力を低下させようとしている可能性がある」

あおつき 艦橋

東舞校主任 「命中しました!、目標?、速力変わらず、主砲動いています!」

東舞校教頭 「演習弾では無理か……」

日ノ出艦 「さくら」

乗員 「噴進魚雷の命中を確認、しかし、以前として速力変わらず、武蔵、砲撃を続けています!」

副長 「全弾命中し、何故、無傷で戦闘継続が出来るんだ!？」

瀬川 「装甲がかなり厚い出来ていて、数発じゃあ、効果が薄いだけでなく先程、あおつきが発射した噴進魚雷の弾頭は、模擬の可能性が大きい、」

副長 「このままでは、東舞校艦隊が壊滅するのも時間の問題です、艦長、攻撃命令を」

瀬川 「……」

乗員 「東舞校艦隊に至近弾!」

瀬川 「……」

副長 「艦長!」

瀬川「……副長、日ノ出全艦に通達、対水上戦闘用意、武蔵の目を我々に引き付けさせろ」

副長「全艦、対水上戦闘用意！」

日ノ出艦隊は、武蔵の左舷後方に回った、そして、

通信「主砲、砲撃準備完了！」

副長「艦長、あじさい、はまぎく、砲撃準備完了との事です」

瀬川「よし、目標、武蔵の艦尾、撃ち方、始め！」

日ノ出艦三隻の主砲が火を吹いた。

続く

第六十八話 日ノ出艦隊対武蔵

武蔵の砲撃から東舞校艦隊を退避させる為、駆逐艦「さくら」を含む日ノ出艦隊は、武蔵艦尾を砲撃し、武蔵の目を自分達に向けさせた。

東舞校艦隊 旗艦「あおつき」

東舞校主任「教頭！、武蔵艦尾に砲弾が命中しました！」

東舞校教頭「何!?!、どの艦が撃っている？」

東舞校主任「我々の艦隊は、一隻も撃ってません」

東舞校教員「教頭！、後方を航行している日ノ出艦隊が砲撃しています！」

東舞校教頭「何!?!」

東舞校主任「あつ、教頭！、武蔵の主砲の向きが変わります、目標は、日ノ出艦隊です！」

東舞校教頭「不味いぞ！、日ノ出艦隊が砲撃に晒されるぞ！」

東舞校教員「教頭、日ノ出艦隊から通達です！」

東舞校教頭「何と言っているんだ」

東舞校教員「はい、東舞校艦隊に通達する、我々日ノ出艦隊が武蔵を引き付けている

間に貴艦隊は、退避せよとの事です」

東舞校教頭「囿になるといふのか・・・」

東舞校教員「教頭、既に我々の方は、三隻もやられています、速やかな救助が必要かと・・・」

東舞校教頭「やむを得ないか・・・」

日ノ出艦「さくら」

乗員「艦長、東舞校艦隊が退避行動を開始しました」

瀬川「よし、武蔵が東舞校艦隊に追撃をさせないよう、我々に引き付けさせるぞ」

日ノ出艦隊は、引き続き、武蔵に対して艦砲射撃を続けた、そして、鬱陶しく感じたのか、武蔵は、日ノ出艦隊に向けて、砲撃を開始した。

C I C

乗員「目標探知、武蔵、本艦隊に向けて砲撃を開始した模様」

砲雷長「対空戦闘、前甲板V L S、1番から2番、E S S Mを発射用意」

乗員「目標データ、入手完了、発射準備よし」

砲雷長「てえ！」

さくらのV L Sから8発のE S S Mが発射され、武蔵が放った46cm砲弾に向かつていく。

乗員「インターセプト、10秒前、5.4.3.2.1、マークインターセプト！」

さくらが発射したESSMが46cm砲弾に命中した、だが、

艦橋

さくら航海長「総員、衝撃に備え！」

それを発した直後であった。

乗員「うわあ！」

砲弾を撃破した後の衝撃波がさくらを襲い、耐えた者もいれば、飛ばされ身体を機械にぶつかる者もいた。

さくら航海長「皆、無事か？」

乗員「はい、何とか……」

乗員「しかし、何って凄まじい衝撃波なんだ。」

さくら航海長「ああ、あんな攻撃を食らったら、一溜まりないぞ」

迎撃したものの武蔵は、再び、日ノ出艦隊に向けて砲撃を開始した、今度は、46cm砲だけでなく、15.5cm副砲を含めて、

CIC

乗員「武蔵、再び本艦隊に向けて撃ってきました。」

砲雷長「何発だ！」

乗員「副砲を含めて、18発！」

砲雷長「向こう（武蔵）も本気で目でなった、一発残らず、撃ち落とせ！」

乗員「データ入力完了、発射用意、てえ！」

さくらのVLSから8発のESSMが再び発射され、それに乗じて後方にいた「あじさい」・「はまぎく」もESSMを発射した。

乗員「目標命中まで10秒、5.4.3.2.1、マークインターセプト！」

日ノ出艦三隻から放たれたESSMが武蔵の砲弾に到達し、爆発した。しかし、

乗員「主砲弾、全弾撃墜、しかし、副砲弾が接近してきます！」

砲雷長「（もうESSMでは、間に合わない）主砲・CIWS迎撃開始」

乗員「主砲、CIWS攻撃始め！」

日ノ出艦三隻に搭載されている5インチ砲とCIWSが向かって来る副砲弾に向けて弾幕を展開した。

乗員「副砲弾一発、迎撃網を掻い潜り、本艦に向かってきます！」

艦橋

瀬川「総員、衝撃に備え！」

副砲弾一発がさくらの船体に命中し、爆発の衝撃波が艦内に伝わる。

瀬川「被害状況を報告せよ」

乗員「右舷船体に副砲弾が直撃、爆発による亀裂で浸水が発生！」
瀬川「ダメコンを急がせろ！」

続く

第六十九話 平穩な歓迎会

日ノ出・東舞校が武蔵と応戦していた頃、晴風とはるみの方では、明乃「ええ、艦長の岬です、クラス全員急いで艦首付近の前甲板に集まって下さい以上、」

晴風クラス「ん．．．？」

幸子「幸子「何ですかね．．．」

明乃からの突然の招集に晴風クラス達は、前甲板に集合する。

真白「何だ、急に召集かけたりして？」

真白は、クラス全員を招集を掛けたのかを明乃に問うと、

明乃「あのね皆!!、今から、ミーちゃんの歓迎会を始めます!!」

それは、ミーナの歓迎会をする為であった。

晴風クラス「わあ．．．!」

ミーナ「えっ!?、ワ、ワシの？」

洋美「そう言えば、まだだったわね!」

麻侖「おーい!!おーい!!、やちまえってんだ!!」

ミーナ「も、もしかして、コソコソしてたのは!？」

麻侖「良いから、良いから・・・」

明乃「じゃあ、私達の新しい仲間のミーちゃんから、何か一言!」

ミーナ「んっ?、え・・・晴風乗員諸君!・・・全くこの晴風というのは変な艦じゃ、上下関係は、だらし無い、規律は、いい加減、艦長は、全然艦長らしくない!」

明乃「やつぱり?」

真白「異議なし」

ミーナ「こんな如何ゆるい艦、見たこと無い、だが、へ、へペンハイムのシユタルケンブルク城見たいで小さいが風情がある。」

幸子「あのう、例えが分かりずらいです」

ミーナ「じゃ、ニユルンベルクのソウセイジじゃ」

晴風クラス「アハハ!」

ミーナ「それに、こんな風にワシを歓迎してくれるとは・・・晴風乗員諸君・・・ワシは、この手厚い歓迎にド感謝する!!」

美甘「はい、じゃあ皆でケーキを食べようね!」

晴風クラス「異議なし!」

媛萌「ミーナちゃん、何で自分の事を『わし』って言うの?」

ミーナ「可笑しいか：？、日本の映画を見て覚えたんじゃが？」

幸子「ああ、仁義がない感じの映画ですね・：『あなたは儂らが漕いどる船じゃないの・：船が勝手に進める言うなら進んでみいや!!』」

ミーナ「『さささらもさらにしちやれ・：！』じゃな、しかし、上手いなあこのケーキ！」

あかね「これ記念品」

ほまれ「貰って」

幸子「あの映画シリーズ全部見たんですか？」

ミーナ「見たぞ！」

幸子「私、四作目が好きで!!」

ミーナ「兆件作戦か、あれはええのう」

はるみ 左舷ウイング

京原「賑やかね。」

榎本「ええ、そうですね」

京原「幹部候補生時代に遠洋航海で同じ事したわね」

榎本「そうですね。」

はるみ乗員「艦長、海洋学校から入電です。」

京原「分かった、今、行くわ」

晴風 前甲板

鈴「可愛い」

明乃「んっ?」

鈴「それって、艦長・・・岬さんの子供の頃?」

明乃「んん、卒業式の写真・・・ずっと一緒だったの・・・」

鈴「武蔵の艦長さん?」

明乃「んそう、武蔵の・・・」

ピーン

鵜『艦長!!学校から緊急電です!!』

真白「何事だ!」

明乃「総員、直ちに配置について!」

真白「電文の内容は?」

鵜「北緯19度41分東経145度0分地点で武蔵を搜索していた東舞校教員艦及び日ノ出艦隊との連絡が途絶えた、周辺で最も近い位置にある晴風とはるみは現地に向かい状況を報告せよ、なお戦闘は禁止。自らの安全を最優先する事、以上」

明乃「武蔵がこの近くに・・・」

真白「命令はあくまで状況報告だぞ」

明乃「そうだね、出航用意！ 錨を上げ！、両舷前進強速ヨーソロー！ 見張りを入念に・・・」

鵜「艦長、京原教官からです」

明乃「教官から読み上げて」

鵜「本艦は、貴艦と同じ武蔵との交戦はしない、しかし、武蔵からの砲撃に対しては、最低限の防御に就くとの事です」

真白「今回は、あくまでも守りに就くという事ですな」

明乃「うん。」

続く

第七十話 武蔵との戦い

4月15日 夕方

その日の夕方に電文に記載されていた海域に到着した。

周囲を確認したが状況は、かなり悪化していた。

東舞校所属の教員艦数隻が航行不能となり、海上を漂っていた。

同時に日ノ出艦隊の被害も大きく、駆逐艦「さくら」は、右舷側に傾斜していて、通常航行は、困難になっていた。その中でも駆逐艦「のと」の被害は、甚大だった。

駆逐艦「のと」の三カ所から黒煙が上がっていると同時に動きがない事から航行機能が消失したと考えられ、海上には、乗組員を載せた救命艇などが漂流していた。

残存した東舞校艦隊は、武蔵と応戦しているが全滅するのも時間の問題だろう・・・

晴風 艦橋

幸子「凄い・・・凄すぎます・・・」

芽衣「夾叉も無しに行き成り命中させる何て・・・あんなのに狙われたら・・・」

鈴「操艦もあんなに大きな艦があつという間に針路を変えている・・・」

明乃「如何して・・・、何でこんな事に・・・、モカちゃん！、シロちゃん・・・悪

いけど・・・後は任せて良い?・・・私・・・行ってくる」

真白「行くって何所にだ!？」

明乃「武蔵のところへ」

真白「ば、馬鹿を言うな、・・・状況は、既に把握した確認した報告が最優先だ・・・いい加減にしろ!!、毎度毎度、自分の艦をほったらかしにして飛び出す艦長が何所の世界に居る!!、海の仲間が家族じゃないのか!!、この艦の仲間は、家族じゃないのか!!、如何なんだ答えろ!!」

明乃「あつ・・・」

真白「此処は、守るべき家じゃないのか？」

明乃「モカちゃんが、私の幼馴染があそこに居るの、大事な親友なの・・・晴風は速やかに武蔵の射程外に出て!!」

鈴「岬さん・・・」

明乃は、艦橋から飛び出て、スキップパーに乗り、武蔵へと向かった。

はるみ 艦橋

はるみ乗員「航海長!晴風よりスキップパーが発進しました!」

西神「何!?!誰が乗っているんだ!」

はるみ乗員「あれは、艦長の岬さんです!」

西神「まさか、砲撃の只中を潜って、武蔵に乗り込み気なのか!？」

京原「(岬さん、何を考えているの!)」

西神「艦長、どうしますか」

京原「武蔵との距離を維持しつつ、晴風の後に続きなさい!」

西神「了解!」

晴風 艦橋

真白「えー!、もう!、もう!、取り舵一杯!」

鈴「取り舵一杯!」

真白「武蔵との距離はこのままと維持し、スキツパーの動きを追う」

幸子「艦長を回収しなきゃいけませんからね!」

真白「でなきゃ、とつくに反転して、逃げてる!、応急委員は、即応体勢、手が足り

なかつたら主計科の子にも手伝ってもらって!、以上各班に通達!」

あおつき 艦橋

教頭「何としても足だけでも止めなければ、噴進魚雷攻撃始め!」

あおつきのVLSから噴進魚雷が発射される、だが、

教頭「何!？」

動作不良を起こしたのかあらぬ方向へ飛び、海上に落下した。そして、

主任「教頭!?!、増援艦隊との通信が途絶しました!、データリンクも止まっています!」

教頭「馬鹿な!?!、そんな訳が・・・」

主任「着弾します!」

武蔵が放った砲弾があおつきに命中し、航行不能となった。残存した増援艦隊も同様だった。

そして、武蔵は、砲身を晴風とはるみに向けてきた。特に脅威度が高い、はるみに砲撃を開始した。

はるみ CIC

乗員「武蔵、発砲!、目標、3!」

榎本「撃ち落とせ!、ESSM、発射!」

乗員「後部VLS、ESSM、発射!」

はるみ後部VLSから12発のESSMが発射された。

晴風 左舷ウイング

まゆみ「はるみが噴進弾を発射しました!」

真白「何!?!噴進弾!」

その瞬間であった。上空で一瞬の閃光と共に大きな爆発と衝撃波が二艦に伝わっ

た。

晴風生徒達「うわあー!!」

真白「な、何だ！先の爆発は、」

慧「はるみが発射した噴進弾が武蔵が砲弾、全てに命中しました！」

幸子「砲弾、全てに命中ですか!?!」

これには、幸子も驚きを隠せずにいた。

芽衣「す、凄い！、あの武蔵の砲弾を撃ち落とす事が出来るなんて!」

はるみの戦闘力の高さに驚愕している内に武蔵は、砲口をはるみから晴風へと向けた

マチコ「武蔵の主砲、此方に施行中!」

!?!

芽衣「え・・・!?!」

真白「面舵一杯ヨーソロ！武蔵と反航にして・・・」

鈴「はい!」

芽衣「よく逃げずに頑張っているね、今日は!」

志摩「うい!」

鈴「艦長が岬さんが戻ってこれる様にしないと!」

晴風 電探

慧「感あり!?、主砲弾3、此方に向かっています!!、10秒後艦首右前方に着弾!」

晴風 艦橋

真白「読まれてた!」

志摩「120の60」

芽衣「撃つんだ!? やっぱり撃つちゃうんだ!」

志摩「弾で、弾を撃つ!」

晴風、射撃指揮所

光「120度、高角60度に備え!」

美千留「砲塔回す、はい回した!!120度」

順子「バキユンと行くよ!」

晴風に搭載されている10cm高角砲が火を吹いた。

芽衣「流石、長10cm砲!、発射速度が速い!!、ガンガン撃てる!!」

はるみ C I C

乗員「武蔵の砲弾3発が、晴風に向かいます!」

榎本「もうミサイルじゃ、間に合わない、主砲、C I W S、攻撃始め!」

はるみに搭載されている127mm速射砲とC I W Sが主砲弾に向けて攻撃を開始

した、だが

乗員「目標1、目標2、撃破！」

榎本「いいぞ、このまま行けば！」

乗員「!?、副長！前甲板CIWS、残弾無し！」

榎本「何だと！後部CIWSで撃破しろ！」

乗員「駄目です！起動した時は、手遅れです！」

榎本「くっ！（晴風！、回避するんだ！）」

晴風 電探室

慧「砲弾まっすぐ、此方に来ます!!」

晴風 艦橋

真白「面舵一杯、内側に入って！」

秀子「駄目です！間に合いません！」

志摩「350度発射！」

晴風が放った砲弾がギリギリの処で武蔵の砲弾に命中した。

幸子「向こうの見越し射撃に、此方の見越し射撃が当たりましたよ」

芽衣「やった！、やった！」

志摩「うい！」

芽衣・志摩「イエーイ！」

はるみ CIC

乗員「副長、残った主砲弾は、ギリギリですが晴風の見越し射撃で撃破されました」
榎本「はあ……どうなるかと思ったがよかった……」

はるみ 艦橋

乗員「ん！、艦長、スキップパーが残骸に激突、岬艦長が海に放り出されました！」

京原「何ですってえ！すぐにへりの発艦用意！」

乗員「了解！、直ちに……」

言うとした瞬間であった

突如、大きな爆発が轟いた

京原「何の音!？」

乗員「艦長！、あれを！」

京原「な、何て事なの……」

それは、先まで黒煙を上げていた駆逐艦「のと」が弾薬に引火したのか、爆発音を上げ、艦体がVLS辺りで二つに割れ、沈んで行く姿であった。この状況は、晴風や東舞校の乗員も確認した。

晴風 艦橋

芽衣「う、嘘、艦が沈んで行く……」

志摩「うい・・・」

芽衣と志摩は、今、目の前で起こっている事に動揺し、

鈴「あの艦に乗っている人達、どうなっちゃうの・・・」

鈴は、今に泣きそうな状態になっていた。

武蔵により東舞校艦隊の全滅、日ノ出艦の沈没、状況は、日本だけでなく日ノ出までさらに緊張が走る事となる。

続く

第七十一話 本国介入の恐れ

武蔵による東舞校艦隊の壊滅の一方は、学校長の宗谷真雪にも伝えられた。

4月15日 夕暮れ

真雪「東舞校教員艦16隻が航行不能!、雅か、武蔵が本当に反乱したの?」

老松「この報告からは、判りかねます。」

真雪「武蔵の損害は、軽微、晴風とはるみも攻撃から離脱するのが精一杯で、目標をロスト、教員艦は最新鋭だった筈!、なのに如何して?」

老松「電子機器と誘導弾が全て機能不全を起こした模様です。」

真雪「乗組員は?」

老松「3重の安全装置は、伊達ではありませんね、死者は0、軽傷者数名です。」

真雪「はあ…、武蔵の燃料と弾薬は?」

老松「出航時に満載状態なので、推定で、燃料、弾薬共に8割以上残っている筈です。」

真雪「何故そんなに搭載を?」

老松「大和型の砲弾を洋上補給するのは困難ですので……」

教頭「校長!、比叡、鳥海との連絡が途絶しました!」

老松「あっ!？」

真雪「何ですって!？、武蔵以外に所在不明の艦艇は?」

教頭「比叡、鳥海、摩耶、五十鈴、名取、天津風、磯風、時津風ならびにドイツより演習参加予定だったアドミラル・グラーフ・シュペーです」

真雪「そんなに・・・今、動かせる艦は?」

老松「補給活動中の間宮、明石、風早、護衛の秋風、浜風、舞風、偵察に出ている長良、晴風、はるみ、浦風、萩風、谷風のみです」

教頭「山城、加賀、赤城、伊吹、生駒はドッグに入っていて、どんなに急いでも半年以上は動けません・・・航洋艦は多少前倒し可能ですがそれでもせいぜい三か月かと・・・」

真雪「武蔵との遭遇地点に向かわせられるのは?」

老松「晴風以外は、他の艦艇の捜索に出ているので少なくともあと数日は・・・」

ブルーマーメイド横須賀基地

真霜「晴風とはるみからの報告で東舞校教員艦16隻が航行不能になったそうです」

秋沢「武蔵の攻撃か」

真霜「ええ」

磯口「それにしも信じられません、現代の新鋭艦が半世紀以上前の戦闘艦に敗北した

とは、一体全体、如何なっているんだ？」

真霜「報告によると原因は、電子機器の機能不全を起こしたようです」

秋沢「電子機器の機能不全か、考えられるとすれば、『EA』によるものだと考えられるな」

真霜「EA？それは、一体？」

秋沢「EA、Electronic Attack、直訳すると電子攻撃だ。おそらく教員艦隊の全滅は、ジャミングによる艦隊ネットワークが妨害された事だろう・・・」

真霜「成程、確かに今回の事態も正にそれが原因でなった可能性がありますがね、しかし、武蔵には、そのような装備は、搭載していません・・・」

秋沢「これは、私の憶測だが、電子攻撃を行える何かが武蔵に紛れ込んでいる可能性もありうるな」

真霜「その要因も捨てきれませんね、宗谷校長も何か異常事態が発生していると言っております」

磯口「まるで予言者のようだな、で、その異常事態というのは・・・」

真霜「それは、分かりませんが何が発生しているのは確かです」

磯口「現時点で武蔵を追跡する可能な艦艇は、」

真霜「残念ですがブルーマーメイドや他の艦艇は、武蔵以外の不明艦を搜索している

のでもっとも早く追跡が出来るのは、晴風とはるみだけです」

秋沢「うむ、生徒達へ負担を掛ける事になるとは・・・」

その時、磯口が携帯していた携帯無線機に連絡が入る。

磯口「ちよつと、すみません、磯口です、はい、何だ?!?それは本当か?、分かった、すぐに伝える」

秋沢「どうした?」

真霜「あの何かあったんですか?」

磯口「司令、宗谷監督官、緊急連絡です、駆逐艦「のと」が武蔵の攻撃で沈没した模様です」

真霜「何ですって!?!」

秋沢「それは、本当か?」

磯口「はい、救助に行った部隊からの報告によりますと死者は、無いものの多数の重軽傷者が出たとの事です。」

秋沢「他の艦の被害は」

磯口「駆逐艦「さくら」が傾斜により通常航行が困難、駆逐艦「はまぎく」が撃破した砲弾の破片により小破との事です」

秋沢「磯口、全艦に通達、学生艦に対して発砲は控える様に伝えろ」

磯口「は！」

真霜「秋沢司令、今回の事態、貴国は、どう受け取るでしょうか……」

秋沢「おそらく我が国の政府は、衝撃を受けるでしょう、我が国の艦が沈められ、乗員達が負傷した以上、何らかの対応策を取るでしょう、現時点では、日本にいる我が軍で対処する様に指示されるでしょう。」

真霜「そうですね……」

秋沢「だが、問題は、我が国の政府関係者です。」

真霜「一体、どのような問題でしょうか」

秋沢「まだ、首相である安永氏や国防大臣である國栖氏は、まだ大丈夫だが問題は、桐澤氏だ」

真霜「桐澤？どんな方なんですか？」

秋沢「桐澤は、我が国の現政権の副首相と同時に外務大臣を任されている議員で安永氏より議員の経験が長いです」

真霜「その方が何故、問題何ですか……」

秋沢「その方は、かなりのタカ派でしかも急先鋒だ、もし、この人物が強硬的手段を用いる事となれば、日ノ出国に脅威となる教育艦に対して攻撃命令を出す事もある、そして、それを妨害しようとするブルーマーメイド又はホワイトドルフィンは、排除され

る可能性もありうる」

真霜「んっ……(汗)」

真霜が息を呑んだ、もし桐澤が強硬的手段に出た場合、教育艦が攻撃されるだけでなくそれを防護しようとする自分達も攻撃される事を意味する、もし、それが現実となつた場合、この国のブルーマーメイドやホワイトドルフィンは、再建不能にまで陥る事となると彼女は、底知れぬ恐怖を感じた。

まさにそれは、”戦争”であつた

秋沢「とにかく情報収集を急がせる事が先決だ」

真霜「そうですね」

続く

第七十二話 戦闘の後

東舞校艦隊16隻を航行不能にさせた武蔵は、晴風とはるみに対して、砲撃をしたがはるみの戦闘能力と晴風の見越し射撃により難を逃れたが、これ以上は、危険と判断し、追跡を断念、東舞校艦隊乗員の救助に当たった。そして、海に放り出された。明乃は、はるみのへりに救助された。スキッパーも同時に回収された。

はるみ 医務室

北里「体温、脈拍、異常なし」

明乃「ありがとうございます」

北里「とりあえず、晴風と合流になるまでは、ここに居てね」

明乃「はい」

会話の最中、ノックがはいる。

京原「北里さん、入っていいかしら？」

北里「どうぞ」

明乃「きよ、教官・・・」

京原「岬さん、如何して、あんな危険な事をしたの？」

明乃「もかちゃんが、私の親友が乗っていて・・・」

京原「それでスキツパーに乗って、武蔵に行こうとしたのね」

明乃「はい・・・」

京原「はあ、岬さん、貴女の気持ちも分からなくもないわ、長期に亘って通信が途絶えた艦に乗っている友人がすぐそこにいって、助けに行きたい気持ちは、理解出来るわ、でも、艦長である貴女がいなくなったら、晴風の皆を不安にさせてしまうわ」

明乃「うう・・・」

京原「だからお願い、そんな事は、絶対しないで」

明乃「はい、ごめんなさい」

京原「よろしい、あと少しで晴風と合流になるから、ここで待つてね」

明乃「はい」

その時、医務室の扉が勢い良く開く

乗員「艦長！、緊急事態です！」

京原「どうしたの？何があったの？」

乗員「艦内の電子装備に不具合が！」

京原「嘘!?!、この艦は、最新鋭艦なのよ！、急いで対処して！」

乗員「了解！」

明乃「教官、どうしたんですか？」

京原「この艦の電子装備に不具合が起きたみたい」

明乃「え?!、晴風の皆が心配……」

京原「(仕方ない) 岬さん、ついてきて!」

明乃「あ、はい!」

一方、晴風では、

マチコ「前方何も見えません……」

秀子「左舷何も見えません……」

まゆみ「右舷もです……」

慧「電探真つ白です」

鶴「通信も駄目でーす」

楓「水測も聞こえません」

真白「ええい!……一斉に言うな!」

幸子「何か電子機器が全滅ほいです」

真白「壊れたのか?」

幸子「原因不明のノイズばかりで……」

マチコ「星が見えまーす」

真白「天測急いで！」

秀子「現在位置でました！」

まゆみ「北緯35度15分29秒、東経136度4分35秒」

幸子「現在地は？、えっーと!？」

真白「何所だ？」

幸子「あの、その、」

真白「報告は素早く正確に！」

幸子「琵琶湖です!!」

秀子「そっかー琵琶湖か！」

まゆみ「そうだよね！、今入れるもんね！」

聡子「道理で波が静かだと思ったぞな」

真白・幸子・聡子・芽衣「って!?!?・・・んなわけないだろ！」

秀子・まゆみ「スイマセーンもう一回調べまーす！」

はるみ C I C

明乃「教官、どうですか？」

京原「駄目ね、無線が完全に繋がらなくなってるわね」

明乃「そんな」

京原「仕方ない、発光信号で呼びかけるしかないわね」

晴風 右舷ウイング

内田「はるみより信号です！」

真白「読み上げろ」

内田「ホンカンヘノセツゲンヲモトムとの事です」

真白「無線が使えないからな、接舷するしかないか……」

そして、晴風の右舷にはるみが接舷した

京原「宗谷副長、そちらの電子機器は、」

真白「駄目です、電探もソナーも機能不全を起こしています。」

京原「うーん、何が原因なのかしら……」

電子機器の機能不全の話をしている時、

鵜「あの、艦長！、ちよつといい？」

明乃「どうしたの？」

鵜「さつきから全然通信が入らないんだけど艦内から微弱な電波を拾っていて……」

京原「晴風から微弱な電波？」

芽衣「携帯じゃないの？」

鵜「違うんだよね……」

京原「多分、それが原因かもしれないわね、八木さん、案内してもらえますか？」

鶴「はい」

京原「岬さん、行きましょう」

明乃「はっ、はい、シロちゃ、副長、後は、お願い！」

ましろ「は、はい！」

晴風 艦内通路

楓「それでお分かりになりますの？」

慧「無理でしょう、そんなので電波が拾えたら、」

鶴「あっ!!こっち！」

「えっ?」

慧「此処？」

京原「ここは、医務室ね」

明乃達は、恐る恐る扉を開けると

美波「うふふふ……」

慧「うわぁ……!!」

楓「あら?お化けですわ！」

明乃「あれは美波さんだから……」

京原「そもそも、お化けだったら床を見た時、足が無いでしょ……」
美波「むっ？」

五十六「！」

本능が働いたのか、床にいた鼠(？)を五十六が襲いかかる

晴風 艦橋

五十六「ぬっ」

志摩「ちび可愛」

明乃「五十六凄いな！鼠捕まえたんだ!!」

京原「(それにしても鼠の体の色が変わね……)」

明乃「あれ？……色が違う……」

美波「触るな！、それは鼠ではない！」

鶴「通信回復しました!!」

慧「電探復活、これでなんでも見えます！」

楓「周辺の音がよく聞こえております。」

同時に京原が所持していた無線機が鳴り出す

京原「私よ、どうしたの」

乗員「艦長、先程まで続いていた電子障害が解消されました！」

京原「それは、本当!？」

乗員「はい、電子機器の機能が正常通りに戻りました」

京原「分かったわ、引き続き、警戒を継続して」

乗員「了解」

京原「岬さん、先、はるみの電子機器の機能も回復したそうよ」

明乃「じゃあ、ひよつとして・・・」

美波「如何やらコイツが原因だった様だな」

京原「この鼠みたいな生き物が原因だったのね・・・」

明乃「これ何なの？」

美波「遺伝子構造が鼠とは、僅かに異なっていて、更に変なウイルスに感染している、そのウイルスは砲術長の血液からも検出された。」

明乃「ウイルス？」

志摩「うい・・・」

美波「砲術長が暴れたのも電子機器が故障したのもそいつが原因の可能性がある。」

志摩「うい・・・」

明乃「じゃあそれを調べれば、皆を救えるかも？」

美波「可能性はある。」

明乃「五十六凄い!!お手柄だよ!!、今日から提督って呼ぼう!!」

志摩「大!!」

明乃「大提督!」

京原「はは、今日は、五十六の大手柄ね」

幸子「勝手に提督とか付けたら不味くないですか?」

真白「それより学校に報告が先だろう!!」

マチコ『前方に浮遊物?』

晴風 見張り台

マチコ「はっ!?・・・機雷です!!」

明乃「機雷!?、先まで何もなかったのに・・・」

京原「多分、潮の流れに気づかないまま、機雷地帯に迷い込んでしまったようね・・・」

明乃「教官、どうしますか」

京原「むやみに動くのは、危険ね、夜が明けるまでここに止まるしかないわね」

続く

第七十三話 武蔵の対応と冷戦時代・その後の日ノ出の世界

晴風とはるみが電子機器の不具合の原因を探っていた時間帯

日本 東京 国土保全委員会

委員会幹部A 「東舞校の教員艦が武蔵の攻撃で航行不能？」

委員会幹部B 「やはり学生の反乱なのか？」

委員会幹部C 「・・・もし反乱だとして、武蔵が都市部に向かって来たら食い止められるのか？」

委員会幹部B 「晴風とはるみの報告によると誘導弾は効かなかった・・・大量の魚雷を浴びせるか砲撃でなんとかならんのか？」

委員会幹部A 「武蔵には成績優秀な生徒が集められている・・・無誘導の魚雷が射程外からそう簡単に当たるか？」

委員会幹部D 「難しいな・・・だとしたら：同等の戦力をぶつけるしかない。」

委員会幹部C 「18インチには18インチか？」

委員会幹部B 「だが呉の大和も舞鶴の信濃もドッグ入りしている。」

委員会幹部D 「佐世保の紀伊は？」

委員会幹部C 「駄目だ・・・遠洋航海中で地球の反対側だ」

委員会幹部D 「16インチ砲や14インチ砲では太刀打ちできない！」

委員会幹部A 「だが、問題なのは、東舞校だけではない」

委員会幹部C 「ああ、協力関係である日ノ出艦の沈没か・・・」

委員会幹部D 「今の所、日ノ出国からの声明は、ないか・・・」

委員会幹部B 「だが、協力国の艦艇が沈めた以上、何らかの対応策を取るに違いない」

委員会幹部A 「特に恐ろしいのは、沈められた報復としての我が国に攻めて来られる事だ」

委員会幹部B・C・D 「・・・」

国土保全委員会が黙り込むのむ仕方のない事であった。日本と日ノ出の戦力には、大きな差があり、向こうには、航空機（戦闘機）が多数保有している事から飽和攻撃されたら、日本の防衛力の崩壊は、免れないと悟った。

一方、ブルーマーメイド横須賀基地

桑田 「かなり事態は、悪い方向に向かっているという事か・・・」

秋沢 「はい、我が軍艦艇が沈んでしまった以上、本国も黙ってないでしょう。」

桑田 「：：」 北海道事変、そして、西南諸島事変様な事態は、避けなければな・・・」

真霜 「あの、貴国が以前、話していた西南諸島での有事は、聞いていますが、北海道
事変とは・・・」

平賀 「私も聞いておきたいです」

福内 「自分もその出来事を聞きたいです」

桑田 「分かった、北海道事変は、1987年の夏に起きた、我が国と対外との有事だ」

秋沢 「1987年と言えば、冷戦時代の後半ですね」

平賀 「冷戦時代とは、どういう時代だったんですか」

桑田 「冷戦というのは、1945年～1989年の44年間に亘って続いた対立だ」

福内 「対立ですか、何処の国と対立していたんですか？」

桑田 「ああ、北米つまりアメリカを中心とした資本主義とユ連つまりロシアを中心と
した共産主義との対立だ」

真霜 「アメリカとロシアといった大同士の対立・・・」

桑田 「この冷戦では、東西陣営と共に核兵器開発の競争を繰り返していた」

平賀 「その核兵器とは、どんな兵器ですか・・・？」

桑田 「核兵器は、ウランの核分裂を利用した兵器だ、しかし、この兵器の使用は、か
なりの覚悟が必要となる」

福内 「どうしてですか・・・」

桑田「核兵器は、我が国の陸海空軍の兵器の威力は、比喩物にならないくらい強力だ」
真霜「もしも、核兵器が使われた場合、どのぐらいの被害が……」

桑田「……仮説として万が一、核兵器が日本の首都東京の中心で使われた場合、半径数十kmに亘って被害を受け、死者は、推定でも数十万から数百万人にもなる」

福内「数十万から数百万人……」

平賀「たった一発でそれだけの人を……」

真霜「それだけ核兵器というのは、非常に危険な兵器であるという事です……」

桑田「ああ、そして、核兵器を最初に保有したのは、アメリカだ、その後に続いてロシアも保有した、だが、核兵器保有は、ある事が抑制された」

福内「ある事？」

桑田「核兵器の誕生によって、世界規模での戦争は、抑制された」

平賀「核という存在が安定をもたらしたという事ですか……」

桑田「だが世界が二分された事によって諸外国では、代理戦争が起きたがな……」

真霜「代理戦争？」

桑田「大国同士の直接的な戦争が無くなったがアメリカ陣営の国とロシア陣営の国が戦争をする際は、お互いに介入し合っていた」

真霜「大国に代わって、それぞれの陣営に属していた国が戦い合っていたのね……」

桑田「ああ、だが、1970年代からデタントが始まった」

福内「デタント？」

桑田「緊張緩和だ、米露と共に財政難と軍事費の負担の増大によって、今までの冷戦の継続は、出来なくなつて来ていた、その為、両国は、戦略兵器の保有制限条約を締結していた」

福内「お互いに軍備の拡充に制限をかけたという事ですね」

桑田「そうだ、そして、我々がこの世界に来るまで、核は、使われていない」

真霜「そうですか」

桑田「だが、油断はできないぞ」

3人「えっ？」

桑田「この世界でも何らかの原因で核が作られてしまう恐れもある」

3人「……」

桑田「おっと、取り敢えず、冷戦の話は、これぐらいとして、北海道事変に関して話
すか」

北海道事変「別名：ユーラシア社会主義連邦による北海道侵攻」

1987年7月15日 早朝 4:00

ユ連が突如として北海道北部（主に稚内）を中心に奇襲攻撃により始まった戦闘。

事前に侵攻の兆候を掴めないまま、北海道北部の占領を許し、南進を開始し、道内に駐屯していた日ノ出陸軍北部方面軍が防衛に当たったが急な侵攻に防衛線の展開が間に合わず、札幌まで後退を余儀なくされた。

同日、日ノ出政府は、日ノ出国軍全部隊に対して、初の国防出動を下令し、東北・関東地域から北海道に向けて部隊が出動し、残りの信越・中部は、後方支援、近畿から関西地域は、出動待機に入った。

初戦では、ユ連の物量戦術に苦戦を強いられたが海軍の潜水艦による海上輸送路の破壊、北米の介入によって、徐々に各都市を奪還し、同年の11月20日にユ連の撤退により戦闘が終結した。

この有事を受けた後、対外情報収集の強化し、日ノ出軍は、緊急時に即時に対応が出来る部隊を新設した。

桑田「これが北海道事変の内容だ」

真霜「事前に情報を掴めないまま、自国の領土を奪われ、物量を言わせた戦術・・・」

平賀「まさか、別世界のロシアが北海道に侵攻する何て・・・」

福内「でも、どうして、ロシアが北海道に攻めて来たのですか？」

桑田「1980年代は、東ヨーロッパ諸国を中心に民主化への流れが強まっていたから、求心力低下を防ぐ見せしめとして、我が国に攻めて来たんだろう」

真霜「そんな理由で貴国を攻めるなんて・・・」

桑田「だが、戦力輸送するための航路が破壊され、北米が介入となれば、北海道に侵攻したユ連軍も長く持たなかった、我が軍も大きな痛手を受けたがユ連を国外へ追い出す事が出来た、事件から4年後の12月、ユーラシア社会主義連邦は、解体された」

福内「その後、どうなったんですか・・・」

桑田「東西冷戦は、ユ連崩壊の2年前に北米との首脳会談で終結宣言により終わった」

福内「そうですか・・・」

桑田「だが、これは、終わりの始まりに過ぎなかった」

福内「えっ？」

平賀「どういう事ですか？」

桑田「冷戦時代に抑え込まれていた地域における内戦・紛争・テロリズムが起こった」

真霜「・・・結局、対立が終わっても平和が訪れる事は、なかったのですね」

桑田「ああ、正規軍対正規軍時代から正規軍対非正規軍の時代に入り、2000年代後半に各国にPMCが設立されていった」

福内「PMC？」

桑田「Private Military Company、訳すと民間軍事会社だ、21世紀の時代、軍隊が表向きに行動する事が難しくなりつつであった時、PMCの誕

生は、大きな影響を与えたPMCは、国家の思想等に囚われる事なく戦闘自体を利益へと変えている」

真霜「戦闘を利益に変えるなんて……」

平賀「そんな事、許されるんですか……」

桑田「当時の北米・ヨーロッパ諸国は、世論の反発が大きかったからな我が国は、法律の絡みから設立される事は、無かったが欧米先進国では、大きく表に出るようになった。まさに”新たな冷戦”だ」

3人「……」

その後、武蔵の対応について話し合われ、同日の深夜、日本に駐在している日ノ出外交官より本国の意向が伝えられた。

本国「日本のブルーマーメイドと共に事態の收拾に当たれ」

続く